

たちかねて上野の池の五月雨に身の毛もうすき五位のぬれ鷺

と詠し玉ふ、諸人は是を聞て實に尤なりと感涙せぬはなかりけり、右之由聞召尤なりとの上意にて同日即時に四品に叙せらる。

傳に曰重信公四品の御位につかせ玉へて已後何とそ公方へ申上候て子孫迄めうもんの爲め錦之ひたゝれを御免蒙たく思召候而、右之段藤堂和泉守様へ御相談被成候得ば、和泉守様被仰けるは何程公方の御前宜敷人にて御先祖より例ならば御免不被成候、貴公之御先祖に御免之御方は候哉と被仰ければ、無之由御返事に付然者不相成、然共是非く着し度被思召候は、乍慮外私手前に澤山に御座候御讓可申、但公義へは御無用内所に而御着し候とて一衣御讓被成候。

一其節若君様御誕生重信様へ被仰付御著初を奉る、扱又重信事年頃もよし徳松に附度由公方様度々御内意有之所遠國にて御免之儀數度申上ける。

一天和二年花卷より新田貳万石本知八万石に加増拾万石を領す。天和二年二月改元貞享元年とす

一貞享三年三月之頃地震之様に鳴る事度々なり、四五日過ぎて申ノ刻斗り岩鷲山燒、盛岡郡山花卷之境迄悉灰砂降る事雨の如し、北上川、松川の硫黄流入て二三年雜喉

なし、其後都に被仰遣吉田殿に御相談被成候は、我領分岩鷲山と申山有、昔霧山か天上と云、大同二年に田村丸の權現を勸請し玉ふ、一年に一度つゝ諸人參詣致候、精進惡敷候得は忽に攫はる、扱去年中天上殊の外燒申候間何れ官位之望にも御座候哉と被仰遣候得は、正二位大權現と顯し玉ふ、其後別而不思議之事も無之、去共精進惡敷ければ有。

一貞享四年四月廿八日今上皇帝即位、殿様より御使者三上勘九郎。

一天和年中に御城の二ノ丸通り大澤川原方築。

一天和四年五月御下り之節四品之御裝束直垂、烏帽子にて御城の八幡宮に御參詣、御供之内拾人余直垂、烏帽子を着す。

傳に曰公方へ言上有て即姓院様の御牌名を四品に直す、是は五位にて御死去故、子として父に位を増事不孝なる故なりとあり。

一貞享四年五月十五日八ツ時大霰ふる。

一貞享五年九月卅日改元元祿元年とす、元祿二年正月閏月有。

一元祿之始仙北丁櫛形築、其時仙北町同心三拾人中村七郎左衛門預る故に右同心を



下知土を持、奉行則中村氏。

一元祿四年春江戸に聖堂立、同八月閏月有。

一同五年於江戸御隠居。

一七年五月廿七日出羽秋田内野代大炊殿大火事八百軒程死人三百余人。

一同十五年六月十八日逝去御歳八十七歳御牌名大源院殿四品先大官令雲山宗祥大居士と申奉る、其以前延寶五年に志和郡御檢地打始貞享五年打治る、勘定衆小森林與五右衛門女鹿源兵衛片岸庄之助右檢地役なり。

一三拾代信濃守行信公は重信公之三男也、御舍弟何も御早世元祿五年七月御跡式被仰付、頓而翌年五月廿七日御入部國家之仕置被遊ける、殊に御慈悲深く民百姓迄難有と拜さぬ者はなし、奥君は長州長府之城主毛利甲斐守綱元公之御妹なり、殊に行信公は文武に闇からせ玉はず、中にも御馬は一流を究させ玉ふ、弓は大弓を爲引玉へ夫故新八幡御造立有、毎年八月十五日には御祭り是有朔日より十五日迄競馬流鏑馬有。

一元祿八年春南都東大寺大佛殿再興可被成候由にて、上人龍松院より勸進帳諸國御

大名に廻る、江戸御屋敷にも參候間右之由同年三月の頃御國へ申參御百姓壹人壹錢宛、諸士心次第なり。

一元祿六年領内世の中吉同七年五月閏月有。

一同八年不作毎年此年より不宜同九年今年御參觀可有之所に、去年不作に付右之通言上被遊御用捨被成候、依而翌年御參觀なり。

一八年世の中惡敷非人多くして奥通閉伊民百姓餓命に及故、廉を御免被遊ければ諸人廉を打て賣買漸く助る、然る故か以後鹿鮮し、翌年世の中吉といへ共秋を待得ずして五六月の頃迄人多く死す、八年相倍也。本のまゝ、不分、死、のことなるべし

一同九年七月之頃新山橋落る、同十年二月閏月有、同三月廿三日於江戸御隠居様御座候御下屋敷類火。

一元祿九年七月十三日松前之内江刺と云處に朝鮮人難風に而着岸夫より森岡に來八月八日着對面、大將分は季先達と云て手蹟嚴く所望して渠か筆を所持する人森岡にも澤山是有、二日逗留して江戸江登る已上八人也、其方公方より朝鮮に右之由被申遣ければ朝鮮より頓而御返事之由、右之季先達方より殿様は書狀參候由、根市



權四郎是を達上聞返書之文は權四郎作扱亦唐人罷立候日雨降る。

一同九年正月關所にて五ヶ月休を被仰付、十ヶ月勤て五ヶ月休其内は各々心次第に田屋に引越も有貴賤色々なり、右は去々年の不作故如斯。

一同十一年夏より深城御普請有て御茶屋立名を藤ヶ森と云、其後楓を植て楓ヶ森共云、右之事江戸へ聞得南部に而は新城を築と專説有。

一同年七月の頃江戸より犬下る、竹合子の籠に入て雜人同心歩行杯添て犬廿正余程籠七ツ程に入て下る、江戸に而殊之外犬を御大切にし若犬惡敷致候者死罪流罪一類皆亡ける、子細を尋に當公方様綱吉公は正保三丙戌御誕生故戌の御年故に如斯と云。

一同年六月新山片原丁火事。

一同十二年御參觀此時去年在所に而新城を築候由風聞す、上意を不伺無調法の由御不審有、其時宣ひけるは新城に無御座候、深城と申景地の山御座候處に茶屋を立申候由言上す、其時も御取持能く尤の事と上意にて御首尾好相濟、同年十二月閏月。一同年十二月四品に被任。

一同年三月三日大雪降、其頃より儒學風流家中貴賤學文せり。

一同八月十五日諸國大風森岡も子ノ刻より吹、右之風は上方伊勢より吹出ると云、夫に付色々雜説有、夜明て吹但南風なり。

一其以前度々上様御殿中に被召御能有之、中にもシャツカウの面召て山姥御能有之、公方様御悅喜淺からず森岡に而も度々御能有又折々管絃を被成御覽候。

一同十四年大餓死非人多し、去年之不作に付米壹升七拾貳人より八文迄、説には此年より六十一年已前寛永十八年辛巳大餓死成り、土民の言に巳ノ年の餓死とは是れを云、此度も寛永十八年に歸り辛巳ノ年成故に左も有んと風説せり。

一十四年太田源四郎平館某右兩人被仰付井のさらい。

一十三年三月四日の申ノ刻地震、其夜の子丑ノ刻十三日町裏新丁より火出、馬町十三日町迄焼家數三拾軒余。

一同年五月の頃本誓寺火事。

一同年夏頃殿様儒學御好被遊に、付、依而儒者發向。

一同年十二月廿九日隼人様御死去。



一同十四年正月四日之夜去る廿九日に隼人様御死去御飛脚下る五日未明門松引但  
正月六日なり

一同十四年の丘達釋典の札を打本の

一同刑部様江戸へ御登り御家督極備後守様と改む。一條脱落し  
て後にあり

一同十五年信濃國善光寺如來御着仙臺より南部に御移り郡山來迎寺に一日逗留夫  
より森岡永福寺に御入男女寺内市をなす朔日より八日迄の開帳なり。

一同十四年夏前脱落の條頃刑部久信様御上り御猶子御願御調て備後守と號玉ふ是は御舍兄隼人  
様去冬御死去に依而御舍弟御願如此毛利甲斐守大江の綱元公の御娘御結納同七

月御興入有之同六月十九日夜京都大雨廿日朝より雷禁中二城町之寺社百三ヶ所  
に落る由人死有之並に大洪水依而加茂大明神其日之御番に當り百日閉門十五年  
八月閏月右同年五月末より江戸に而重信御隠居御不快六月彌々御重く依之公方  
様へ言土可被成筈六月十五日行信様森岡御立被遊道中の須加川に至而御飛脚に  
逢ひ十八日御遠行に而是より御歸被遊。

一七八月の頃行信公御不快九月之頃以之外御大切久信公九月十二日御下着御醫師

中村玄悦老も同十六日着十月二日登同十一日行信公御遠行同久信公江戸へ御登  
り。

一夏之頃百姓共熊之子を取て殿様の上る然所に其母に而有之候哉一番熊森岡大工  
小屋前へ來り諸人を追散し三日程居る鐵鎧に而打候様被仰付候處逝る。

一同年大清水下川原を瀬川平藏申上新田畑とす。

一同六月四日大雨大洪水にて橋落て紺屋丁へ流る是に依而仙北丁東丁西に下り丁  
割居住す同十五日又大雨大洪水。

一同月十八日江戸にて御隠居様御逝去江戸に而重信公御大切之由櫛の齒を引様に  
御飛脚參り候間行信公御立被成候所に道中に而御死去之由御聞御歸鈴木金兵衛  
六月廿二日御使者に登途中歸る。

一五月の頃閉伊にて鯨卅四五頭程鱸に追れて陸に上る國中は不及申他國迄賣買す  
油澤山なり但し鬚は是なしと云或は是を眞甲と云。

一同七月十日御隠居様御尊骸下着二七日始に備後守様御子岩次郎様と云。

一同月十六日聖壽寺にて御葬禮有前日に諸士月額取て參。



一其已前儒道御學の時より御城にも諸家も勸略被仰付依之御城御臺所にては一切御用無之御新丸斗りなれば御臺所御護り火消る是は甲州より御先祖光行公御持參之火と云秘すべし。

一七八月下旬より殿様御氣色不宣是に依而備後守様江戸より御下り御病氣を御覽九月始御登り。

一九月中旬に上様より中村玄悦と云御典醫御下し色々養生其内厨川方八丁見物十月始に中村玄悦登。

一同年十月十一日在所にて逝去御歳六十一歳御牌名は德雲院殿四品先信州玉翁宗珊大居士と奉申聖壽寺に有なり。

一十一月九日御葬禮前日に月額取其年は冬雪不降御葬禮之時殊之外ぬかる終日少し曇る翌正月は土の上に門松立而朔日より七日迄は殊の外氷て一切ぬからず夏の如し。

一久信公御忌中之内御跡職被仰付御飛脚來る右爲御祝儀於御新丸御帳に付。  
一同十二月廿八日殿様御日見公方様は綱吉公色々献上。

一元祿十六年正月御祝儀如例年殿様備後守様江戸。

一二月廿八日於江府御老中様方御招請是は御家督御祝儀に而。

一六月六日明より晴天晚小雨殿様御入部森岡は午ノ中刻御着直に御本丸被御入也、御迎之諸士群を爲す又安田貞顯覺書には五月廿六日御入部と有。

一七月九日大雨大雷電依而同日晝山田大學殿屋敷雷解

是は利直公御弟に而當君久信公には從弟伯父なり

平時四百石を領す屋敷は夕顔瀬橋端

一同月森岡三ヶ所下馬書替。

一今年四月之頃より小姓ヶ嵩麓の笹に花咲實麥の如く穂出る所に頃日實のりて麥の如く依而在々諸百姓并に貧なる者共取立粉に引而餅に拵食ふ於森岡商賣せり壹升拾貳三文斗り也女童子共ら老人男女も彼の山へ行て是を取て日に壹斗貳三升も取候と云勿論盛なる男は貳斗も其余も取ると云右之笹の實森岡に而けんとなん屋と而殊の外調げんとんへ引き交賣と云然共去年は凶作により今年は米高直しけるに依而入口之者共是を食せずと云者なし去共多食たる者は身軀はれ顔色なくして終に死する者數多有と云是如何と云ふに竹は人の血を破り惡敷者猶に



其實なるにや如是、此年より毎年處々に少宛に出る今年の事は夥敷事也、彼の山々行者一日三千人余之者共毎日參候に廿日余り參る故一人に付壹斗つゝ取ても夥しき事、彼小姓かたと云は姫神山の事也、此山は荒神にて。異本にもなし

公方へ献上有之と言事有之

一六七月の頃諸士の御渡被成候御扶持方米無之候故二三ヶ月の御米不相續是は去年不作故如此、其時町之方越前より米請負仕候而三千駄、其米を越前より船にて運送し田名部野邊地に着岸し夫より盛岡へ參り諸士へ御扶持方被下候、殊の外粉細くにへ安くふへ不中と傳承候所にかぶと云ふ米之由、右之町人其後御取立五拾石被下候と云、何か家名不知追而可考。

一今諸家中五ヶ月休み相止右五ヶ月休と云は去る元祿九年之頃信濃守行信公の御代如是、爲御救五ヶ月休て又十ヶ月勤め休之内田屋成共銘々好の處々に引籠勝手仕候。

一寶永元年甲申、元祿十七年四月朔日改元寶永元年とす。

一二年正月九日殿様始御城御役人衆不殘御新丸へ御引越被成候、是は去る二日夜大地震仕候、就中御城は高き所故強くゆる女中殊の外さわきしかば、はやく正月七日過ぎ候はゞ下の御移り可有と思召候て今日如此、是は重而の用心の心にて如此。

一二月中旬江戸にて岩次郎様御死去、干時三才金地院に、是は當殿様御子也御母上は毛利甲斐守綱元公御娘也しか御なけき痛敷被思召ける御なけきの余りに詩歌を被遊けるとなん後日當地へ下る爰に記す、

堪哀二月夜更鐘 三歳思觀和蔓中 恨藥當時居々事 情同愁涙會無窮

思ひきや千代もといのる宮かへて母そのもとの根になけくとは

と被遊ける痛敷御事なり、御飛脚は今月廿九日盛岡へ着す。

一三月三日晴天、今日上巳御祝儀として御城并諸家中面々祝之御目見有之、初ての御目見相勤申候衆中山田龍右衛門嫡子伊藤所右衛門子共美濃部子矢羽々喜兵衛子伊藤長左衛門子半之助干時十六歳其外彼は大勢也、今日は御目見は江戸にて若君様岩岩次郎様御死去故請させましと下にて申候所、上意に依而兼而支度も可仕、其上岩次郎事は未二三歳之子供と云ふ可忌と上意にて御情を被思召如是、被爲請候



と也。

一奥州森岡城本丸西南之方二階之角櫓疊取石垣壹ツ所築直如元普請仕事、二ノ丸東之方櫓門疊取石垣壹ヶ所築直如元普請仕事繪圖書付之趣得<sub>レ</sub>其意候願之通可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申付候恐々謹言

寶永二酉六月廿一日

土屋相摸守政直

本田伯耆守正永

稻葉丹後守正道

秋元但馬守肅朝

小笠原佐渡守長吉

南部備後守殿

一惣而今年は四月頃より雨降り申候、今月始に上方より旅僧森岡に來り道中志和邊より西根之毒ヶ森を見て、扱々あの山に雨龍か住し故大方今年は此國に雨降候半と云て森岡に來り、毒ヶ森の雨龍をなためんと殿様上意に而、所之役人并に聖壽寺

杯同道して毒ヶ森の上に堂建立す、名を青龍山大權現と改、是故か夫より雨不降、彼僧夫より松前に行申候山、色々の寶物持參人はたの觀音ぶつもの具、蛇の角、雨龍など持參候山、其後山號を聖壽寺五穀山と改、其後又根市權四郎苗生山と改と言。

一其已前毎夜地震之如く鳴事度々也、風説には松前之山燒申と取沙汰去共分明不成、然所に日を経て田名部浦へ海より波に打上候何とも、其形見分りかたき魚上りける、不審に思ひ能々見れ共人の形にて手之指の節合八尺余惣躰の長さ七間程に承る、所之者共右之肉を商買す、森岡にも來食する人餘多有之、風味不宜、然に右之指之骨を佛として文字を書往還之辻に立る所所々有之、又風之除とて百姓の門戸に懸置候山承申候。

信直公之傳譜

一大膳大夫信直公は右馬頭政康公之御次男、左衛門尉高信之御長男也、高信公其頃御舍兄安信其御子晴政公之御時代、御陣代として旄拜を預り御領内之分逆族を誅し隣國之弱將を攻亡し玉ふ。



一 信直 大膳大夫始 天文十五丙午年春岩手郡一方井城にて出生、母一方井村一邑之領主一方井禪門 一方井は阿部姓當時秋田家より離る 出羽秋田住居之時右之家分に而其頃一方井刑部左衛門と申候所、隱居剃髮して禪門と申由、是より先信直公の御父左衛門之尉高信、御本家安信公其御子晴政公之御代迄御陣代被成御採配を預 大小諸士 御領分之逆族を誅伐被成候、其頃岩手郡數代御手に不屬候故、數年高信出陣被成、其頃一方井御宿陣に御宿にて二心なく御味方仕候而御宿御旅陣申上候由、其頃一方井か娘十七八歳に而何方へも不縁器量人に勝に付高信彼娘に通し、既に懷胎仕候由、貳三年過岩手御手に入候而、夫より三戸の歸陣被成候後、信直公御誕生、其頃二三月之頃に候哉、南より北へ通り之鶴一方井館の上にて暫舞し由、一方井氏始其上南部より被付置し、諸士目出度事と祝ひ申候由、申傳候、其節御産家御祈禱其外万事之事一方井の山伏自光坊心を盡し相勤候由、則御名も九郎殿と奉號御歳十二三歳迄一方井に而御成長、自光坊御手習御物讀杯御教候由、其節高信の御本妻御志つと深き御方様故、暫一方井之息女も殿様も三戸へ御越被成候事、成兼御住居御はなれ被成御座候。

一 十二三歳之頃一方井より三戸の御越被成御親父高信様と御一所に田子の館に御住居被成候、依而田子九郎様と唱ひ申候。

一 御本家彦三郎様には御女子斗り五人被成御座候、而御男子無之候故、右田子九郎様段々御成長故、晴政公御養子御定に而段々御成長に付、嫡女様の御縁組三戸之御城の御引取相濟御養子に相究め、既に若殿様と申唱候由。

一 其後九郎様之御實父高信様、津輕の御出陣被成、津輕不殘御切從ひ、直に津輕郡代御勤御次男彦次郎様も御引取、津輕之内石川と申處に居城被成候故、高信様御事を石川左衛門尉様と申唱候、年過高信様御死去に付、御子彦次郎様政信直に御郡代被成、九郎様御事は御本家御養子津輕の御出不被成、三戸御城に御一所に被成御座候。

一 其後御本家晴政公之御男子出生、段々御成長被成候に付、晴政公と信直様少々御挨拶遠々敷被爲成、其上信直様御奥様御死去故、旁々三戸御住居信直様より御願被成、御家督之事は鶴千代様被仰付、私事は親高信時之通、田子に被指置御手先之御用被仰付、度候由、達而御辭退被成、田子に御引取被成候由、其頃御歳三十拾余に被成候由、則御名代に所々御出陣等被遊候由。

一 其後御本家晴政公御死去、御幼息晴繼公御本領御相續御名を彦三郎様と御改、夫よ



四〇二  
り一兩年過而御疮瘡に而正月四日年號不知御年十三年にて御死去、依而御跡式無之御家中騷動仕候。

一御本家彦三郎晴繼公十三歳に而御死去、御名跡無之御家中騷動、其頃九戸左近政實御家中一番之大身に候へは御名跡可然と申者も有之、一決不仕候處に北左衛門信愛と云者、田子九郎信直様、石川左衛門尉高信様の御子に而從弟伯父殊に一度御姉塔に成玉ふ御身に候得者、是程の御跡目不可有之と達而申候得ば、南東北之面々其外身近き者共何茂尤と決定仕候而、北左衛門御迎之者百人斗弓、鐵鉋爲持、田子へ御迎に遣し、信直公を三戸御城に奉入候由。

一信直公三戸御城に被爲入、南部二十六代御相續、晴繼公之御葬禮本三戸聖壽寺にて御執行、御歸之節九戸方之者共大勢狼藉仕候由、急き之事故、信直様川守田館の三戸はつ御駈込御防、館主川守田常陸其外大勢忠節仕候由、寄手を信直様御直々鐵鉋に而寄手之大將御討留被成、皆々退散し、夫より三戸に御歸城、其後御領分中、御觸被成、御世繼之拜禮御受被成、御領分御治被成候由。

一御繼目之時、信直公御執心不申者も數人有之候得共、其儀一向御存知無之様に被成

御繼目相續御目見罷在り、又は御使者等にて御祝儀物指上候類も何も一同に見事御挨拶被成、親相背候而、子は忠心有、子は相背候而、父忠心も有ケ様之類も其忠有方へ御負被成、不忠成方迄御罰不被成候様に被遊候而、御身大慶之本元を正ふ被遊候而、諸人自然と奉服候事、大慶大量と可申上候哉、御繼目之時、節壹人も科過に被仰付候者一入無之よし、葛卷家に信直公より御文書有、父子兄弟之心色々成をも其能方と而御賞被遊候と相見申候、左候後は葛卷に不限、皆左様に御座候時は御領分安全可成事に而色々御家中二ツ三ツに相成候得共、御繼目之儀一向御沙汰不被遊、一人も上より御咎被成候者無之、後に赤尾氏兄弟二人右様之儀に付手前より願上候而御暇拜領仕候、是も侍輩に一言發候事故言を恥に存候而、御暇願候得共、殊之外重信公之御大量を恥候而、後悔仕子共之内願上御家中に仕候、只今池田伊兵衛先祖に御座候ケ様之思召入は御大將之末代之鑑と重信公之一儀申傳候。

一晴信公御代御繼次段々御威光御手廣被爲成候得共、晴繼公御代々至り御分國之内鹿角郡等は又々秋田に心を寄候様に罷成候、岩手郡も大勢之内自立之様に罷成候者も有之候故、鹿角岩手郡に度々御馬を發せられ、大形御切平け降參には本領を被



下兼而味方に而罷有候者には御加恩被下、夫より天正十四年九月、平石御攻取被遊、平石は岩手一郡に而御座候得共、一旗一溝之場所に御座候付、右之通に御座候山、閉伊郡は久慈野田、褰綿穴澤、江刈葛卷方より段々御切從ひ被遊候得共、大槌、宮古、釜石、遠野は三戸より御手支六ヶ敷、其後志和郡御攻取已後、櫻庭安房大將に被成候而、大廻海道より被遣閉伊一郡御手に入候由。

一志和郡一郡は越前國足利尾張守高經の子息家長と云人、將軍尊氏公より志和郡拜領下向子孫代々住居仕候處に御實父高信様御代より色々御手段被遊候得而、天正十六年一郡不殘御切取被遊候由。

一其後遠野の御手入被遊候、遠野家中鱒澤と云もの御味方に被成色々様々御軍法有之、此方より櫻庭安房大將被仰付候に付、大軍被遣候處、遠野孫三郎住居不相叶、氣仙郡之内瀬田米と申處に立退候故、遠野漸々御手に入候由、是は天正十七年之頃に而可有之と奉存候。

一櫻庭安房大將に被成、大槌釜石迄御切從是に而閉伊一郡不殘御手に入、裨貫和賀は領主貳入有之、和賀は多田薩摩守と申候、裨貫は裨貫大和守と申候、右兩領主上方の

出仕不仕數代領地知行して罷有候。

一天正十三年羽柴秀吉武威中國に轟、既に任關白、令前田筑前守利家爲執事、押司可爲掌握日本之風聞有之、信直公北左衛門信愛御相談被遊、加賀之國の御使者を遣奉對上様、全御疎略之所存無御座候、就中近年隣國領内共に殊之外爭亂之時節故、上洛仕候事は成兼申候、此段可然様被仰遣候處、利家より委細御承知之由被仰遣候。

一天正十四年秀吉公の信直公より御使者を以て鶴鷹一御馬五疋御太刀一腰始而獻之、八月十二日御朱印被下。

一同年岩手郡平石の御出馬九月掌握手束。

一同年羽州比内郡御手に入、家臣大光寺左衛門智謀依而如是。

一同十六年より十八年二月津輕右京爲信逆心、津輕郡代猶山劍帶南右兵衛を追散津輕押領寸、其頃九戸政實逆心故、津輕の加勢延引如此、其後秋田城之助實季津輕の加勢爲信相州小田原の行津輕領主之由申上候而津輕安堵す。

一同十八年秀吉公相州北條一族御追伐之爲、小田原御發行之由、依之信直公三戸御出陣北國の御懸り笛吹峠を越武州へ至る、夫より小田原參陣馬鷹を獻御目見、隣國領



内争亂之時節遠國早速之參陣御満足被遊候山御意御盃頂戴其上梨地韃金拵來國次之御脇指并に唐織御羽織御衣服等被下置候秀吉公仰には小田原若永陣に及は、東國之諸將共重而御陣觸可被成其節直參陣すへし、領内靜謐不成由早く罷下可休息とて則南部七郡案堵之御朱印天正十八年七月二十七日附也又御意には小田原落去可有之候間、直に奥州を御進發御仕置可被成候間、御道筋諸軍亂妨無之様に諸民安堵之爲御軍制之條々之高札。

一秀吉公小田原より御進發羽奥州御仕置として御下向に付、信直公早速東海道本道を馳登、野州那須野に而御目見得。

一天正十五年六月廿九日付誓紙權少將利家。

一天正十七年八月從秀吉公御印書被下候、其方同苗親類并檜山城主以下令同道可上洛之由聞召候路次無由斷參陣可有候。

一天正十七年之夏信直公より木村奎之助御使者に而加賀利家公へ御書を以て召仰遣候、其頃利家公京都御詰故奎之助罷登り御書御口上之趣申上其趣は早々罷登候而秀吉公に御禮申上度候得共、領内一揆有之其上隣境不穩延引仕候、何卒一族親類

召連上洛仕度候、此段被仰上被下度由也、則淺野に御相談秀吉公に言上之所、從秀吉公御朱印被下候、其文書に曰

其方儀同苗親類等檜山城主以下令同道可上洛候由召聞候路次無異儀候様對越後宰相被仰遣候猶羽柴加賀宰相被仰遣淺野彈正少弼可申者也

八月二日

御朱印

南部大膳大夫殿

將又當年秋田表作毛越後宰相と仕候而刈取所務仕候様に被仰出

右御朱印書利家より添狀に而寺前縫之助殿使者にて被遣候、利家より書狀之趣

將亦今度御理共淺野彈正少弼方に被申上候段馳參被申候間於向後も御入魂度々我等事は京都稚進候間淺野方畢竟去夏木村奎之助方に指上御頼肝要候、御狀之

趣具令披見候而上洛之儀即披露候處、尤之旨被成遣御朱印候、越後にも路次等可有

馳走之由被仰出被成御朱印候、先以珍重に存候此度御迎可遣所秋田表從赤津令亂

入御境津輕及行御家中にも叛逆之族有之由粗其聞千万無心元次第に候、此上無越

度様に御調談專一候、當秋中か來春は早速上様被遣御馬出羽奥州兩國之御仕置堅



可被仰付旨御掟候、北國之人數悉拙者被相付爲先手、至秋田面可致出馬之條、近年御  
内存之鬱憤無殘所可屬御本意に候間、手堅被相備隨分御山斷有間敷候、秋田之儀當  
年は爲御藏納貴所に而上杉方に申遣奉行所務候様にと被仰出候、御様子於は全之  
助淵底存知候儀に候間、可被申披候、猶寺前縫殿助可申候、恐々謹言

八月七日

利家

南部大膳大夫殿

參御返報

- 一天正十八年御臺領之内和賀稗貫其外木村伊勢守領江刺伊澤。
- 一天正十九年九戸没落、九戸か領知居城其外志和郡稗貫和賀遠野被下。
- 一九戸歸陣之節氏郷長吉に御相談不來方を御居城に被成度由。
- 一文祿元年秀吉公朝鮮御征伐、依而御觸軍勢被召連御登肥前國名古屋に御在陣、同三  
月十七日家康公之後陣に屬し京都に被發候。
- 一名古屋御在陣之内御料理或は御茶或は猿樂等拜見被仰付候由、又或時は名香頂戴  
被仰付候由。

一慶長二年三月岩手郡不來方新築城御普請有、右は去年九戸御征伐之時諸將御歸り  
之節地方御見分に候得共其後朝鮮御下知に而被仰付度候由御願候處、先年淺野彈  
正檢分見届之上は再檢使にも不及御勝手次第可申付候由上意に而如此候由、都而  
新築城は御檢使等罷下り繪圖地形共に御改御見届之上に而被仰付候義に候得共  
萬々御用捨如此。

### 高信公之事

一拟糠部左衛門尉高信異本にと有と申は、南部二十二代右馬頭政康公之次男にして右馬  
亮安信公之弟なり、三戸之城に而出生し成長して達戸之城に住す、智天性武器賢量  
衆人に越飽迄孫吳之兵書を誦じ積年之戦功計るに暇なし、高信若頃安信逝去し玉  
へ一子彦三郎晴政既に孤となり玉へは、安信公之遺命に任せて高信陣代を執相傳  
之採配を振て兵士を扱ひ、軍將に成て武威を近隣に振ひ、攻るに不落處もなく討に  
不敗はなし、天文之頃岩手郡を切從ひ、永祿に鹿角を打井八戸、閉伊を降らしめ、且斯  
波に鹽を付て和を請はしめ、元龜に津輕三郡を切取高信之自領とす、則右川之城を



築て居住しける、是より糠部を改石川殿とそ唱けり、殊に領内之成敗も正直なれば、津輕三郡初而一統に治り、犬浦・汗石・今淵・乳井・波岡等を始皆々石川に出仕すれば、高信之過報誠に山々敷見得けり。

### 高信公岩手郡切取事

一高信公壯年之頃、安信公遺言に任せ、軍將と成り、文武之成敗を取行、何事茂心之儘なりければ、何卒近隣に手入し、遺領切廣先祖之名を上げ、譽を子孫に残んと、先岩手郡は我々杯之地侍にて、時之大將なりければ、先岩手郡を切取其後段々に手入せんと被思召けれども、其頃岩手郡に指て手引の者なければ、高信屹度思慮を廻て二戸郡白鳥之城代九戸左金吾を媒として、岩手之一方井禪門が娘を所望しければ、一方井九戸が使者に厚く禮法をかいつくり、扱々身に余り誠に忝御事に候得共、御存知之通り我々如き小身者之子共にて候得は、萬事不取廻しの者に而中々高信の進候而も御目に留り申へきにもあらず、御免可給、此段可然様高信の御申給はれと九戸か方の云送りけり、高信兼而思慮有ければ、再此事を被言越けり、一方井再三之辭退

は却而無禮成、迎然は可進由返事夫より段々岩手郡手に入事思慮被成と云ふ。

一或時糠部左衛門尉高信は、御嫡九郎信直近臣舟越修理・金濱圓齋を近付語られけるは、我只今迄安信之遺命に任せ、數年當家の將軍を司り諸士を指揮して文武の成敗を執行て、安信の遺領を全し、一郡も近國に不被奪却而岩手・鹿角・北閉伊を切取領知を廣げ、晴政の渡す誠に喜敷事ならずや、晴信も壯年なれば、我は當年陣代を辭し、領知之成敗を晴政の渡し、我は自力を以て隣國之内を切取領知せんと思也、去共我兵少く兵器不調會而金錢兵糧乏しければ、此事輒すへく共不被思、此儀各々隨分思慮を廻して一精勵給はれと被申ければ、兩人大に驚き、是は如何成御所存かな、既に國中の諸民殿の御事をこそ安信の遺跡と存すれ共、何茂歸服仕國守と奉仰、去は隣國領主達ともたまさかの書通にも南部左衛門尉殿或は南部帶刀左衛門尉殿とこそ書送候に、懸る折節陣代を辭領知を晴政の被渡なは、岩手・鹿角も忽ち叛き糠部の本領も我々持に成候半、然時は只今迄之御軍功水に成可申、我々愚案を廻すに、今之領知を二ツに裂而殿と晴政之所領とし玉ふか、無左は糠部之本領は晴政の渡し、岩手・鹿角を殿の領知となし玉ふか、又は直に安信の遺領を繼玉ふて殿之家督に晴



政を立玉ふか是等之事こそ可然存候に、何そや軍將を辭して領知を不殘晴政に與ひ玉はん事、信直之御行衛をは何とか被思召候哉と申ければ、高信聞玉へ夫は當然之利誰も知る處なり、然時は後には晴政と我と爭論之基なり、縱我露命極るとも後には信直か身に害を招くの根元なり、我深き所存有此時信直公も高信公の仰を御聞不興顔に見へ玉ふに付、高信公重て信直を制して領知は何國にも澤山なるものを何そ南部のと被申ければ、兩人一同に申けるは我々一旦見得たる處の了簡に而、誠に末々害を思當り不申、縦殿の左様に御願候共、晴政争て許容可有、定而領知裂而可被進候也、扱隣國之内は何方へか御手入と申せば、去は先年志和にせんと思ひしに、斯波勢中々手こわく數年雌雄分れざる折節、稗貫大和守の扱に付、兩家和平し畢ぬ、然れば其外には我望之國は隣國には津輕より外宜敷國も不有候、幸津輕は昨今新之領主なれば、領内一統せざる其内に打入攻取へしと思ふ也、就夫武具、兵糧の費迄、晴政之辛勞なき様に隨分各々心慮を碎き用意せられよと被申ければ、圓齋申様は軍兵武具は晴政より借り玉へて、只今預り玉ふ人々にて可然と兵糧、金錢之事は馬川之助右衛門に御頼候は、何程も可進候、何條御氣遣候まし乍去津輕領主西野相川之兩人は

金錢を以國中を手に入土民百姓迄歸服仕候得は、其火の手へ差置合戦し玉は、勇々敷大事也、暫く見合可給、兩雄は争ふ習有必變異出來らん、其時急に乘入玉は、一舉に功を成玉はん、其内は必しも色に出し玉ふなと申ければ、高信頭をうなつきその事可然とて時節を待しとそ。

八戸家之事

一初光行公此國に來り玉へし時、六男破切井六郎實長を八戸に封し玉ふ、千時八戸の領主、工藤將監工藤祐經の子孫なりと云、早世して獨寡婦存在す、其家從工藤二名を不遣は、則城を枕にせんと云て、光行の命に不任、故に不得止、實長をして工藤か寡婦に合しめて、其姓名を改て、則工藤將監と號せしむ、於是家從相和して靜謐す、後世又姓名を改て八戸彌六郎と云、然るに世人八戸は元工藤の末孫也と云者は猶不知之誤り也とかや。或曰八戸を繼し破切井彌六郎は實長之二三代目の人にて、光行來玉ふ時とは時代違ひ後なり、甲州に茂破切井之末孫今に有之と云。



#### 四戸氏之事

一四戸孫四郎宗朝は近郷所知し代々金田市城に居住也、九戸政實の逆心之節は四戸中務とて九戸か妹嫁也、千時九戸に一味なりと讒言を云者有故、信直公始九戸の出陣之時先ツ四戸を誅罰有るべきに究る、此事忽中務に告る者有て中務大に是を謝せんとするに、事急にして辭するに難成、先一族郎從僅拾貳人隨從して秋田に出奔し秋田にて病死す、其松長二十余年の後九戸後謀叛靜まり國中靜謐の時歸參して實の無罪を謝す、信直公其疑忽解て本國に返し玉ふ、其時松長は盲目次は仁長と云て自幼少僧とし永福寺に有故に、辭して本領に不歸、僅五百石を得て妻子を養ふ小祿にして其家從拾貳人を養事を不得、則信直公に告て直に各々祿を賜り勤仕す、其姓名は今吾忘たり、十貳人の内中野門助是れ八戸に有領、知貳百石根守何某今之根森之祖なり、四戸清兵衛是は何れ未詳、残り九人は不知重而可考、扱仁長後に還俗す、則四戸平兵衛直貞は利直公之次男、彦九郎と昵近す不幸にして彦九郎早世し鳥谷ヶ崎長し、玉ふ、其後直貞重直公に勤仕し子孫猶存ふ、昔者松長は假に田名部に行しに

便船に入りて越前に至り終に爰に住す、其子醫を學び武田玄伯と云、其子德庵玄雪共に猶住してあり、是又足澤氏は四戸之族從也、中務秋田に出奔之時其身家累多く急に共に奔る事を得ず却而信直公に使はると云。

右二件我嘗て所聞其大概を書して後人の參考に備ぬ、聊龜末なり其詳なる者猶知人に問而究むべし。

寶永丁亥初秋聞之

#### 盛岡築城之事

一今森岡と申所は往古不來方と申岩手郡に御座候、當郡岩手郡と申事并當所を不來方杯と唱且此近邊山川等の事水鑑と云書に具なり。

一天正十九年九月八日淺野彈正長政公九戸御退治御歸陣之時、同十日晝頃岩手郡不來方に着玉ひ、於此處に長政信直公へ被仰候は只今之御居城は尤御普代之地と申、其圍も堅固に御座候得共、四方高山を卷廣田畑無の地に有候得は中々豐饒之地と不被申候、願は此所を御取立候而御在城可然候、尤要害茂大概に御座候是非此段御



斗候様にと御異見有之、信直公扱々御懇切之思召忝奉存候、私事も兼而願居候得共家従衆一統不仕其上公方への御披露も不仕候而は御咎茂有之候は、如何と存候而延引仕候、若能御序も御座候は、此段申上當所か志和之高水寺之館か、右兩所之内申請居城に取立申度奉存候、能御機嫌之砌にも御座候は、此段可然御取成奉願候、當時亂世之砌にも御座候は、惡敷被聞召候而は不可然候、此段能々御察可被下候由被仰候、彈正様被聞召扱々被入御念候御事、左様之御遠慮は人にこそ寄候、事に候我等に御任せ候得、押付免許之命可有之候、但志和郡古城とやらんは片時も關城に相近く候、是も往々は被仰上當所にも御築可然候、在城には當所可然候由御異見に御座候、其日信直様長政様御同道被成其外名有大將衆被召連、南館地の山本丸二の丸三の丸迄大概繩張間積被成御覽候所に地山少狭少に候得共、少々築出し被成候は、可然由被相定候。

一 彈正様御供諸將當所之地形悉譽被申候、先ッ前は田畑に寄、後は大河を抱山川行路其法に相叶と誠に珍敷地形之由被賞翫候、尤見合候而北館をは切崩候様にと是又長政公御差圖有之候由、長政様十一月晝頃當所御立十二日鳥谷崎へ御着信直様御

見送り有。

一 北館、南館を小中野と申候、北より南へ北上河流東より西へ濁川流ける、此水北上川へ落合申候、右兩川之間に御座候故小中野と申候、北館と申は南館より貳丁斗北に放て一之小山御座候、中昔より以來之館に御座候、南館と申は今の御城に御座候、館は山之南手に御座候、往昔より之館に御座候諸格に別に記す之間不載爰。

一 當所南館之主は代々不來方家住み其頃之主を不來方淡路と申、右之居館の跡たるに依而淡路丸と號く是也、北館は御當家十一代伊豫守信長公福士伊勢禪門慶膳と云者を被居置候、自是彼の北館を世人慶膳か館と呼、此事終に館の名となり慶膳死去し其子孫の代今以北館とは不申慶膳館と唱申候、今八戸家の屋敷より石合迄之間に有之館なり、盛岡に御築被成候時長政様任御異見御切崩被成土居二方之沼谷地等之埋地に被成候、石は御引被成兼今以有之候。

一 南館地山は笹原にて所々に栗の木有之候由、右之山支配は源三郎と申者に御座候、彼か屋敷は今之御臺所之有之候所に有之候、今之八幡宮之有之候曲輪と淡路丸之方と左右立挿山之洞合に彼源三郎屋敷有之由、其屋敷之内家之後に明神一社造立



仕置候、盛岡御築之後源三郎明神と被號候由。

朝鮮御征伐之時信直公御出陣之事

一天正廿年十一月廿八日改元文祿元年と成、公方様朝鮮國征伐被成候に付當年諸國  
に御陳觸有之候信直様にも軍勢一千余人被召連急き御登被成候所に渡海之大名  
之内には御入不被成御馬廻分に而肥前國名古屋と申處に被相詰候、尤遠國より大  
勢召連候事故永陣不便之至候、若軍兵入候は、追而可指登旨御内意有之、數百人召  
下漸く百余人被留置候、奥羽衆其外東國之小大名何茂如此に御座候由。

一 信直様名古屋御在陣之時公方様秀吉より被仰出候は、兼而聞及候領内居城之地尤  
邊境之處たるに依而今後居城新築仕度旨兼々願居候由、淺野彈正俱々致言上候、今  
度望之通被仰出候間勝手次第築立可申候、尤淺野彈正具に檢分致候、委細に言上仕  
候上に候間追而御檢使之沙汰には不可及候由被仰付候、信直様謹而御請有之右之  
通故追而御檢使下り不申候由。

一 信直様兼而被思召候は、若願之通城新築被仰付候は、御子息利直様を奉行可被仰

付と被思召候事は、利直様御幼名彦九郎様と申候拾才斗りに被成候時より所々方  
々之城館共御覽好也殊に冬は雪夏は土砂を以城取を被成、敵は何方より攻る味方  
は何方防と人形を立て軍之備杯を學て朝暮御慰被成候程に、物馴而心有老人共又  
爰被と奉教候、藝は道に依而賢しと申事有、十五六歳に被成玉ふ時は中々尋常之及  
所に無之候、其後九戸沒候而彈正殿御異見に而不來方之城新築可有之候、山大殿様  
御相談を被聞召、是より奉行繩張等御所望之御志有て御父信直様ひたと催促被成  
候得共、前に記す如く未御領内一同不仕候故御猶豫被成、今度願之通被仰付候得共  
朝鮮御陣最中に信直様御下向も不叶、殊に時節と申在所築城之事其憚被思召、年久  
敷被相控候由。

御城御築之儀秀吉公より御免之事

一 御城築立之儀上裁先達而相濟候得共御時節故御用捨之思召有之候所に、信直事當  
所に相詰罷在候ては何之御隔心無之候間在所普請之儀無氣遣可仕候、乍然此時節  
物入可有之間普請之儀近々成兼候而延引申儀格別之事たる事に思召候由御上意



有之候に付、右之段御在所に被仰遣候得は是又彈正様御取持と云、若殿様利直公此儀御待佗候故大に御満足被成、大殿様御下向迄は御手御物入に而御築城可被成候由上方に被仰、此儀は御親子と乍申大殿様には御永陣御物入多、且は若殿様御手普請と申候得は公方かたの唱も能く候由に付如此。

一大殿様名古屋より被仰遣候は、尤手前物入に而諸入方可仕由尤に候、此時節に候間諸士百姓人足迄稠敷下知仕間敷候、尤入方費無之様可申付候、諸事花美に無之様つゝ、まじやかに可仕候、兼而相定置候奉行者頭共に内外之義相談致可相勤候、城取繩張之儀は第一内堀伊豆に能々致相談奉行諸頭共にも心置不申相談可致候由被仰越候事、余國には國主之下に大將分之者小身之侍を支配仕候而數人有之當所に而數人有之候得共奉行壹人宛付添幕打軍役之下人召連何茂裝束に而附之御本丸之御かさり物の前に張弓矢を添へ、矢先丑寅之方召向弓張は赤白之絹也、同扇鏡等の類今世上に用所の如く扱かさり物と云は五六尺四方の臺に赤白之餅山之様に積一備とす、百盃樽二其外色々の物添御本丸之餅臺より猶大振に相見得、餅彌々大分に御座候由、餅壹ヶ所程と數有之候由に付、もり候時分役人其數能々相改被申様に

相見得候由、又御本丸御かさり物へ邊白旗八本立申候由、御幕も打候由、其後間杭を打繩張有次に御本丸に可被成候所の真中を物頭之内壹人自身に歛三度立候而其上を御本丸に可被成所之四方に納、其次は小身之侍、步行足輕、人足小者迄入交りに地形切下々由候。

一 小身之侍たりと言共侍分御步行迄其裝束見知有之様に被仰付候由、御足輕より諸人足迄は何にても其身勝手次第之衣類に御座候。

一 若殿様八戸彈正石井伊賀櫻庭安房中野吉兵衛大光寺左衛門右五組壹丈貳尺之旗壹組壹本宛立申候、若殿様御旗は白旗、八戸は赤旗と五色に分つ其外の大身衆頭分若殿様之内に付大四半之白旗を壹人壹本宛請取、其外物奉行並外に淨法寺修理大槌孫三郎、日戸内膳築田大學、江刺長作是等之様成人其外にも一騎並之大身衆は誰に何人は八戸か寄子分に付、大四半旗を持、誰に何人は何某か寄子分に付、何色の大四半の旗を持と被相定、其以外七八百石より三百石迄之衆小四半之小旗を指、是も寄親之通其旗色違申事可被成候由。

一 御藏入之御百姓は百石に付三人宛、是は若殿様御手に付知行給所方百姓は其主人



に付務之、右は知行役旗捲不申候、持之人數は侍步行足輕人足共に四半にて五色に袖印を付申候、但赤印赤衣裝を不可着、黒袖印之者は黒裝束不可着、他準之、其知るゝ明にすへきにや何そ善惡御目に留る事有之候時も彼が袖印の色々之某か支配と早速相知申候、尤諸人も知安く御座候、縦何某を申ならば御前但北九兵衛寄子何某と申由、其他準之。

一 寢起食支度普請、打立晝揚夕揚夕飯等迄貝、大鼓に而相圖有之、其相圖兼而御觸渡置候間諸人は是に寄。

一 食支度之時者何某か組子何人と其組頭の請取組子の渡す朝晩之飯は大身衆并百姓人足手賄は壹人宛朝夕晝共に被下候、是小身衆御步行足輕小者等也、晝は惣勢被下候。

一 打立詰大鞆并に貝の音聞候得は、夫々之袖印も何の色、大四半之旗本の夫々之道具杯詰人數大方揃候へは、大四半衆又何之色之壹丈貳尺大旗衆の前の參り候而、其色一揃に五組共に別々に控居候得は、追々に馳付候者共其旗之色次第に加はり申候、尤又支配は右之通り直支配は大四半旗へ不加直に一丈貳尺旗へ加る夕揚之時

は惣崩に御座候。

一人夫は小侍步行其外小給人之次男、三男の子共迄は紋付之衣類に御座候、乍然御歩行之紋大く御座候、地下人小者杯は無紋に御座候、尤指物綴に御座候、小身者は無紋に御座候、小身衆步行衆杯も染入紋之指物は多く無之候、大形書紋に御座候。

一 歛取もつこう肩杯は九拾石以下之衆并拾五以下之子共弟杯召連れ自身働に御座候、百石よりは軍役之召仕に知行役人足召連是に似合之役自身に仕候。

一 前に記す所の壹丈貳尺旗、大小四半旗、小四半旗は、御前より注文出候而銘々手前物入に御座候、地は木綿に而旗本頭之家々之紋付申候、尤家名も記申候、壹丈貳尺旗は青黄赤白黒の五本大四半旗は是も五色に而大分に御座候、小四半旗者百石分四百石迄其主人背に請筒をして指申候、五百石より以上之組付衆は人夫之外に召仕壹人に爲持申候、九拾石以下之小身衆は袖印斗に御座候、小旗大分に御座候得共元は只五組に御座候、名氏を慥に申度節は白旗組其姓名何某か組子何の某と申上候。一 不働之者其外無調法仕候得は、即時御怒を請申候、目立申候事有之候得は御前の召呼赤白之餅貳拾四宛被下候。



右餅貳拾四宛被下候思召入未察愚案に當所に而正月十五日俗に小正月と言餅炊き諸道具之餅とて其品に當候内弓矢之餅と申候間、苞に入一苞拾貳宛貳拾四を男壹人分とす、是貳拾四之矢數を表す、右之餅二月九日披之森岡御築城之刻被下候、餅大さ其形今之弓矢之餅に同じ定而其數を表し被下候に哉未考、餅は毎日御城御普請中は御褒美餅とて御用意御座候。

一御城歛立初之日は人夫上下都合漸々二千人斗り後日には大分之事に御座候由、御歛立始之晩は御祝儀御酒盛新築御本丸にて有之、此時不來方之字心惡敷候由に而森ヶ岡と御改今森岡と短く唱申候、盛の字この森杯者書き不申候其心右之趣に御座候、其晩御普請場四方のかさり物引餅酒に御手自諸人に被下候、但御歩行以下は其頭々御渡被下候。

一旗本五組は壹組宛東西南北場所請取に而段々普請有之、當年は御本丸二ノ丸を今は御中丸と云、北ノ丸を今は日戸曲輪或は八幡曲輪杯とも申候、南部は今淡路丸と申候、其已前不來方淡路と云人居住之跡ゆへ斯く申候。

一御本丸より北東ノ山尾崎に往古より八幡の古社御座候、此處二ノ丸之地形と既に

爭申候故諸頭に御評談之上に而今之車御門の足溜より地形一面に御切平め北ノ丸と被號然るに彼八幡の堂の脇三角の石御座候、段々地形御切下け被成候得共其根に及事なく、既に大双に見得申候間、其形烏帽子に似申候間、烏帽子石と號く、其儘被指置八幡の宮の重寶たらしめんと被仰候、其邊に大石とも大分御座候、其外御本丸二ノ丸始方々御切下候得は大石とも大分出申候、是は追而段々御切割被成、石垣御用に可被成候由被仰候、右之八幡宮有之候場所の路へ別に地形御拵假に御堂御建立御普請成就之後はしかと御建立可被成由被仰候。

一右之通方々地形相濟候得は其年既に冬及申候間、御人數は福岡三戸に被歸申候、若殿様にも福岡の御留守居被成候、但森岡御普請場は御留守居奉行として日戸内膳を被指置候、内膳御城の北ノ丸八幡宮の脇を築假屋を造、召仕二拾人斗に而奉行仕候、内膳事は日戸の領主に御座候而、岩手一郡之大身に御座候、其上手寄之大身故被仰付、其外近郷の地士其近邊に居住被仰付候、或は慶膳館にも居住仕候御普請具は書にて米共冬中御藏に納日戸か預りなり、其外志和岩手衆福岡勤番御免に而在所に有而森岡之警固に勤む。



一此時御城御用の大綱右之烏帽子石の懸八幡へ奉り候其吉例に而烏帽子之緒とて、大綱極月卅日之晩日戸氏より納り申候。

一毎年冬に成り候得は三戸・福岡の御歸被成御留守居は三ノ丸日戸内膳被指置只今之八幡宮の邊此曲輪を北の丸共日戸館とも八幡曲輪とも申實は三ノ丸に御座候、又新城村之館には三上氏を被指置候故是を三上館と申候何茂冬の御留守居なり。

津輕相川・西野か事

一津輕相川西野か事實は關東者本姓平家千葉之由常陸國出生といふ何となく廻國武者修行し津輕へ來り數年爰に住む此兩人金銀澤山持來り町人百姓に借施し諸人の飢寒を救ふ其上才智衆人に越依之津輕之城代招是を役司とす彼は文書多才之者ともなれば諸事を兩人に任せらるゝに依而權威日々に長し諸人はいやましに従ひ終に津輕を手に入と言其頃の城主は南部之旗本のみし家名不知前代爲城代被居置しに双方代替南部之威勢も衰しかば終に君臣之禮も絶して家を亡す其頃南部の軍將糠部左衛門高信と言人有斯波と戰之半故津輕出陣を被止其後斯波

と和平有て津輕の出陣可有之と云其頃の老臣金濱圓雪異本に圓と有りと云者諫云彼は兩雄也必可争月を経て攻むべしと云高信是を信じ出陣を被止しに按の如く兩人領知之廣狹を論し双方立ち別かれ騒動す高信其虚に乗じ入り終に津輕を手に入ると云此合戰に藤崎安東太と櫻庭と戰の義有り語永く是に不記時代は元龜三年八月末之由。

羽州比内郡明神之事

一羽州比内三十三騎明神之事天正之末に比内之一郡南部之手に入り北尾張を城代として大館に被居置しに尾張は大形三戸に有て一族北内藏を籠置所に郡中之成道不宜天正十八年春津輕之變に乗て一揆起り澤尻村與右衛門と云者大將となりて一夜に大館城攻落と云或說實は秋田四郎兵衛と云ふて實季か郎等の由といふ此時城兵邸に三戸に逃げ歸り内藏も當郡山田邊にて討死す相從ふ兵拾貳人共に枕を並と云右之時討死と云共岩崎着到に見得候へは不實拾貳人之家名何も陪臣故不知。



### 郡山高水寺之事

四二八

一高水寺西御所元祖舊説に元の領主は右大將陣か岡に七日御在陣之頃、きゝすと云近邊の女を御酌に被召しに、月を経て彼女安産し男子を産む、既に成長之頃當國探題登米の清重右之子細を鎌倉江啓し、既に紫波の主とし御所と崇び、其後年代遙去て太平記亂之頃斯波の高經官軍之大將義貞を討たる賞として、其一族奥州之關所地を賜ふ、高經最上・大崎も此賞として下向と云ふの次男家長斯波郡を賜り、延文三年五月五日向し當郡岩清水之館に暫く被住、其後高清水寺走湯山高水寺を再築し居城とす、其時の祈稔坊大庄嚴寺に下向、斯波之略譜有しに五十年前故有て失ぬ、家長普代の士高橋・築田・川村其外大勢雖有之皆姓名替て不知、天正中孫三郎迄七代と云、此間不知、孫三郎山王海に落後御家に住候處に、兎角築田・煙山・大ヶ生・岩清水を始普代の臣と肩を並南部之家に任事無本意被思召候にや、家類打連京都に被登、於是死去、弟を彌三郎と云、犬吠森之館に有、天正十九年利直十六才にて戰攻落す、彌三郎郎々城を遁ヶ斯波を南部の手に入れし事、晴政の時、高信岩手之經ヶ森に陣を張り數度戰ふ、

扱有和平す、年を過九戸彌五郎忍者となり諸士百姓を語り靡て輒一郡を掌握す、是天正十六年とも云、十三年とも云、年月不慥、天正六年は晴政之時代にして高信は津輕に有て信直軍將の頃なり、十三年は晴政晴繼逝去し玉へ信直之代なり、追而正説を記すべし、延寶九年か御巡見の刻郡山の召人共より書上之覺書に、斯波下向は只今迄三百年程之由なり、然は延文中實説可成、又家長を御所と可言程之人に非らず、右大將家之御所之遺跡を引て如是か、家長之子彌三郎詮經と有、彌三郎の弟を又彌三郎といふ、先祖之家名を續き如此名乘玉ふは家長之系無疑、乍去土民の言傳には公家筋之様に申信候、家の紋五七の桐之由に而老人の中に心有る者は桐を敬て今に至不用是謂不審也。

### 岩手郡工藤行光か事

一岩手郡は頼朝公より文治五年工藤行光拜領し、貞任か居館荒廢の跡を補ひ住す、其威勢一郡に余り諸人岩手殿と號す、代替りて南部十一代信長之時子細、有岩手と確執し既に尉川之館を圍の時降參に及、兩子人質として南部に遣し工藤は僅に尉川邊

四二九



二三郷を領す、南部より四天王之内福士伊勢入道慶膳と言者を當郡の押として不來方之北館に居置、其外之諸士を郡中に分置、近世君臣代替り浮世之爭亂に引れ、福士始一郡悉背しに、晴政之時高信謀を以岩手一方井禪門を語ひ輒く一郡を手に入玉ふと云、慶長之始厨川小次郎子細有て利直大釜に命して討しめらる、既に當城は去る天正十九年淺野長政之下知に依り、其臣内山助右衛門承り破却せらるへきの處に、信直不來方普請の心懸に依有之、其頃の警固之城にと被存破却被相止候故、利直之御代不來方普請に付、右之城取上候筈に相究候而此間小次郎方被申遣候所に、少も承引無之に付左候は、小治郎可來候山、被仰越候得は、門戸を塞武具を支ひ入不申に付、其頃の釜釜彦右衛門は小次郎とは母方之從弟に有之、利直公彼に被仰付而輒く小次郎を討取しよし。

九戸修理之助か事

一天正廿年九戸陣之儀晴政之時代なり、其頃修理と申候子細有之、三戸之下知を背居城に籠り、高信は其頃津輕に有信直軍將なり、數千を卒ひ九戸を圍とす、其頃釜澤四戸等九戸か間近き縁類殊に一味之風聞有、彼を後に置ては九戸を難固迎右兩人を追討し直に九戸を攻日夜數日騒動す、二戸の淨法寺修理其外寺院等拔し九戸降參し、其證に弟彌五郎中務老母三戸に進上是人質也、三戸より第四之姫を九戸か弟彦九郎に令縁玉ひ、双方金田一の邊にて取替し有、依之平均し九戸昵勤す、去共信直には自是して一方ならず恨有りとかや。

日記之事

- 一 光行公治承四年石橋山合戰に粉骨之働き有に依而甲州之内南部之郷を永代知行すへき由御教書被下干今有之。
- 一 奥州五拾四郡を勳功之衆三拾六人に給ふ、光行其五郡を領す。
- 一 政行後に政光と改。
- 一 六郎軍功有、建武二年山邊合戰に大功有、依之廣橋修理之助常康沙彌しやし宗哲そらてつ
- 一 是を承りかんふん狀干今有。
- 一 信長奥州之勢を談す。建武二年證文有、建武頃青野原に而今川結城之戰有り。



- 一 哥二首古書の如し。
- 一 守行四品に任す。
- 一 義政功故從五位下又御太刀拜領仕に付代々家の太刀緒を留様他に替る、感狀文殿の字眞なり。
- 一 天文八年三戸火事。
- 一 晴政姫南彈正少弼室。
- 一 信直斯波六十六郷は一郡の沙汰なり、晴政時代高信つねかねヶ森に陣張數度責戦と云共落城せず、後に不來方の福士伊勢・中野吉兵衛色々謀終に落城す、築田大學大ヶ生玄番一味故天正六年落城。
- 一 大光寺儀太夫比内の退き一兩年過政信死去。
- 一 比内北尾張城代。
- 一 小田原にて大浦右京爲信逆心のよし利家公長政に言上す。
- 一 慶長五年上杉の押故關原の出陣無之。
- 一 江刺家瀬兵衛内堀四郎兵衛書付封し政宗一味のよし申上る。

- 一 大阪陣の時攝州いはらき原に陣す。
- 一 其年九月十四日岩館石京追腹五十三才。
- 一 寛永十三年重直御勘氣同十五年十二月二十二日御免其年在所馬屋志賀小左衛門預置栗毛の駒に角生る、ひつそく御免の年より吉例とす。
- 一 寛永八年 辛巳 六月九日義光已後の系圖を上る有増にして大略す。
- 一 若君様御誕生献上備前政恒代金八枚御脇指は青江次吉拾五枚御産着五重。
- 一 同十九年春より夏迄天下飢饉三ヶ月食をにきわし與ふ。
- 一 七戸直時唐人を押申候に付知行三百石を加増す。
- 一 同四年在所のあたこに寄進。
- 一 直房母は中野吉兵衛之妹と有。
- 一 正保四年十二月準人正と改重信七戸に而栗毛の駒に角生る同年九月廿七日出あらわる吉例也。
- 一 重信存生之内に家督之事家中より申上候得共御承引なし。
- 一 重信御家督十五日始而御目見之時利直拜領の道あみの茶入、儀助吉房の刀を献す。



一天和三年五月十日四品と有り。

一五年七月十二日隱居之時献上靜の御太刀茶釜馬代時服古小脇指來國次代金五拾枚御茶壺樂阿彌御屏風古土佐筆献上。

一行信公家督之時献上御太刀一腰三十九綿貳百把御臺様の銀子三十枚家老には漆戸勘左衛門櫻庭兵助銀馬代を以て御目見。

信直様之事

一御父は南部二十二代右馬亮政康公御次男糠部左衛門尉高信なり、後に津輕を切從川川の城に住玉ふ故石天文十五年九月岩手郡一方井に而誕生、此時鶴南に行すく日産屋の上を暫く舞遊候由南部家鶴を以て吉瑞所に誕生の後出生之とす信直公成人の後南部の家録を可繼前瑞か此時一方井之山伏自光坊産屋之守符等を捧げ祈念を修す、幼名九郎殿と號す、是高信之本室疾妬に依て其妻三戸之住居難斗、高信則懷胎の妾を其父一方井刑部氏に預置令平産なり。

十四五才迄一方内村にて成長則自光坊手習之師範となる、實母一方井刑部左衛門の女なり、其頃剃髮して尼と成り禪門と號す、此方井は羽州秋田の門葉にして阿

部の姓也、刑部左衛門より三四代前に爰に來一方井村を手に入自ら領主と成七八百石を領す。

一年中信直十四五才頃三戸に歸り、父高信と同く田子に住す、其質性優俊智にして、勇氣人に越え能く人の諫を聞、其功臆利純賢愚を知り且仁心ありて人の歸服を得る、然れ共少物毎に遠慮の氣有、自身をへり下り玉ふ事有、物言少しかゝりつまつくる事有、然共其後本家を繼、天正十八年初めて秀吉公に拜謁之節諸將の前に而其容貌高く言舌無殘所東夷は珍敷武將と上方取沙汰有之由。

一御本家彦三郎晴政男子無之女子余多有之、依之高信に被内談、信直を嫡女に妻わせ名跡之所存有之、今以領内には不觸之、依之信直は田子より三戸へ移り屋敷を構へ住す。

一元龜三年高信津輕を切取彼地に移る、依而信直弟政信は父高信の名跡となり、津輕に趣き信直は晴政の名跡の心故三戸に有。

一晴政其後男子を儲け鶴千代と號す、其寵愛無他依而日を追信直疎遠の心あり、依而晴信と信直と其間不宜、年過信直之室病死、依之猶疎遠に成り信直晴政に願而云、鶴



千代を以名跡とし玉ふへし予田子の近郷を棟梁させしめ且侍大將にせらる是より信直は田子に移住す。

一天正九年二月十一日石川左衛門尉高信津輕にて病死其子信直政信兩人津輕の地を割可令領之由高信遺言の處に晴政所存有之津輕を一圓に政信に與へ信直は田子に有り。

一天年(マ)年晴政卒去其子鶴千代家督父の名をとり彦三郎晴繼と號す信直并九戸彦九郎東南北等皆門葉の一族なり殊に姉嫁たるに依而領内政事を補佐する處晴繼抱瘡相煩十三才或は廿七才といふにて卒去依之無世嗣家中騒動。右數件晴政晴繼時代之事に候得共信直一世之事故荒々記し置なり。

一天正(マ)年本家彦三郎晴繼早世故又從弟たりといへとも信直家を繼けり。一家督之後本三戸平良崎城に移り先祖之跡を慕ふ如此此時侍風大小路歩しと云事于今其町田地となり名のみ残る。

一天正十五年北左衛門信愛加州の書狀を遺す利家より寺崎縫殿助を以其後信直の書通有。

一同年葛西伯耆守晴信より使僧を以て信直之家老猶山帶刀劍帶と申候方の書簡あり。

### 利直公御事

一南部二十六代大膳大夫信直公御子天正四年三月於三戸御城下御誕生なり其頃御祖父石川左衛門尉高信公は津輕石川城に被成御座候其頃御父九郎信直公は御本家二十四代彦三郎晴政公の御名跡之御心懸に而晴政之嫡女をめあはせ玉ひて嫁養子とならせ三戸に被成御座候依而如此御幼名彦九郎殿と申候古傳に彦の字は彦三郎晴政よりゆつり玉へ九郎は御父信直公を九郎殿と申候故御兩人之御名をあやかり如此名付玉ふと云ふ其後又晴の字をあやかり晴直公と奉申とや。

一御母は御本家廿四代彦三郎晴政公の嫡女也御實母は同所泉山村の地人出雲娘也。一天正十八年三月九日秀吉公相州北條一家御追討之節御父子小田原に御出陣此時加州之城主前田築前守利家公を以て於小田原元服晴直を改め利直と號す千時十五才其以前前田南部書音を以好を結候故也一説に十八年には信直公斗り御出陣十九年九戸御加勢を請玉ふ時利直公御上洛と云。



一同十九年九戸城責の節御父信直公と相俱諸將の武力をたすく時に十六才と云ふ。  
一同年冬より同廿年文祿元年なり之春迄淺野彈正長政之代官内山助右衛門か御先達被成領内之館共破却。

一文祿元年朝鮮軍の節父信直出陣之節留主居役。

一文祿四年從五位下信濃守に任ず。

一慶長二年三月六日岩手郡不來方新築城鋤初利直公奉行繩張也。

一慶長三年利直公之妾今淵將監妹平産御男子御出産兵六郎と申、利直二十余の時之御嫡子也。

一慶長三年八月十三日秀吉公御他界、同年冬加賀利家之亭に利直公を被招、秀吉公の遺物として雲次の太刀賜之、一説に雲次太刀且糧米慶長三年父信直公頂戴すと云ふ。

一慶長四月利直公之御次男彦九郎殿御出生母は石井伊賀女。

右數件繼目前の事故晴政、晴繼信直公代々可記候得共利直公の一世の内の義故大概記置也。

一慶長四年十月四日父信直公於福岡居城逝。

去利直其節在所に有忌服を請信直公之葬禮を營、同年十二月上洛本領無相違之由蒙命、翌年五年春下向。

一去る慶長三年八月秀吉公御他界、依之不來方普請相止、引續信直公御逝去、依之三年の九月より當年に至普請相止、公儀御代替故追而御觸可被成候由なり。

一慶長五年夏中より何となく上方物騒の風説有之、依而密に武具等之御用意有之、就中南方會津最上關東筋より馬買とも大勢來候間、直段能く御座候よし。

一同秋上杉景勝、羽州最上村羽守義光を切候よし、利直公義光に爲後援御出陣。

一慶長拾年正月廿四日秀忠公征夷將軍に任せられ、江戸御發行御上洛之節利直公後陣之供奉、此時家康公駿河より御發向御上洛なり御隱居被遊候。

一同十一年於江戸御上屋敷、奥様御平産御男子御出生權平様と奉申、後に山城守重直是なり。

一同十三年南部松前金山出ると云。

一同年二月淺野彈正長政公に二万石御加恩被下。



- 一 同十五年四月北蝦夷松前より駿府江戸に出仕家康公上意にて曰、かいくしんと云魚鯛可献なり、此魚食すれば長命なりと云又おつとせいとも云。
- 一 同十六年正月三日蒲生飛彈守江戸上屋敷出火、飛彈守は十五日歸國留主なり。
- 一 同年三月六日家康御上洛として駿府御發駕舊冬十二月半被仰出如此。
- 一 同年四月六日淺野彈正卒す六十六才、下野國鹽原の湯治仕候處、一三日不例のよしにて不慮に如此。
- 一 同十七年五月十三日會津蒲生飛彈守卒す三十才、大酒近年不作法之由小性東山主膳岡佐右衛門追腹。
- 一 同年六月堀尾帶刀亮吉晴一兩日霍亂相煩俄に死去。
- 一 同十七年九月中飛彈守子息下野守十才は駿府に出仕五日逗留して下向、飛彈守室は家康公末の御娘なり、後家に被成候處に同十九年淺野但馬守に被縁付。
- 一 同年九月岡部藤次郎南部に御預。
- 一 慶長十七年八月十七日北尾張守信愛入道松齋花卷の城に病死す、八十餘歳牌名云々同所雄山寺に葬る。

- 一 同年十月御次男彦九郎政直花卷城代被仰付、和賀稗貫一圓に知行可仕よし十四才依而諸士大勢被附之。
- 一 同年壬子十二月十二日禁中仙洞御普請有之、御手傳衆被仰付、翌年十二月成就無難之出來とて則十二月十八日御移有之。
- 一 同年十二月廿日秀忠公御成り。
- 一 慶長十八年正月元日二日兩度江戸大風。
- 一 同年正月十八日在所服之御嫡子大膳家直盛岡に而御死去十六才、景山晴公異本に勝公聖壽寺石門。
- 一 同十八年十月三日利直公自奥州到駿府、拜謁家康公時に砂金千兩献上。
- 一 慶長十九年大久保右京亮教隆御預是は大久保相摸守忠隣三男なり。
- 一 慶長十九年正月越後高田の城御普請新築御手傳被仰付候當三月十五日御鋤初。
- 一 同年八月廿八日廿八日江戸大風諸大名家破損。
- 一 同年十月上旬大阪御陣可被成との義に付奥州筋迄御陣觸有大阪に而諸率人被相抱候、但人質無之候得は抱不申よし、家康公は十月十一日駿府御出陣之由御鷹野の



出立。

一十月十六日利直公江戸へ御上着御手廻り斗に而御登り惣勢は未上着無之。  
一元和元年利直公上洛大阪平安之御喜被仰上候此時虎之子二ッ拜領南部十左衛門も御渡被成候よし。

一元和四年十二月二十三日若殿様從五位下山城守に任す始名權平様時十三才。

一元和九年癸亥年七月家康公將軍補任御上洛之供奉。

一寛永元年甲子年十月廿三日異本に十日と有御次男彦九郎政直様於花卷城に病死廿六才、天

岩宗青報恩寺に葬る、是は利直公の籠子なり和稗兩郡知行。

一寛永三年御上洛御供御嫡重直公其頃勝直と奉申同例御供なり。

一同六年斯波郡高水寺城御普請此年御在國なり、高水寺は今の郡山なり。

一元和十三年巳年冬御鷹献上毛替之黄鷹右献上の内に有殊に逸物、依之將軍様御満悦不少、來正月は鷹之初に御鷹を以初山被遊候よし、尤利直様も御供被仰付候由御内意有に付當十二月より御供廻共御山衣杯等支度被仰付候。

一元和四年戊午年正月將軍秀忠公當年御鷹野初として中野邊に被爲成利直様にも御

供被仰付候、其日舊冬利直様より被献上毛替の黄鷹を以鶴爲御取被遊、將軍様其日別而御機嫌能今日之鶴に而御料理御振舞可被成よし、上意、尤今日草臥可申候間直に屋敷に歸り休息可致候、其上右之御禮等に登城仕候事必無用可仕候よし、御直に御意有之候由、其後日を過ぎ御老中様より御奉書來候趣は

明朝御鷹之鶴御振舞可被成旨候間五ツ時分可有登城候恐々謹言

正月十九日

安藤 對馬守

重信判

土井大炊之助

利勝判

本多上野助

正純判

南部信濃守殿

御料理御頂戴之後於御圍御手前に而御茶御振舞被遊候由、夫々數々御咄等被遊候



由殊に御馬等拜見御秘藏之御鐵鉋壹挺御頂戴、是は權現様より被下候、御鐵鉋中り別而能候而御秘藏被思召候得共今日被下候間重寶可仕候由上意有之候。

一 寛永三年九月將軍家光公再御上洛、此時山城守直勝(マ)と相供御奉天子二條之城に行幸此時於京都被任四品。

一 寛永五年大久保右京亮教隆御勘氣御免。

一 同年七月於(マ)比山御前様御死去、是は信直様之御娘に而利直様之御妹岩城忠次郎室死去之後御歸なり、牌名香林院梅枝紅公大姉人と號大泉寺に葬る。

一 寛永六年御在國なり。

一 寛永九年壬申正月將軍秀忠公御病氣御勝不被成よし、利直公御在所に而御聞被成爲御見廻、同月江戸御登り直に御詰番在江戸。

一 同年正月廿四日於江戸城將軍秀忠公御他界御年五十四才。

一 同正月廿六日御遺物白銀三十枚賜之、是は秀忠公御他界に付。

一 寛永九年七月下旬より利直公於江戸御不快之由三戸ハ申來る。

### 盛岡御町割之事

一 或時諸奉行を召宜敷町割は一ノ字か五字か其宜は如何と宣ふ、滿座其故を不知、北尾張守信愛入道松齋答曰、五の字可然と云、公悠然として予も亦然り、面々如何と宣ふ皆其故を不存と申、公松齋に向ひ玉ひ其故を説面々に知らしめよ、松齋謹而愚按尊慮に不可當、然共先大理を察するに、一は一重にして長く五は井田の丸く少く四方に道の便利有之、當今町割の見透を厭通用自由の形なり、是より南の國には諸國の諸將參觀交代往還之旅人旅行の便利有るを以て驛宿は不及申、城下共に只町割を一重二重にして先後へ長く繁昌とす、他國へ通行の旅人商賣を利とする故なり、左様之地にて五の字を用るは通用は榮ひ影町は衰ふへし、是自然之理也、當所は諸國の往還には無之袋の如くにして地賣地商を本とす、此故に城を二重三重前後左右に圍町には侍丁町屋續只少く厚きに益有、又長き町にはひつみを付けて見透を忌之理則五の字に叶ふ、我諸國を見るに皆其心なり、敢て一國の中にも本城と端城とに又其心持あり、其外の事は公に尋可奉と云へば滿座一同に感心せしと云ふ。



一御城地形有増出來ず、或時人夫數人之中より一人を招き宣く汝如何なる者ぞ、予汝が形容を見るに誠の下賤に非ず、定而隣國の間者普請の案内巡察の爲可成、名字は何と云ふ國は何國より來ると問ひ給ふ、人夫驚き地に平伏し我左様の者にあらざと陳す、公然に領内は百姓か町人か出生何處と問ひ給ふ、於爰及白狀我は伊達政宗の家臣淺嶋千右衛門と申す、少々軍術を學ひ申に付自分罷越御普請拜見仕度人夫に紛れ推參仕候所賢眼難陳奉存候由也。

公被仰候は其方軍術の心得有之は此城地隨分難し可申よし被仰下、千右衛門答て地形御繩張我々か批判申處なし、只東北之高山今のあたこ城を見下し候處、是斗り何とも殘念に奉存候、是斗りの御指支に可被思召候と申上候、直に仙臺に御送り被遣候也。

### 關助右工門之事

一斯て天正十九年八月上旬、大光寺左衛門大將として鹿角郡に被指向、九戸一味之者共の引籠し館共の押寄ぬ、直に諸勢を勵し來滿山越より大湯之城に取懸る、城中兵

器調ひ糧充ければ中々容易に可落と不見得、城主大湯四郎左衛門諸方に下知して堅固に支ければ敵味方只小口際の迎合早俄々數勝負なし、斯る所に大光寺か手に關助右衛門と云者あり、頃日敵の前にて後の事有て大光寺大に恥しめ勸當しけり、助右衛門面目なくて其次之廻り合に首壹ツ討取て乍喜、大光寺か前に指出ければ、大光寺尻めに見て二目とも不見顔方向て居たりけり、既に其日は晚ければ明而軍にこそと助右衛門陣屋に歸り、助右衛門いつに替り先水にて身を雪兼てみかぬ楊枝を遣ひもつれたる髮などをけつりして傍の昵近者に云様は、我等の髮にしらみ有敢て虫の子多ければ引けつり玉へ、殊更額の毛猥なり拔玉へと云ければ、彼答てあしき事を扱て何とて斯は身をかさり玉ふと問は、彌之事なれば明日の廻合には能甲首を取て實檢に入れて大光寺殿の勘氣を可被赦、若不被得は直に討死すべし然は見苦敷けかれたる首を敵の手に渡さんも本意なければ斯は身拵へ住るそ若し討死せば我子の事は宜敷頼入候と此事をも傳へ可給、就中奉公におこたらぬ様に武道おろそかならぬ様ふにつとめよと能々語りければ、彼は打笑ひ何條左様の事可有、今宵何地にか夜遊などの粧と嘲けり、事終て其翌日之、廻迎合に助右衛門終に



討死しければ大光寺無限愁傷して今は日を期するに不及、助右衛門後を雪勘當を赦ん爲終に一命を捨てたり、我數日此城を抜き得ざるは此我後なり、屋形の思召事も恥敷ければ、明日は惣攻し此城を抜すんは助右衛門か靈に向ひ生鋒(まき)の面目何れの日か有んと、夜明ければ大光寺四方を顧み八方に下知を傳へて無二無三に城門の切入り射とも打とも事ともせず攻ければ、城中兵糧澤山なれ共未食の認させされは盡く飢勞して終に三ノ丸を被切破、大光寺直に二ノ丸を乗取んとする所に大光寺か小屋番共に小屋打捨數十人城の後へ廻り時の聲を揚げ本丸に攻入らんとす、城主大湯四郎左衛門今は前後難敵と軍勢を集め一手になり隠口より一方を切破り、直に九戸城の落行て政實と一所にこそ籠城せし、此時之廻合に彼助右衛門か髪をけつりし侍も三ノ丸の城戸に而一陣に進んで關か討死の地を變へず、昨日今日とは隔れとも是れも同く討死をそしたりける、彼れも關か心中誠に嘲るにはあらね共、當座之興に申せし事影恥敷思ひけん、斯は振舞しとかや、三の丸を破しは彼一陣に進し故城を乗取りし事は關の心中に恥て大光寺我責の故とそ聞へし、誠に武士之戦場の義理程最殊勝成るものはなし。

## 江戸御留主居役之事

一御當家江戸御留主居職他家並に不準、公儀にも其格式を知し召れ、正五月か時服拜領仕事中々他家にてケ様の例多く不承候、右之由來は往昔重直様御代迄御留主居或は證人杯號し、御家老石井伊賀守様此職を兼而被相勤候、其後御家門七戸隼人正殿杯家老職には無之候得共、御證人御留主居として被相勤候、其節台徳院様より度々御内書等或は時服被下置候、此段其家々に而子孫にて存居候事ケ様の令式引續今以如件、又云重信様御代に八戸彌九郎か。

一御家は源家舊姓之結歴を公儀にも被知召、佐竹小笠原南部は太閤様御代武家の三家とか定被成、權現様御代に至り今以て武家の三家と申成候事、京都皇帝に而も勿論之由申成候事、是は其眞偽、今不詳候事。

愚案に南部小笠原は加賀美信濃守遠光之御子何茂武田之末葉たり、佐竹は世俗に誤て加茂次郎之御孫と云、是又新羅義光之子孫にして武田之家也、乍去此佐竹は異姓と云へし。



八戸御制札之事

四五〇

一重直様御家督被成、八戸御分地に付寛文五年之頃八戸の御制札相立候砌、其頃御家老中には今度八戸御制札相立候由、此方私共連名を印可仕かと奉存候、右之通に御座候由被申上候處に、重信様被仰候は、其方共申出候處尤に候得共、今度の儀は他領之例とは大に相違成事也、故山城守殿跡或御取上被成、我々兄弟被召出新規に御取立之上は、縦數馬事其弟と乍申實は傍輩也、然所を此方之家老とも制札にては不可有、公儀之恐有之也、此末子孫之代に分地之沙汰有之候は、其時こそ只今之例にて不可然、其方共か申如く候半、此段年若者共に申傳置候様にと被仰出候。

一世俗之申傳に八戸御分地之砌領地片寄て遣候様にと被仰出候得は、御役人衆承違に而志和郡片寄村を被遣候よし、是似合たる事也、是子細有之也、永々敷故不記。

一重信様御代に至り御先代と違諸士御功米御扶持方等古米は片馬に付三斗俵也、御家督之後御入部之頃寛文年中より片馬を三斗七升俵に而被下、知行衆へは先規より三斗五升俵に而御百姓共地頭方へ年貢相濟候處に、御前米之如く三斗七升俵に

而向後納候様に被仰付候、右之儀に付御普請夫人足は給所百姓共よりは相出申間敷候よし免許なり、右之通此度舊法を被相止令或被相立候儀は重信様御家督之時御普代の諸士起證誓約之上に而右連判しヶ様に事濟候故、右之心底御感被成、夫々加増被下置度被思召候得共、左候得は公儀之唱茂如何と思召ヶ様に仕候は、世上之唱茂かろく、其上百駄にては如程之過拾駄にては何程之過壹駄にては何程之過と皆甲乙無之、大小諸士何茂某か寸志之志を顯さんと斗思召事、誠に賢慮を御腦被成、難有事不被申上候、古來之通に被成候は、可然よし御老中漆戸氏内談し右之儀に付壹ヶ年之御藏入米御領内中に而三千駄斗之御物入に御座候、依之數十年相濟候間勝手向役松井權太夫根森太郎左衛門其外彼是御老中様方と談じ、或時漆戸殿を以て御窺有之、重信様北九兵衛を被召出、初而右記所の御内意御物語り有、譬予死共子孫此式法相背候者は三世之勘當なり、若此法を破は當家則敗滅之至處也、此明年若者共へ申續へき旨被仰食、北殿兼而此事推量被致、其外之衆初而此の教訓を聞何茂涙に兩袖をぬらすと云。

一世人今以申成候如く重信様御家督之時御國中大に騒動仕り、或は八戸彌六郎或は



山田大學殿或は重信様共頃七戸と申時是を御名跡可然杯と申候、其外新參衆は水戸源二郎様と申衆江戸より申おろし候筈のよし三四に相分り申候、其内にも毛馬内文右衛門棟梁と成り工藤權太夫松岡覺右衛門奥寺八左衛門始め義を思ふ御普代衆大勢隼人様方へ付申候故如此に候、然る間御家督御入部之後右之連判一通外諸方に心寄申候人數、委數記録して去人を以て上覽に入候處に、上書御家督之次第と有之候、其段御尋被成候得は品々之事書載候よし申上候、上意にはケ様の物は某か見るものにあらず、心の安否を知て用に可立理なし、人を恥かしむる事其疑を求るにも似たりとて御手にも不被爲取爐に而即座に焼せられケ様は被成候得共誰か何某方、彼か某方の人と其頃連判人數御内心には委御存知被成候得共、少しも其隔を無之御恩賞も躰様に被成毛馬内文右衛門殿工藤權太夫始勿論壹粒之加増も拜領不仕候段深き御心慮有、後世の人は是を以て可考。

南部數馬様御分地之事

一直房公の御分地之時領内城何ヶ處有之由、尤何方成共本家勝手宜敷地に而配分可

仕由、郡奉行衆御内意有之、則御領分繪圖有増印城共所付被成八戸邊可然よし被仰上候由、尤重信様御内心には七戸城か、津輕境の押廻し可被遣か、無左は鹿角口を可被遣かと思召候得共、鹿角は其頃指たる城も無之候哉に而事相止め、七戸は御城有之候得共御普代處故御一生は猶豫被遊子細有之事相止め、八戸御城に而右之通に御座候、尤田畑不足の處故、志和の片寄に而足石高出申候由、其頃は郡山にも御城有之候得共邊境之地にもあらず、其上森岡の程近く候故思召入も不入候。

重直公御歌之事

一重信様御家督御相續被成、又七戸家斷絶仕候故御子様方の内喜庵様と申候を七戸を名乗せ御家相續被成候、此御方様御病身故御子無之候故御弟織部様を御養子に被遣候、御子孫斷絶無之七戸家名末百年繁榮なさしめん御事に而、是又重信様依仰如是之事。

一重信様は元和二丙辰年閉伊郡花輪に而御誕生被成、御母は同郡住人花輪氏娘、花輪氏は田鍍家之類葉たり、是より先閉伊一統之後御當家の屬從し彼娘を中嶋次郎助



に縁せしむ、干時利直様御代御小性たり、此段不遂披露して縁組之段不届に而治郎助切腹之罪に被補。

- 一 重信様御幼名花輪彦六郎重政と申、次に彦左衛門と御改被成利直様の五男なり。
- 一 慶安元年子二月七戸隼人殿死去被致子息無之七戸家斷絶仕候間、山城守重直様依命御舍弟花輪彦左衛門様を養跡に被爲立候、干時御年三十三。
- 一 七戸彦左衛門様慶安元年之冬十二月御養父之御名を被爲繼隼人様と御改被成候。
- 一 或時御屋敷之御門に雌雄之鳥巢を懸既に卵を生み可申様子に候、御家中始何茂希有之事に候鳥は樹木にこそ巢は懸め雀燕などの様にケ様なる處に巢を懸申事其相不可然と云、隼人様被及御聞即席興歌一首被遊御門之柱にはらしめ玉ふ
- 木にかけるからすたにさへきにかけるまして隼人はきにはかけまし
- 異説に其後右之鳥一兩日之内に何方共知す巢引候由。
- 一 重信様御家督御相續被成、又七戸家斷絶仕候故、四男之御子息様喜庵様七戸と名乗せ御家相續被爲成候、此御方御病身故御舍弟善之助様後に織部様なり御養子に被成御家御子孫無恙様に是又重信様之依命。

一 重信様御養父七戸隼人様屋敷は今猶山屋敷御新丸の向に御座候、古老之中傳に七戸隼人殿御子無猶山氏より養子被爲致候所に不縁にて親子之好切れ、楢山家に被歸候、其後隼人殿存入有之名跡之定不被致候、終に死去被致候、依之前に記す所の如く花輪彦左衛門様御名跡に御立被成、此故に右之好被思召候而猶山氏とは御懇意被思召入有之御家督之時御家中騒動仕り御登り金無之時も猶山氏働能候由彼是之思召候にや、右之屋敷楢山氏へ被遣候由少し疑ふ所有猶重而可明候。

### 高麗胡桃木之事

一 御新丸前廣小路に高麗胡桃の木今以有之、是は其已前自空長老世俗に實長老といふ肥前の國より當所に被配流之砌、高麗くるみ十粒持參被致候、其頃山城守にも依御催、重信公茂御出被成候處御庭に被爲植候、其後七戸隼人殿御養子に成給ひし後も右胡桃御秘藏に而御居間之前之御庭に被爲植候、御家督之後子細有之御新丸前廣小路に罷成候、左候得は右の樹木中に罷成、往來之障にも候間切候は、可然よし、其頃之被胡桃の木の出來を御物語り被成、其後被仰候は予々様之制詞全く此くるみを惜



み依怙するには無之候、惣而ケ様の場所には年古き樹木の有之は猶物古く見候得而可然ものに候、只今舊好之屋敷を轉して諸人往還の地と仕事猶難默止候得、共名奉行役人達に被申候右之段達上聞其時々にも存候へし、先年山城守殿時代石合の火事の砌小路挾に依而新丸前にて貴賤多く怪俄仕候、向後左様之事茂有之候は、且は貴賤急參の時も猶豫可仕候、然は則御前之爲にも不罷成候由を兼而被思召候故及此儀に候、次に往古之儀を引而御物語り有り、昔大唐之軍功之諸將を召て着到に被記候所に、諸將前後を争ひ姓名を呼て各々名字を被記候所に、壹人の大將其身の武功を顯事を恥て一の大樹の蔭に身を隠しけり、帝是を見悟り玉へ深く是を被賞末代の據にとて大樹の號を賜、是より大將を大樹と云しとなん、依而着到之場には大樹を植と也、和國尤も是を模す、今幸能所に古老之胡桃有り是願ふ所なり若古來より無之候は、今新に植度事に候定而末世往還之妨と稱し、是を可切と云者有ん、年若の者共は此事能々申傳置候得は、是を背者は某か心を背而已ならず、當家破却の邪魔と思ふ事に候と暫く物語り有しなん如件。

或人曰古來馬場丁大火事之時も筆者は彼の胡桃の木の下に木をば左に見御新

丸の方へ向て座し、一々姓名を記す、諸士は綱御門先の廣小路に群居して一々御帳に付、其後行信様御鹿狩等之時のみならず、度々舊例を守り此式を學玉ふと云々。

### 閉伊郡諸士之事

一斯て奥東閉伊郡九拾一郷と申は、遠野氏・大槌氏・田鍬氏・黒田氏等か支配とす、然るに遠野孫三郎以下何故南部に違背すると、其濫觴を尋るに以前自分に我物と押領す、他之勤候伺せずして我儘に驕奢に長す、然る所に天正十八年秀吉公東征之折柄爲御代官淺野彈正大弼源長政下向せられ既に軍兵を遣し當郡地頭等も御闕所可有所に往古當郡一度南部領内たるに依て縱令當時違背の族雖、有舊據を糺して南部大膳信直此由を淺野彈正長政・石田治部少輔三成等に被參、則及披露しかは南部本領たるの條尤也、併近代違背之族有之段、此儀新に下知を加るの間、當郡靜謐たる様に可令領知、若逆徒蜂起の下知に任せ早く可成敗強大せは早く可言上御代官を被糺明速に御闕所可被成由被仰出、尤當郡の住人等自今以後南部に對し少も不可有



違背若野心於有之者御代官を以て速に御關所被成候條遠野大槌以下之地頭等に御下知を下し玉へは郡中の地不心南部之簇下と成然共信直公糠部近邊たに九戸政實か微威に挾られ玉ひしかば遠境之閉伊郡は領知のみにて歸服之沙汰はなかりし所成哉稗貫郡一揆起り天正十八年十月廿三日葛西大崎江刺伊澤和賀稗貫迄一揆起公方の御代官淺野庄左衛門亂妨し殊に天正十九年一亂之砌上方勢下向と聞遠野大槌以下之地士大に驚後難を恐て急き糠部へ馳參信直公之手に屬す既に九戸も亡しかは是より不及異儀屬從然共當郡之地士數代自立之心習にや遂に三戸の出仕苦勞に思へし折節九戸騒動に依て諸民困窮之救として年貢地役或は未進等迄諸郡夫々免許配分せられし所に當郡は上方下向之道筋にもあらず又騒動地にも遠し依て諸民困窮之事も有間敷といふ翌壹ヶ年の海役斗免許せられ其外年貢地役は田法之通り郡司櫻庭安房迄可進納と兼而被下知玉へしを當郡之地士は安家何某斐綿彌九郎穴澤安女其外田鍍の一黨舟越一類を始大方三戸へ伺上せず斯しかは信直公鬱胸不少遠野大槌以下地士共を可被打亡と被思召候得共遠境之險路なれば中々心に難叶思慮を腦されける折節遠野孫三郎か一族に鱒澤左馬助

廣勝と云者遠野と不和に成り既に及鬪爭彼の鱒澤は元來は當郡の地士なれとも往年子細有て糠部郡へ來り暫く住居せし處に諸人彼か勇敢を慕て南部之一族之娘を鱒澤に縁せしむ夫より四五年を経て妻子を俱して本所へ立歸家中の身なから専ら武威を振ふ仍而遠野孫三郎是を怪み計策を以て彼を亡んと議す此事告る者有て鱒澤居館に引籠り互に境を取られず既に確執取結せり合に度々に及けれ共武勇之雄士なれば遠野大勢とは申せとも戰毎に利を失ふ然るに當所大に騒動す諸人寢に心を不安食するも其味を甘しとする事なし此事糠部へ聞ゆければ信直公大に憤り玉へ某領内に於て下知を不請私に爭戰に及ぶ事予を嘲る所存なり乍去今是を糺すに不及双方和儀を入よと宣ければ櫻庭安房當郡之奉行職に依而則命を得て慶長四年の春手勢三十拾余人相具し急遠野に到り扱を入しかは双方意恨忽解て接戰既に絶たり仍而向後私の鬪爭は上を嘲けるに似たり是より南隣に境をたて可然と評議し遠野と鱒澤か領知を等分に分ち境を立しと也。

### 小笠原氏之事



一其頃信州小笠殿之一族小笠原伊豫守と申せし人甲州武田の爲に没落す信州を退き奥州江牽浪し民間に陸を交て鎗兵法或は文書筆等之師杯せられ彼方此方と漂れける夫より閉伊郡に至り段々糠部へ志を被通しかは閉伊郡之内船越と云所に至り弟子余多儲け暫此所に逗留し玉ふ其内に當所之長たる船越か掣と成年月を送り程なく子息を儲け其身の上之慰と最佳能被思召けるにや永く住居處と被定候といふ。

奥州治亂之事文冗長にして關係なければ省けり。

閉伊津輕石之事傳疑小史二ノ卷にのせたれば省く。(原本の儘)

中道等校訂

祐清私記終

平泉雜記



## 解題

「平泉雜記」は相原友直の著である。平泉は藤原清衡基衡秀衡三代の遺蹟、曾て奥北の榮華を此所に鍾ぬ雄渾にして華麗なるくさぐさの傳譚を、今に残して首を回らしめ、人をして惆悵の感を抱かしめること、此の地の如きは他にあまり無いと言うてもよからうと思ふ。

友直はこの「平泉雜記」の外に「平泉舊蹟志」、「平泉實記」を書いて大に其の舊蹟を誇揚して居るのである。「平泉雜記」は名の如き雜錄とも申すべきものであつて、三代の昔はもとより、源義經の奔竄してこゝに倚つた顛末、これに纏絡する俚人の説話などを、世に流布する文献を引接して詳かに考證の筆を加へた。又舊跡の京洛及び關東に在つて、而も事平泉に關するものは、同じく項を擧げて記して居る。平泉を觀んとするものゝ仔細に讀むべき絶好の隨筆と云ふべきであらう。

友直は元録十六年七月四日、氣仙郡高田に生れた。字三畏、藤原姓とある。考諱は友常、妣は小川氏。非凡な天資を享けたと見え、幼くして父より句讀筆札の業を受け、



成長して佐藤如顯、役有譽に經史を、仙臺藩醫大槻良設に従つて醫を學んだ。田中省吾、佐久間義知等の學者と親しかつたと云ふ。後京師に赴いて後藤香川等の名醫に就いて研鑽するところあり、東歸してから「醫談資」を著はした。著書には此の「平泉雜記」の外「氣仙風土草」・「平泉舊蹟志」・「平泉實記」・「松嶋巡覽記」若干卷あり、何れも後人を裨益して居るものである。天明二年五月廿一日八十四の高齡を以て歿した。西磐井郡赤荻村筱谷の莊に葬る。

本書は故伊能嘉矩氏が宮城縣教育會謄寫本を校訂して異同を正されたものを、更に平泉の志羅山頼順氏所藏本を以て校勘したものである。書中の註に「伊校本」とあるは即ち「伊能氏校訂本」の略であつて、轉寫流布に際して往々免れざる布置、文字の誤謬も決して鮮くはない、本書の原據本も亦一段の考量を加ふべきものであらうと思ふ。

# 平泉雜記卷一

相原友直著

## 鎮守府將軍一

鎮守將軍ノ始ハ人皇十五代神功皇后自ラ軍勢ヲ率ヒ玉ヒテ新羅高麗百濟ヲ征伐シ玉ヒ犬矢田宿禰ト云ル人ヲ新羅ニ留メテ鎮守將軍トシ三韓ヲ下知セシメ、皇后ハ歸朝シ玉フ、是鎮守將軍ノ始也、日本ニ於テ鎮守府ヲ置キ將軍ヲ任シ玉フハ、四十五代聖武天皇神龜元年甲子ノ歲始テ府ヲ奥州ニ置キ、大野東人ヲシテ東海東山節度使兼鎮守將軍トシ奥州ニ下シ玉フヲ始トス。歷代征夷使考源義和此後代々ヲ歷テ藤原親述聞老志ニ詳ナリ清衡同基衡同秀衡モ鎮守府將軍ニ任セラル三代將軍ノ事東鑑卷九由利八郎カ神龜元年ヨリ秀衡ノ時ニ至ルマテ四百六十餘年ノ間絶ル事無リシニ、秀衡ノ死後賴朝征



夷將軍ニ任シテ以來鎮守府將軍ヲ置事無シ、其後百四十餘年ヲ過テ九十五代後醍醐天皇ノ御時參議兼右近中將源顯家卿ヲ鎮守府將軍ニ任セラレ、奥州ニ下シ玉フ、伊達郡靈山城ニ住セラル、於今靈山ニ國司館ノ舊跡有リ。

考證

職原鈔云 鎮守府將軍副將軍軍監軍曹陸奧者上古以來爲邊要爲其國境廣元明天皇和銅五年九月分置出羽國元正天皇養老二年置按察使令監察兩國事聖武天皇二年陸奧國內又置鎮守府府國相並行國事云々又曰聖武天皇御宇陸奧國置鎮守府初任將軍遺之若是本朝置軍府之初歟征夷征東等臨時置之不聞有其府也

職原鈔增註云 聖武天皇時未置鎮守府其後天平寶字五年閏十二月以從五位上田中朝臣多田麿伊校本、多太麻呂爲陸奧守兼鎮守副將軍同九年爲鎮守將軍是有鎮守名未有置府之名其後及仁明天皇承和十年九月始陸奧州置鎮守府是置府之始也見續日本後記三代實錄卷八云貞觀六年三月八日甲午正三位行中納言源朝臣融加陸奧出羽按察使本官如故云々

秀衡家臣ニ

金剛別當秀綱

下須房太良秀方秀綱カ子

余平六愚按ニ奥州ニ金氏アリ余ノ字疑ラクハ金ノ字誤リカ

若九郎太夫

田河太郎行文ナキ

秋田三郎致文ナキ

伴藤八

佐藤庄司伊校本、莊司。又湯庄司トモ信夫庄司トモ云

伊賀目七郎高重伊校本、伊賀良目

河邊太郎高經フネ

佐藤三郎秀員カキ

金十郎

勾當八

赤田次郎此者殺ス泰衡ニ

若次郎

河田次郎

由利八郎 東鑑卷ノ廿一ニ由利中八郎維久ト云者アリ此人ノ親族ナランカ。

隆實 此人賴朝東征ノ時ノ囚人ナリ、姓氏ヲ脱スト。伊校本、郷説ニ栗原郡一ノ迫庄本、脱ス

長崎村ノ城主長崎四郎隆實ト云傳ヘリ、泰衡カ家臣ニシテ義經討手ノ大將ナリト云此人ノ事ナルニヤ。

豊前介清原實俊

橘藤五實昌實俊カ弟

大河次郎兼任

同嫡子鶴太郎

同次男幾内次郎



二藤次忠季 兼任ガ弟  
熊野別當

同新田三郎入道 兼任ガ兄  
名取郡司 以上兩人ノ姓名ヲ不記

以上廿七人東鑑ニ出テ秀衡泰衡カ家臣。

俊兼 此人姓氏ヲ脱ス

金清兼

坂上季隆

右三人清衡ノ經藏寄文ニノスル所ノ家臣。

照井太郎高春 一説ニ高直

長崎太郎 一説名佐光

同次郎

以上三人泰衡カ臣義經記ニ出。

姉齒平次光景 郷説ニ泰衡カ臣栗原二ノ迫庄梨崎村ニ居館ノ跡アリ、此地ヲ領セシト云傳フ。

柴田四郎是則 里老ノ説ニ秀衡カ家ノ子也ト云。柴田郡舟岡村ノ城ヲ柴田城ト云、又四保城トモ云リ、是則カ城ト云、東鑑卷十六ニ芝田次郎カ事アリ此人ノ事ナルニヤ又ハ親族ナルニヤ。

金澤九郎 村老ノ説ニ岩井郡流ノ庄金澤城主ニシテ秀衡ノ臣ナリト云。西條采女入道 桃生郡寺崎村澤山ノ城主秀衡ノ臣ナリト云傳フ。

沼倉小次郎高次 栗原郡三迫ノ庄沼倉村ノ城主也、此人義經之屍ヲ我領地ニ葬シト云、泰衡ノ家臣ナルヘシ。

愚按ズルニ秀衡ノ臣豈此人々ノミニカキランヤ、偶記録又ハ郷説ニ殘レル者右ノ如シ、近世印行ノ書ニ著ス處信用シカタキ者多シ故ニ不舉之。

西行法師歌 三

西行ハ秀衡ノ一族ナル事東鑑卷之四同卷之六並ニ大系圖等ニ出タリ、西行平泉ニテ詠ル和歌アリ。

十月十二日に平泉にまかりつきたりけるに、雪降嵐はけしく殊之外にあれたり鬼、いつしか衣川見まほしくて罷向ひて見けり、河の岸につきて衣川の城見まはしたる、ことからやうかはりて物を見る心地しにけり、○伊校本、汀水岸に氷りて取わけ寒ければ

山家集

西行法師

とりわきて心もしみてさえそわたる衣川見に来るけふしも



夫木集

衣川汀によりて立浪は岸の松かね洗ふなりけり

陸奥國平泉に向ひてたはしねと申山の侍り、こと木は少なきやうに櫻の隈見へて花の咲たるを見て讀る。

山家集

聞もせず田東山の櫻花吉野の外にかゝるへしとは

奥に猶人見ぬ花のちらぬあれや尋越らん山ほとゝきす

讀耕林子本朝遜史曰佐藤西行玩月于奥白河而杖履之所及偶見野中之一墓問藹藹者曰何也曰是中將實方之墓也西行爲催感慨乃寓于奥羽兩國長藤原秀衡之館實是秀郷之冑而西行亦其同出自也秀衡接遇最深且曰滯留以可送數歲西行不諾揮手而出又向西云々。

磐井清水 四

岩井ノ清水ハ岩井郡東山松川村ニアリ、郷説ニ秀衡ノ若水ニ汲用タリシト云ル石泉アリ、平泉ヨリ東南方ニテ奥道二十餘里奥道ト云ルハ奥地方ノ俚俗六町ヲ一里ト之ヲ關東道アリ、泉ノ傍ニ民家アリ其宅ヲ岩井圍地ト號ス。奥ノ民宅地ノ近邊トモ云リ愚按スルニ岩井ハ祝ニ通ヒ松川ノ松ノ千歳ヲ契ルヲ取テ伊校本、松ノ千歳若水ニ汲用ヒタルモ宜哉、俗説ニ殃災アラン時ハ水色變スルコトアリト云。同郡流郷清水村ニ花流泉ト謂ルアリ、秀衡茶ヲ煮ルノ水ニ汲シト云。平泉ヨリ（マ、）ヲ隔ツ岩上ニ花木アリ、春風花ヲ散ストキハ水面紅白ヲ浮ブニ因テナツクトカヤ、又流紅ト稱ス、又隣村金澤村ニモ大小泉アリ、是又秀衡ノ茶泉也ト云。

朝日館 五

朝日館ハ本吉郡志津川ニアリ、秀衡ノ四男本吉太郎伊校本、本吉四郎隆衡カ館ナリ、志津川驛ヲ隔ツ事六町西ナリ、本吉ハ隆衡カ領知セシ處ナリ、或人昔ノ驛ハ館下ニアリシヲ後世今ノ地ニ移スト云傳リト云。



春風之墓 六

秀衡ノ舞童春風カ墓栗原郡三迫庄赤兒村○伊校本、振假名アカイチヨニアリ。昔秀衡歌舞ヲ好ミ數十人ノ舞童ヲシテ常ニ舞曲セシメテ樂ミケル中ニ、一人ノ少年名ハ春風ト云ルアリ、其容貌美麗ニシテ其業モ他ノ童ニ勝レケレハ、世ノ人モ心ヲウツシ秀衡ノ寵愛モ淺カラス、他ノ舞童○伊校本、多舞童等ハコレヲ妬ミ惡テ潛ニ人ヲ憑テ彼ヲ殺サシメ、其屍ヲ此處ニ埋ミケル、春風常ニ好テ紅モミノ衣裳ヲ着ケル故ニ後世ノ人此村ヲ赤兒トハ號セリ。

營岡 七

營岡ハ栗原郡三迫庄八幡村ニアリ。滿仲五代記ニ曰、昔田村磨征蝦夷之日於是支整軍士、自其以來號曰營塹タムロシ其迹猶存。○賴義亦於此處邂逅武則ニ。○營岡八幡宮アリ、賴義ノ寄附狀アリ。

鎮守府將軍陸奥守

賴 義 判

八幡宮奉勸請

營岡御事河境嶺分五十丁

十六日出陣爾後官軍勝利賊徒滅亡當國安祥祈願再拜々々敬白

康平五壬寅歲八月十三日 佐々木源太夫章經

多賀波場城 八

玉造郡葛岡村ニ古城アリ。郷説ニ所謂東鑑ノ多賀波々城ナリト云リ、又西木戸國衡カ取出ノ要害トモ云リ。

愚按ルニ高馬場ノ文字ナランカ、東西十間南北十五間。

栗原寺 九

栗原寺ハ栗原郡二迫庄栗原村ニアリ。今鑿作山上品寺ト號ス、是乃昔ノ栗原寺也。文治年中大河次郎兼任カ討レシ處也、事ハ東鑑卷之(マ、)ニ見エタリ、又義經記等ニ



毛此寺ノ事有。

殘夢傳十

羅山翁神社考曰近頃有人云奧洲有殘夢者自字曰呼白又自稱秋風道人。不僧不俗風顛漢自曰與僧一休友喜得其禪要又時々與人語以元曆文治之事而曰其時義經爲何事辨慶爲其時誰伊校本作此事與平氏戰于某其話殆如親見之者人怪而詰之則曰我忘之矣浮屠天海及松雪者遇殘夢殘夢好枸杞飯食之海又喫之與人語云殘夢長生不速事服枸杞故也人怪之曰彼蓋常陸房耶海聞喜之人送枸杞海受爲菜飯餌焉海之言曰任意隨時勿急勿速緩々慢々是延壽命人或信之嗚呼浮屠妖惑之弊無所不至昔漢文之好長生也文成五利之儕說帝曰黃帝不死然其何在哉彼一詐也是一詐也伊校本由是觀之人君之嗜好不可不慎。  
按スルニ文成五利カ事史記卷之十二孝武本紀ニ見エタリ。

清悅傳十一

聞老志曰州人傳云曩昔平泉有異人號清悅自言本是洛陽之產也嘗從豫州君東行臻斯邦伊校本值泰衡弒豫侯來落魄降民間仍說舊事多與世傳者異也其業以劍術教之其容貌經歲月自亦伊校本若如壯年鄉人怪問之曰子顏色不減舊事非金石之質其而壽者今如此請聞其故答曰我先君爲梶原所讒踰躑至茲邦秀衡克愛護新設居高館待之亦甚厚是以上下寧處平日多暇一日與同輩携釣竿而遊于衣川行行窮源茫然忘踞遠近忽見老父釣石磯因與之話漸及斜陽日將沈伊校本老父曰樂只釣魚之遊也伊校本不思今日與三子優遊偷閑於此恨晨之喜微矣我弊廬在近請携二三子歸於是不堪辭從老父後未幾有一翠洞榜曰窓寒窩延登于堂回首松間寂々不見人自炊羞饌傍置赤肉食之其味殆所未知於人間也二客怪而不食焉老父曰客無怪之伊校本是則人藥者也嚼之令人其壽萎三光某聞此言猶悅而食之且懷其餘焉笑譚移晷已及黃昏相揖辭謝去不覺出前途重來問之惘然不可復得矣想是地仙之徒所謂仙境者歟某食肉後稍覺壯健也聞者歛耳斯人寬永之頃猶見人間焉後來不知所終所說文治舊話記得存于俗間焉自文治年中至寬永年中已四百年

愚按ニ文治舊話記得存于俗間ト云ルハ蓋今在ル處ノ清悅物語ノ事ナルベシ此傳



ヲ看ルニ全文清悦物語ヲ以書スルニ似タリ、又聞老志ニ按、殘夢、事略、髣髴、干清悦事、其人同、而其傳異乎ト云リ。

辨<sup>ス</sup>清悦物語<sup>十二</sup>

俗間ニ清悦物語ト云ル一冊ノ書アリ。小野太左衛門ト云ル者寛永六年二月清悦ト云ル人ニ問テ義經奥州下向ヨリ滅亡ニ至ル迄ノ話ヲ筆記セシ者也。太左衛門ハ村田御曹子右衛門太夫ト云ル人ノ家臣ナリト云リ。予正徳五年ノ比四五十年前ノ人ノ其書ヲ寫セルヲ見タリ。

然レバ是古來俗間ニ傳寫セシニヤ又鏤版ノ書ナルヤ否ヲ不知。按ズルニ文ノ拙ト其事ノ迂誕ナルヲ以テ見ルトキハ俗間ニ寫傳フルノミニシテ印行ノ書ニハアラザルベシ。清悦ト云ル者義經ノ家臣ニシテ、廿歳バカリノ時義經ニ從ヒ京都ヨリ平泉ニ下リ、異人ニ逢テ異物ヲ食テ長生シタル義經ノ臣四人ノ中ノ一人ニテ、寛永七年マテ存命シテ平泉ニ住ケルト云リ。○原頭書、和漢名數ニ云、義經ノ四天王、鎌田・藤田・盛政、同藤次、光政、佐藤、嗣信、同忠信、右書ニハ此四人ト出リ、太左衛門ハ清悦ヲ師トシテ兵法○伊校本、註俗間劍ヲ學ビケル故ニ昔ノ事ヲ問テ術ヲ指テ兵法ト云

書記シタリト云。文治五年義經自盡ヨリ寛永七年マデハ四百四十二年カ、清悦廿歳斗リノ比平泉へ下ルト云バ、大概四百七十八歳モ長生スルモノナランカ。義經ノ平泉へ下ル事義經記等ノ說ニヨル時ハ都テ三ヶ度カ、何レノ時供奉シテ下リタルニヤ定カナラズ、清悦トノミ記シテ姓氏モ知ズ。

愚按スルニ近年編集流布ノ鎌倉實記ニ、義經ノ雜色喜三太ガ名ヲ清悦ト云リ。然レバ彼ノ喜三太長者スル者カイブカシ。鎌倉實記ノ書造言附會セシ事多ケレバ信用シガタシ。又考ルニ近世ノ義經勳功記ト鎌倉實記ノ十七卷目等ハ、清悦物語ヲ基本トシテ潤色シ作レル者ナルベシ、又清悦ガ太左衛門ト談話ニ義經ハ生害シ、彼ノ異人ノ與ヘシ肉ヲ食シタル四人ノ者ハ敵ノ中へ翔入テモ殺害スル者ナキ故ニ生殘レリト云、抱腹絶倒ニ堪タリ。古ノ仙人ト云ル者モ劍戟ハ遁ルベキ様無レバコソ稽康ハ兵解ナリト列仙傳ニモカケリ。

愚按スルニ伊達右衛門大夫宗高公ハ、黃門政宗公ノ七男或ハ九男ト云リ、從五位諸太夫ニ任ス、陸奥柴田郡村田○伊校本、城主也キ、寛永三年、台徳院殿御上洛ノ供村田○伊校本、奉ニテ京都要法寺ニ於テ病テ卒去セリト云、村田御曹子トハ此人ノ事ナルヤイブ



カシ、暫ク書之俟、後考中尊寺北本坊カ曰、御系圖ノ中ニ黃門公ノ七男宗信アリ、筑前衆ナリ、追腹八人アリ此上ニ女子二人アリ、男子斗リニテ七人、女子加フレハ九人ナリ、若此人ノ事カ外ニ似合シキ事見エズ、晴宗公ノ御舍弟ニ村田好齋ト云人御系圖ニ見エタリト北本坊一〇伊校本、北本一ガ話シナリ。

千 厩 十三

岩井郡東山千厩ハ平泉ヨリ東南ニアタリ奥道四十餘里ヲ隔ツ。昔秀衡厩ヲ造リ馬ヲ立置タル所ナリト云リ。千厩驛ヲ去ル事十二町余河畔ニ石ヲ疊テ窟ヲ造レル有、廣一間半餘高八九尺餘、是馬ヲ繫タル處ト村老ノ説ナリ。予一日義經記ヲ讀テ是ガ徴トスベキヲ看ル。曰辨慶思ヒケルハ人ノ重寶ハ千揃ヘテ持ゾ、奥州ノ秀衡ハ名馬千匹、鎧千領持ツ、松浦太夫ハ籠千腰弓千張ヲ持ト云伊校本疑ラクハ此地厩ヲ構テ千ノ馬ヲ畜養セシ所ナルニヤ。

愚按ズルニ千厩ニ於テ麻ヲ以テ鞆オモヒシカヒユカヒ當胸ヲ作ル、是ヲ千厩素生三懸ト云、此地ノ名産也。國主ニ貢シ且諸國ニ於テ士庶人賞之用ユ、郷説ニ此所ニ住ル土佐ト云者、昔近江ノ森山ノ織三懸胸懸、面懸、尻懸ヲ是ヲ三懸ト云、ホドキ見テ工夫シ竹鍼ヲ以製リ始シト云、葛

西ノ時ノ事ナルニヤ未詳。元和二年ノ頃國主ヨリ知行ヲ拜領シテ貢之、其子孫不絶今ニ至テ貢之、又此地ノ婦女子能コレヲ製テ恒ノ産トス。再按ズルニ元和ノ頃始テ造リ出スト云トモ、疑ラクハ秀衡ノ時ヨリ造リ來レル遺風ナルベキカ。此地ニ於テ此物ヲ造ル事能ク所ノ名ニカナヘバ也。又或説ニ此地昔ハ松澤郷ト云リ、此所ニ傳龍山大光寺ト云寺アリ、其寺ノ雲版銘ニ松澤郷トアリト云リ。按ニ松澤ハ郷名ニシテ千厩ハ村名ナリケルニヤ、又石窟ヲ以證據ト爲ニハ足ラザレ共、今ノ村號彼是ヲ以併セ看ル時ハ地名ニハ非ズシテ千疋ヲ繫ケル厩アリケルニ依テ、世俗千厩ト呼來レルヲ以後世伊校本、村名トセシモ斗リ不可知。是牽強好事ニ似タリト云トモ、其事實ニ就テ書之同志ノ人ノ考ヲ待者也。

衣 川 殿 十四

盛衰記卷十九云、文覺ガ爲ニ内戚ノ姨母一人アリ、其昔事ノ縁ニ付テ奥州衣川ニアリケルガ、歸リ上テ故郷ニ住ム、一家ノ者共衣川殿ト云。娘一人アリ名ヲバ阿登麻トゾ云ケル、去ドモ衣川ノ子ナレバトテ異名ニハ袈裟ト呼ブ云々。



人物志曰阿登麻一名衣川袈裟母洛人居奥州衣川又歸于洛故世人號衣川老嫗。阿登麻嫁源渡而當世之美婦也時遠藤武者所盛遠窺見彼妻之美神氣蕩喪不知所持遂欲劫其母爲媒母恐召其娘泣語之。娘謂不從之則殺母不孝。從之捨夫不義。不孝不義我生不如死乃諾曰請入我室殺我夫。然則我爲君奉箕箒其夜浴臥者我夫也證頭髮之濡而刺之盛遠大喜投暗直入刺其夫獲首提出而檢之乃婦之首也盛遠感婦之貞潔而且悔且泣祝髮爲僧改名文覺年十八。然爲婦營塚名曰戀塚。

葛岡十五

葛岡ハ玉造郡ニアリ頼朝公奥入ノ時勸賞トシテ畠山次郎重忠ニ賜ハツタル地ナリ事ハ東鑑ニ詳ナリ。東鑑ニ葛岡郡トアリ今ハ村也郡郷縣庄等昔紛レ書スル事多シ東鑑ニ平泉郡内ト書ル處アリ平泉ハ郷名ニシテ郡ニハ非ズ又延喜式拾芥抄節用集ニ長岡郡アリテ葛岡郡ハ不見或說ニ節用集ニ葛岡郡トアルハ葛岡郡ノ誤リナリ後世村名トハナレリト云。古城有葛岡城ト云郷說ニ重忠ノ城ナリト云天正ノ比葛岡又葛岡兵衛トモ云葛西兵衛共云リ東鑑卷之十六ニ葛岡郡新城野社僧坊領ノ地ヲ論ゼシ事アリ同十

九卷ニ長岡郡新城野社ノ事ヲ載ス二郡イツレモ重忠ガ領地ト云東鑑脫漏ニ葛岡郡小林新城野ノ事ヲ記ス蓋シ東鑑ニ所謂葛岡長岡葛岳皆葛岡ヲ傳寫シ誤レル者カ。重忠ガ所領タルヲ以テ證トシ小林新城野トアルヲ以テ據トセバ思過半矣伊校本頭註古館東西九間南北十七間古館記ノ説同斷

義經勳功記 十六

義經勳功記ノ書ハ備中ノ安達東伯ト云者諸國ニ游行シ伊校本遊行シテ平泉ニ來リ常陸房海存カ仙人ト名ヲ改メテ平泉ヘ折々往來スルニ逢テ昔ノ物語セシヲ聞テ一ツ書ニシタルヲ京ノ馬場玄隆倍意潤色シテ一部二十卷ノ書ト爲シ義經勳功記ト名ツケタリ正徳二年壬辰ノ頃ノ作ナリ然レバ東伯ガ殘夢ニ逢シハ元祿寶永ノ間ナルベシ。其書全編殘夢ガ談話也ト云ト言ドモ伊校本畢竟古來ノ記錄ニ依テ書リ其間ニ詐僞ヲ雜ヘ古來ノ說ニタガヒテ新奇ノ怪談ヲ設テ愚蒙ヲ欺キ喜バシム具眼ノ士ハ瞭然トシテ虛實ヲ辨ズベシ。今其杜撰ナル者一二ヲ擧テ左ニ書ス餘ハ枚舉スルニ遑アラズ考テ知可ナリ。



勳功記ニ東伯衣川邊ニ逗留シテ逢隈川ノ○伊校本、逢隈川ノ清流ニ凡心ノ垢ヲ川筋ニ洄リテ川上ヲ遊覽シテ異人ニ逢テ辨慶海存三人、人魚ト云物ノ肉ヲ與ヘラレ各コレヲ食テ長壽ヲ得テ三人共ニ仙人ニナレリト、其細註ニ衣川ハ駒形嶺ノ麓ヨリ流レ出テ逢隈川ニ流入ル、逢隈川ハ大川ナリ、衣川ハ小川ナリト云リ。

愚按ズルニ殘夢東伯ガ謂ル逢隈川ハ北上川ノ事ヲ云リ、北上川ノ源ハ南部領岩手郡ヨリ出テ數郡ヲ歷テ仙臺領ニ入り、膽澤郡江刺ヲ過ギ岩井ニ入テ平泉ヲ經テ數郡ヲ過キ鹿股ニテ二ツニ分レ、牡鹿本吉ノ兩郡ニテ海ニ注ツク、又阿武隈川ノ源ハ白川領甲子山ヨリ出ツ、白川城邊ヨリ上流ヲ妻戀川ト云、下流ヲ逢隈川ト云、伊達郡ヲ過テ仙臺領ニ入伊具、亘理ヲ歷テ荒濱ニテ海ニ落ツ逢隈ハ仙臺封内ノ南方○伊校本、南方河ノ大北上ハ北方ノ大川也、其所ニヨリテ遠近ノ違ハアリト雖ドモ、大槩平泉ノ北上川ヨリ亘理ノ逢隈川マデハ相隔ツ事ハ南北ノ間三日餘ノ行程ナリ、然ルニ何ゾヤ殘夢北上ヲ指テ逢隈ト云ルハ實ニ夢中ノ語ニ似タリ。信意再撰ノ時亦兩老人ガ老語ニ從テ黑白ヲ辨ゼザル事何ゾ如是ヤ、予是ヲ談ズル時或人傍ヨリ云ルハ、今ノ北上川昔ハ逢隈川ト云ルモハカリ知ベカラス、漫リニ難ズル事勿レト、予答之曰、古

ノ事ハ我是ヲ不知ト雖ドモ、既ニ田村將軍東夷征伐ノ延曆廿年ノ頃、逢谷窟ノ寄文ニ、東ハ限、北上川トアレバ殘夢以前ヨリノ名ナル事不可疑之也。又勳功記卷之三、平泉繁昌ヲ記スルニ全ク東鑑ヲ採レリ、然ルニ彼書ノ傳寫ノ誤ヲ不知シテ奥六郡ノ中和賀ヲ賀トシ○伊校本、嘉保ノ曆號ナルベキヲ康保ト書リ、是等ヲ以テ其書ノ偽作ナル事ヲ可知、餘ハ悉不舉。

重 家 館 十七

鈴木三郎重家が館、栗原郡三ノ迫庄大原木村ニアリ、今寺トナル、尼我山喜泉院ト號ス、後世鈴木參河カ居城也ト云、古城考ニハ見エタリ○伊校本、云リ、是ハ天正年中ノ事ナルニヤ大原城ト號ス。

義經渡蝦夷 十八

義經蝦夷島へ落行タリト云事古來ノ俗說ニシテ、或ハ實說トシ又妄談トス、人々其好○伊校本、好ミ信ズル處ニ從テ彼ヲ是トスレバ是ヲ非トシ、彼ニ從ヘバ是捨ツ。東鑑盛衰



記義經記太平記劍卷等ヲ信ズル者ハ平泉ニ於テ自盡セリト云、又近世ノ武家評林ノ附記義經勳功記鎌倉實記等ノ書ヲ信ズル者ハ蝦夷ヘ落行タリト云、然ルニ其諸說モ家傳ト云、或ハ異人ノ譚話ナリト云、或ハ蝦夷ニ死タリト云、又唐ヘ渡リ仙人ニナリタリト云ノ類ニテ、造出ス者我慮ニマカセテ作ルガ故ニ各異ニシテ遂ニ歸一ノ無論、實地ヲ踏モノハ豈是ヲ探ランヤ、察スルニ俚俗ノ談話ニ本キコレヲ書ニ筆シ新奇ノ事ヲ以テ世ノ愚昧者ニ售ントスル者也。其書ヲ看ルニ地理ノ違ヒ文章ノ妄多クシテ信ジ難キ事而已ナリ。故ニ予ハ嘗テ平泉實記ヲ著スニ東鑑ヲ采テ他ノ疑シキヲ不求、是捨私論、而從公論、不取野史、採正史者也。

東鑑訓點 十九

東鑑ノ地名ノ訓今稱スル所ノ地名ト違ル者アリ、蓋是古昔ノ訓ニシテ後世ニ改メ號スル者カ、又土師聊ト訓ヲ加ル時誤レル者カ、今ノ號ト違ル者ヲ左ニ舉グ、只泰衡征伐ノ卷耳ニシテ不涉他、華山ヲケセ○伊校本、ト訓セリ、今栗原、○伊校本、三、迫ノ中ニ華山ト云所アリ、羽州ヨリ奥州ヘノ通路ナリ、大河兼任秋田ヨリ打越華山ニカ、栗原

寺ニテ殺サレタリ、栗原寺前出、華山ニ近シ、本州氣仙郡アルヲ以テ誤レル者カ、又三、迫ヲミツセト訓ゼリ、栗原郡一迫庄、二迫庄、三迫莊、今迫ト○伊校本、ト訓ズ、一莊々々ノ境ニ川アリ、其間ニ狹ルノ意カ、糠部ヲスカベト訓ゼリ、今南部領二戸、三戸、九戸、北ノ四郡古ノ糠部ナリト云、今スカブ○伊校本、ト訓ズ、希婦ヲキフト訓ゼリ、是モ南部領鹿角郡狹布ノ事ナルベシ、ケフト訓ズ、古歌ニ詠ル細布ノ名所也、又東鑑ニ糟部ト云ル糠部ノ誤ナルベシ。

靜女之墓 二十

名取郡秋保長袋村清水窪ニ義經ノ寵妓靜女ガ墓アリ。因テ考ルニ義經ノ妾女靜女ハ白拍子儀禪師ガ女ナリ、文治元年十一月義經ト共ニ都ヲ出テ西海ニ赴ントスル處ニ、攝津國大物濱ニテ大風ニ値テ陸ニ上リ、義經ト共ニ吉野山ニ隱ル、此所ニテ義經ニ捨ラレ吉野法師ニ捕ラル、其後京ニ上リ同二年三月儀禪師トトモニ鎌倉ニ召下サレ義經ノ事ヲ尋問ハル、逗留中○伊校本、中、舞曲ノ事アリ、靜女義經ノ子ヲ懷妊スルニ因テ鎌倉ニ留ラル、同年閏七月男子ヲ産ス、其子ヲ由比浦ニ捨ラル、同九月靜女母トトモ



ニ暇ヲ給リ京都ニ上ルト云リ、東鑑ニ詳也、靜女奥州ニ下ル事諸書ニ於テ未ダ考ヘズ、上京ノ後義經ヲ慕ヒ下リケルニヤ又同名ニテ別人ノ墓ナルニヤ。

田<sup>ツカネ</sup> 山 二十一

田東權現ハ本吉郡歌津村田東山ニアリ、一説ニ辰金トモ書ス、人皇五十四代仁明天皇承和年中ノ間ノ開基也、秀衡此山ヲ尊崇シ堂塔僧坊ヲ造立ス、天台宗七堂伽藍ヲ構ヘ七十餘房アリ、本吉四郎隆衡○伊校本、フシテ其際祀ガ采地ニシテ居城モ又近シ、今寺塔僧房悉ク廢シテ社ノミアリ。

辨慶石 附辨慶水 二十二

山城ノ國八瀬ノ里ニ一ツノ石アリ、武藏坊辨慶叡山ニ登ル時此里ヲ過ケルガ、此石ヲ携來テ此所ニ置ス、其身ノ長此石ニ等シカリシトゾ、此ヲ辨慶石ト云ト、雍州府志ニ出、俗ニ辨慶背ク將軍義政公奇物ヲ愛シテ諸方ヨリ様々ノモノ來ル事數ヲ不知、奥州平泉ヨリハ昔ノ辨慶石ト號セル長丈餘ノ怪石ヲ持テ參レリ、享德三年甲戌ノ歲ナリ、

續太平記ニ出、和漢年表錄ニ曰、後花園院ノ享德三年、奥京七條ノ西水藥師ノ内辨慶石ト云石アリ、此石カ○伊校本、馬口ニ有シガ或年ノ洪水ニ流レテ三條御寺町○伊校本、御幸町

辨慶石ノ町ト云ニ在リシ、其後又今ノ所ニ引トリシト云、京羽二重ニ出。

辨慶水 二十三

比叡山ニ辨慶水アリ、○辨慶義經ニ事ルコト二十餘年、死年三十八歳ト南浦文集ニ云リ、是松男狂言ヲ書スルト云トモ又據アルカ、識レル人尋ベシ。

眞野觀音 二十四

牡鹿郡眞野村ニ觀音アリ、舍那山長谷寺ト云、古歌ニ詠ル眞野萱(カヤ)原此所也、一説ニ秀衡泊瀬ノ觀音ヲ模セリト云、其後平三郎ト云モノ頼朝ノ命ニ依テ再興スト云。愚按ズルニ平三郎ハ疑ラクハ葛西三郎清重乎、葛西○伊校本、ハ平氏、此葛西ノ領地ニシテ其居城ナル石ノ卷日和山ニ近ケレバ也。



烏合神 二十五

栗原郡二迫庄片子村伊校本、二迫庄片子澤村ニ烏合神アリ、新山權現ト號ス秀衡ノ建立ナリ、別當ノ居所ヲ烏屋々敷ト云、一説ニ由理若自愛ノ鷹綠丸ノ社ナリト云。

愚按ズルニ由理若綠丸ノ舊蹟名取郡ニモアリ、多ハ附會ノ説ナリ、貝原捐軒翁曰世俗ニ所謂由理若大臣ト云人古書ニ不見、世俗ノ云傳ル事信ジ難シト、再按ズルニ秀衡ノ家臣ニ由利八郎アリ、羽州由利ノ領主ナルニヤ、此親族ノ事杯ヲ誤テ俗説ニ附會セシニヤ。伊校本、セルニヤ

黃雀池 附鷹羽清水 二十六

雀池栗原郡二迫庄梨崎村ニアリ、姉齒松ヲ去ル事四十間餘、南北ノ中伊校本、南ニアリ、高サ四間餘、濶二間、義經東國下向ノ時此池ノ水ヲ汲テ墨ヲ磨リ家書ヲ書リト云。  
○鷹羽清水同郡姉齒松ニアリ。姉齒松ヲ隔ツコト十九町餘道ノ傍ノ岩ノ畔ニアリ、義經此地ヲ過ル時此水ヲ飲シト云。

大報恩寺 二十七

大報恩寺ハ京北野千本ノ地ニアリ、本尊ハ釋迦也、故ニ俗ニ千本釋迦堂ト云、曾テ猫間中納言光隆卿ノ家司岸高千本ノ宅ヲ捨テ寺ト爲シ如淋上人伊校本、如淋上人ヲ請ズ、事ハ興彦龍ノ半陶藁大報恩寺幹緣疏ニ見エタリ、或ハ言フ今ノ本堂ハ藤原秀衡ガ建ル處ナリト雍州府志卷四補遺ニ出タリ、同書卷五補遺云、大報恩寺ハ相傳フ求法上人義空、承空元年假ニ小堂ヲ構エ一佛十六弟子ノ像ヲ安置ス、一説ニ貞應二年伊校本、義空ヲ建立ス嘉禎二年奉綸命大小乘三宗ヲ弘通ス、貞治二年二月等持院尊氏公下府命涅槃經ヲ行ハシム、コレヨリ常典ト爲ル、一説瑞應山大報恩寺千本釋迦堂寺領百石宗用明天皇御草創今本堂藤原秀衡ノ建立而請如珠一説如輪上人此地有猫間中納言光隆卿之家本坊名用明坊例年二月遣教アリ經會式智積院前僧正隱此地○或説ニ千本釋迦堂伊校本、千本釋迦堂念佛ハ文永伊校本、文治ノコロ如輪上人是ヲ始ラレケリ、徒然草抄ニ出○或説ニ昔秀衡上治ノ時用シ車輪相傳テ此寺ノ什物也。

愚按ズルニ半陶藁大報恩寺幹緣疏ニ寺ノ古記ヲ引テ曰、求法上人義空挿草之地也、



上人生縁ハ羽州也ト云リ、秀衡ノ事ヲ載タリ、何レノ書ニ出ルヤ識者ニ尋ヌベシ。

坂 芝 山 二十八

西行法師ノ撰集抄ニ云、過ヌル陸奥平泉、ト云ルコシバシ住侍リシ時坂芝山ト云山有、里ヲ離レテ十餘町川ノハタニ高丈餘ナル石塔ヲ立タリ、其故ヲ尋ヌルニ或人ノ申セシハ、中頃此里ニ猛將有、其女子ナリケル者法華經讀タク侍リケルカ教ベキ者ナシト朝夕ナゲキケルニ、或時天井ノ上ニ聲アツテ汝經ヲ得テ前ニ置ケ、我ニ居テ教シト云、怪ク思ナガラ經ヲ得テ前ニ置ケルニ、天井ノ上ニテ教ヘ侍リ、八日ト云ニ皆習ヘ終リヌ、其時天井ヲミルニ白ク曝レ苔生タル首ニ舌ノ生タル人ノ如クナルアリ、此白骨ノ教ヘ侍ルニコソト強ニ尋ケレバ、我ハ是延曆寺ノ昔ノ住侶慈慧大師ノ首ナリ、汝ガ志ヲ感ジテ來テ教ヘ侍リ、急ギ我ヲ坂芝山ニ送レト、泣々此山ニ納テ如是塔婆ヲ立タリ、此女ハ尼ニ成テ此山中ニ菴ヲ結ビテ侍シガ此二十餘年ニ往生シ侍ルト云、山ノ奥ニ口三間ナル屋ノ形バカリ殘レリ、此女ノ名字其姓其名流モ尋タク、年月モ考タク侍シカドモ詳ニ知レル人ナクテシルスニ及バズ、此處ハ無下ニ情ナキ里ニテ廿餘

回ノ前ノ不思議ヲモタシカニ知ラザリケル。

愚按ズルニ西行ハ秀衡ト同ク秀郷ノ末葉ニシテ、秀衡ノ時ニ平泉ニ下向セシ事東鑑ニ見エタリ、是平泉全盛ノ時也キ、山家集ニハ西行衣川ヲ見テ詠セシ歌ト、田和枝根山ノ櫻ヲ詠ル歌ヲノセタリ、是ヲ平泉ニ遊行セシ證トスベシ、又平泉ニ佛道ノ盛ニ行レシ事ハ慈覺大師ノ開闢ヨリ清衡、基衡、秀衡ノ時マデ數百年ノ間ナリ、豈撰集抄ニ言ル如クナランヤ、撰集抄ノ古板ノ本ニハ、柳ノ里ト云リノ本ニハ跋アリ左ニ載ス。

撰集抄者西行上人所作也、或、不謂也、伊校本、蓋人物時代和歌作者齟齬者夥矣、豈彼上人之作哉、雖然難波、春夢、江口、秋雨、殆非他人之詞矣、余嘗見此書之序曰、卷擬九品、淨土事、比八十、隨好、就、而考之、凡屬事蹟者、一百十餘段、想是其三十餘事、則後人之所添、而上人之所記歟、伊校本、而非、讀上人之所記歟、讀者不取其疑、只翫其餘焉耳、慶安辛卯歲八月中、泮乘門無名子題。

愚按ズルニ此跋ニ言ル如ク坂芝山等擬作ニ係レル事無疑、今平泉ニ於テ坂芝山高石ト云所ハ圓隆寺南大門跡ヨリ南三町餘モ隔ヌラン、丘アル處ヲ云古塚モ石塔モ



アリ、然レドモ好事ノ者後世撰集抄ノ妄説ニ依テ僞リ爲ス者ナラン、今稱スル坂芝山昔ノ國衡ガ館ノ跡ニ近ク人里ニシテ彼書ニ云ルニモ○伊校本、不合、又捌ノ里、柳ノ里ト云處今無之、彼ト云是ト云信用シガタシ。

賴朝請追伐秀衡二十九

平家物語卷八云、征夷將軍院宣ノ御使ハ左史生中原泰定ナリ、賴朝其日布衣ニ烏帽子也、顔大ニシテ勢短カリケリ、容貌優美ニシテ言語分明也ト云々、又奧ノ秀衡ガ陸奥守ニナリ、佐竹冠者カ常陸守ニ成テ是モ賴朝ガ下知ニ不隨、彼等ヲモ急ニ可追討由之院宣給ルベキ由ヲ申サルル云々。

鏡石三十

鏡石ハ洛北鷹ヶ嶺ノ下ニアリ、其石横ニ出ル事二丈許高一丈程ナリ、其石面平カニシテ如砥ノ光リ鏡ノ如シ、因テ鏡石ト號ス、俗ニ云源義經○伊校本、昔源義經此石ニ臨テ戎衣ヲ整フト府志又南部小國ノ中ニ鏡石アリ。

愚按ズルニ京一條通堀川西へ入二町メニ古此處ニ鏡石トテ名石有シテ、大閣秀吉公禁裡エ奉ラセ給フ、此町今ニ鏡石町ト云、中華ニモ鏡石アリ、酉陽雜俎卷之十曰、鏡石濟南郡有方山、相傳有奘生得仙於此、山南有明鏡崖石、方三丈魑魅行伏了々然在鏡中、南燕時鏡上遂使漆焉、俗云山神惡其照物、故漆之。

華開院三十一

華開院ハ始ハ京都京極ノ北ニアリ、近世西京ニ移ス、モト天台宗ニシテ四辻宮善成勤修ノ地ナリ、曾テ伊勢三郎義盛着スル處ノ甲冑アリ、今ハ蝶ノ紋ノ幕存スルノミ、雍州府志ニ出タリ○伊校本、出愚按ズルニ軍器考ニ白石先生曰、但シ其紋蝶ナリトイヘバ義盛ノ物ニハアラデ伊勢平氏ノ物ナルヲ誤テツタヘタランモ知ベカラズト云リ。

生啞磨黑三十二

盛衰記曰賴朝秘藏ノ馬折節三匹アリ、生啞磨墨若白毛トゾ申ケル、陸奥國三戸立ノ



馬、秀衡カ子元能冠者カ進セタル太逞ガ尾髮アクマデ足タリ、此馬鼻強クシテ人ヲ釣ケレバ異名ニハ町君ト付ラレタリ、生唆トハ黒栗毛ノ馬高八寸太ク逞尾ノ前チト白カリケリ、當時五歳猶出ベキ馬ナリ、是モ陸奥國七戸立ノ馬鹿笛ヲ金燒ニアテタレバ少モ紛ルベクモナク馬ヲモ食ケレバ生唆トハ名付タリ。

愚按ズルニ元能冠者ハ本吉四郎隆衡ガ事ナルベシ○玉造郡上宮村池月沼アリ、小黒崎ノ山下ナリ、又小黒崎伊校本、トモ云、俗説ニ佐々木カ乗タル馬ノ池月ノ出タル處ナリト云ト名蹟志ニ載タリ、蓋シ妄説ナリ、本州米澤ト大澤ノ間川邊ニスルスミノ馬石ト云アリ、此外處々ニ生唆ノ出タル處ト云、磨墨ノ出タル處ナド云ル地多シ、東海道ノ中庄野ヨリ石薬師ヘノ間少シ北ニ山邊ト云處アリ、頼朝ノ生唆ハ此地ヨリ出タリ、ソノ比此里ノ長野登ノ觀音ヲ信ジケルニ靈夢アリテ馬ヲ買求メシガ、ソノ馬名馬ノ聞アリケレバ鎌倉ヘ牽下リテ頼朝ヘササゲケル、頼朝御感アリテ彼長チ右馬左衛門ニ任ゼラレシト、今其子孫代々右馬左衛門ト云也、或書ニ云リ、何レカ是ナル事ヲ不知。

義經之乘馬 三十三

盛衰記卷之三十六ニ曰、義經鴨越ニテ前ニ進テノ玉ヒケルハ、義經ガ乗タル大鹿毛ハ陸奥國ニテ名ヲ得タル氣高逸物也、敵ニアハン時ハ必此馬ニ乗ベシトテ平泉ヲ立シ時秀衡ガ我ニ得サセタリキ、鎌倉殿ノ玉ヒケル薄墨ニモ底ハマサリテコソアルラシ、サレバ宇治川ヲ渡シ時モ此二匹ノ馬共ハ鞍取ヨリ上チ不濡逸物也、同書卷之四十二ニ曰、義經薄墨ト云馬ニ金覆輪ノ鞍置テ僧ヲ請シ、此馬鞍ヲ以御房菴室ニテ卒都婆經書キ、佐藤三郎兵衛尉信、鎌田藤次光政ト回合シテ後世弔ヒ給ヘトテ舍人ニ引セテ僧ノ菴室ニ被送ケリ、此馬ト云ハ貞任カチキ黒ノ末トテ黒キ馬ノ少チイサカリケルガ早走ノ逸物也、多ノ馬ノ中ニ秀衡殊ニ秘藏ナリケレ共、軍ニハ能馬コソ武士ノ寶ナレバ山ヲモ川ヲモ是ニ乗テ敵ヲ攻玉ヘトテ判官奥州ヲ立ケル時進セタル馬ナリ、宇治川ヲモ渡シ一ノ谷ヲモ落セシコト此馬ナリ、一度モ不覺ナカリケレバ吉例ト申ケルヲ判官五位尉ニ成ケルニ此馬ニ乗タリケレバ、私ニハ太夫ト呼也。



義經甲冑 三十四

鞍馬寺源義經朝臣ノ甲冑南京興福寺源義經朝臣甲冑半形同鑑註文以上白石源君美ノ説並圖式軍器考ニ詳ニ出タリ。

義經墳墓 三十五

義經自殺于高館伊校本高館後沼倉小治郎伊校本小次郎高次者葬之于此地以立其墳墓此地高次古館址在上頭高山稱之辨慶峰往昔武藏坊經歷逍遙之地也。右出于封内名蹟志。愚按ズルニ此地ト云ルハ栗原郡三迫庄沼倉村ヲサス、義經高館ニテ自殺ノ後沼倉小次郎高次ト云モノ此地ニ葬テ墓ヲ築キタリ、此所ニ高次ガ館伊校本館址山上ニアリ辨慶峰ト云アリ、昔辨慶逍遙セシ地ナリト云、高次伊校本高次ハ義經ニ親シカリシ者ナルニヤ。

膽澤郡衣川村ハ平泉ノ隣村也、其地ニ妙好山雲際寺アリ、五十四代 仁明天皇ノ嘉祥年中釋巨岳開基也、昔ハ牛扁山ト號セシヲ後是ヲ改ム、寺中義經ノ位牌アリ、通山源

公大居士トアリ、其故ヲ不知、此寺昔ハ天台宗ナリシ今曹洞宗ト成レリ。

長部村石佛 三十六

磐井郡東山長部村ニ古キ石佛アリ、聖德太子トモ云傳教大師トモ云、俗タイシボトケト云其實ヲ不知、昔堂ノ有ケルガ度々焼亡シテ俗堂立ザル佛ナリ、迎其後堂ヲ不營イナフ俗ニ小兒ノ諸病瘡瘡ニ願ヲ掛レハ治スルトテ參詣ス、別當ハ山伏也。



平泉雜記卷之二

鑿王山毛越寺號付金剛王院

一 ○伊校本  
此項ナシ

平泉醫王山毛越寺號ハ人皇五十四代 仁明天皇御宇嘉祥三年慈覺大師草創、往昔深  
山幽谷ノ地ニシテ東ニ大河ノ流アリ、西ニ高山峨々ト聳テ松風ノ音琴ヲ調ガ如シ、大  
師東遊ノ日偶示トシテ則此地ニ至ル、雲霞皎然トシテ山ニ滿チ、行路空濛トシテ難行時刻ウ  
ツシテ晴ルニ及ビ前程ヲ看レバ、白鹿ノ毛綿々小徑ノ如ク有、大師怪ミ數歩ニシテ止  
ル處ヲ見玉フニ陰森左下ニ白鹿蹲踞シテ睡レリ、大師進歩シ玉フニ忽焉トシテ不見  
亦傍ヲ見玉フニ、老翁出現シテ不測ノ吉瑞ヲ告テ飛去ル、大師歡喜涕泣シ乃茲地ニ金  
堂ヲ建立シ玉ヒ、年號ヲ以嘉祥寺ト號、ナツ今ノ嘉祥寺蹟ニハアラヌ、元圓隆寺ノ本尊藥師  
處ニシテ後世基衡今ノ處ニ移スト云  
如來ヲ安置シ、大師手自醫王善逝ヲ彫刻シ金堂ニ安置シ玉フガ故ニ醫王山ト號ス、白  
鹿ノ毛ヲ尋ネテ越玉フ故ニ毛越寺ト號ク、金剛王院ノ號ハ胎金兩部界弘通繁榮守護



ノ爲ニ右號セリ、一山ノ名號タリ、是分明疑フベカラズ。

三大師之畫像ニ

智者大師章安大師三大師ノ畫像一軸地ハ竹ナリ此一軸慈覺大師中華ヨリ將來也、兩大師畫像ノ上ニ贊有リ左ニ寫ス。

章安大師贊

智者猶子 心密利根 宛稱佛號 幻入法門 槌鐘却賊 燒香反魂 石裂應手

砂浦隨言 天華雪落 神兵雲長 生彼兜率 奉觀慈尊

妙樂大師贊

荆溪拔群 添斯其文 裁義制記 揚英播芬 數聲霄鶴 五色顯雲 儼然端坐

終半夜分

右之裡書

此唐筆之天臺智者大師影像者、與州岩井郡平泉關山中尊寺弘臺壽院累代尊崇之什物也、  
當寺伊校本自往古雖爲台宗弘通之地未相定本寺之處、今般被屬東叡山貫主輪王寺

宮一品法親王尊敬之御門下訖、當所領主從五位下伊達兵部太輔藤原朝臣宗勝聞之、觀說之餘爲台門繁興令此像加修覆焉、於戲可謂信心至矣盡矣、野衲等亦感心之甚、厚故加紫毫於畫像背、當寺之靈寶豈如之哉、冀此尊像至盡未來際欲莫紛失而已

圓覺院大僧都法印

謹泰判

寬文丙午稔三月吉祥日

住心院大僧都法印

實俊判

二百五字

○每年十一月大師會ニ是ヲ開帳シ勤行作法有、此一軸經藏堂内ニ納置モノ也。

中尊寺什寶三

一慈覺大師如意唐金同柄香爐

一兩界曼荼羅智證大師筆一觀音牧溪ノ畫

一十三佛金剛筆一玉軸法華道風筆清衡讀誦ノ經 一藕糸袈裟 一蛇齒 一水火玉伊



校本、經堂ニアリ

一三代之太刀金色堂ニアリ 一辨慶ノ獨鈷

一同六字鐔此三色經藏ニアリ 一古文書數十通

毛越寺什寶モ舉タレド未合拜見故ニ此書ニ舉ス伊校本、毛越等云云ノ語句ナシ

### 御勅願一切經 四

中尊寺經藏堂紺紙金銀泥行交一切經 堀河鳥羽兩帝ノ御勅願トシテ、鎮守府將軍藤原清衡奥羽六郡領知之最初堂社寺院ヲ建立シ此經ヲ奉納ス、是則伊校本、是即此山第一ノ寶物ニシテ、今寶曆十年ニ至テ六百五十餘年ノ星霜ヲ歷テ相傳ル處也、當時清衡ノ私領骨寺其外數箇所ノ莊園ヲ寄附セラル、其寄文於今ニ相傳ス、其以來今ニ至ルマデ世々ノ國主地頭相續テ莊園ヲ寄附セリ、其寄文數通ヲモ亦是ヲ相傳ス○清衡ノ寄文ヲ以考レバ、此一切經ハ自在房蓮光奉行トシテ八ヶ年ヨリ内ニ書寫セリ、其賞トシテ經藏別當職ヲ賜リ、且私領骨寺其外ノ地ヲモ經藏ニ寄附スルノ間、永代相傳テ伊校本、相傳シテ他人ノ妨アルベカラズト云○大閣秀吉公此御經ヲ拜覽アルベシトテ多ク京都ニ登

セラレ其後還シ玉ハズト云リ、其經ハ攝州天王寺ニ納玉フト云ドモ其事モ定カナラズ、又畿内其外諸國ニ散在セルモ有ト云リ。

### 堂塔燒亡年曆 五

一毛越寺ハ八十五代 後堀河天皇嘉祿二丙戌年十一月八日ニ回祿スト東鑑脫漏ニ出タリ、基衡建立ヨリ八十餘年後ナルベシ。  
一觀自在王院ハ百七代 正親町帝天正元年癸酉二月八日ニ燒亡スト云傳リ、此院ハ宗任ガ女基衡ノ妻ノ建立也、此人七十六代 近衛帝仁平壬申年伊校本、仁平二年壬申ニ卒ス、此年ヨリ天正元年マテ四百二十二歲也、然レバ建立ヨリハ四百三十四年ヲ歷テ後ニ燒亡スルナルベシ。

一アルミ書ニ無量光院ハ泰衡滅亡ノ時放火スト云リ。  
愚按ズルニ東鑑ニ平泉館炎上ノ後、賴朝無量光院ノ歷覽ノ事アリ、一書之說誤ナリ、此院ノ頽廢ハ其後ノ年曆ニカ、ルベシ。

一中尊寺ハ九十七代 光明帝建武四年丁丑ノ歲堂塔寺院炎上スト同寺鐘ノ銘ノ序



ニ見エタリ、清衡建立ノ長治二年乙酉ヨリ二百三十三年後ナリ、又東鑑ノ説ニ從テ六郡領知ノ最初建立スル時ハ二百五十餘年ナルベシ。

一達谷窟ハ百四代 後土御門帝延徳二庚戌歳ニ野火ノ餘焰ニテ堂塔多ク燒亡スト云傳フ。

鞭楯城 六

宮城郡國分庄躑躅岡ハ、古ヘ鞭楯ヲ構ル所也、頼朝公奥入ノ時泰衡ガ出張セシコト東鑑ニ出タリ、又榴岡トモ書セリ伊校本今ノ仙臺城東釋迦堂天滿宮ノ地ナリ○觀迹聞老志ニ云、宮城郡南目村有高岡謂山榴岡東鑑稱國分鞭楯古壘蓋此地也、郷人不詳舊址。

風土記曰、躑躅岡在府之西府乃多賀國府出紅躑躅宮以之摺之號都々茲摺、とりつなけ玉田横野の離れ駒つゝじか岡にあせみ花さく

大串次郎 七

畠山ノ重忠ガ門客大串次郎ハ國衡ヲ梟首スト東鑑ニ出タリ、然ルニ其名ヲ不載、平家物語ニ重親ト云重忠ガ爲ニ烏帽子子也ト云リ、長門本平家物語ニハ大串次郎安利トアリ。

義經辨舍主之子 八

義經行關東辨慶從之、路次店舍舍主老夫婦也、其子九人辨慶曰多哉、主曰爺子六人媼子六人合九人慶不解告義經、義經曰然也、有之父伊校本未娶媼前有子三媼未嫁爺前有子共六人已娶已後生子三人又合九人也、父母有異同故也慶聞而頷羅山文集可成談云辨慶ハ滑稽ノ男ナリ、武藏坊ト付タルハ弁ノ字、假片名ニテヨメルナルベシ。

田村利仁伐東夷 九

日本後記桓武帝延曆二十年辛己二月丙午ニ征夷大將軍坂上田村麿ニ節刀ヲ賜ル、十一月乙丑ニ詔シテ曰、陸奥州ノ蝦夷等代ヲ涉テ邊境浸シ亂リ百姓ヲ殺略ス是以從四位上坂上田村麿大宿禰等ヲ遣シテ伐平ケ拂ヒ治シム、同二十一年壬午正月甲子陸奥



國三神加階、征夷將軍 田村靈驗ヲ奏スルニヨル、同丙寅田村磨ヲ遣シテ陸奥國膽澤城ヲ作ル、同夏四月庚子田村磨等言、夷ノ大墓公阿弓利爲盤具公母禮種類五百餘ヲ率テ降ル、同秋七月甲子田村磨來ル、夷ノ大墓二人並從乙八月丁酉夷大墓公阿弓利爲盤具公母禮等ヲ斬ル、此ニ虜ハ奥地ノ賊首也ト有リ

東鑑ニ田谷窟ハ田村利仁等ノ將軍綸命ヲ奉リ東夷征夷ノ時賊首惡路王並ニ赤頭等塞ヲ構ル○伊校本、岩室也ト云リ

愚按ズルニ田谷、今達谷ト書ス、陸奥岩井郡達谷村ニ在リ平泉ノ西ナリ。

義經記ニ坂上田村磨ハアクシノ高丸ヲ伐、藤原利仁ハ赤頭四郎將軍ヲ討ト云リ、王代一覽ニ云、延曆廿年ノ春陸奥ノ夷賊高丸ト云者達谷窟ヨリ起リ、駿河國清見關迄攻上ル、征夷大將軍坂上田村磨節刀ヲ賜リ進發ス、高丸退テ奥州ニ引籠ル、田村丸ツゞヒテ奥州ニ攻入合戰シ神樂岡ト云所ニテ高丸ヲ射殺ス、又惡路王ト云賊ヲモ平グ、同廿一年田村丸歸京ス、夷ノ張本大墓公盤具公○伊校本、宮城本ニ盤具公三字ナシト云者降參シケルヲ召連テ來ル此二人モ斬首セラル。

元享釋書延鎮傳ニハ、奥州ノ逆賊高丸駿州清見關ニ次ル、田村將軍ノ軍兵ヲ發スルヲ

聞テ奥州ニ立歸ル、官軍追ツキ戰テ神樂岡ニテ高丸ヲ射殺ス、其首ヲ帝城ニサ、ゲラル、ト云リ。

或說ニ赤頭ハ伊達郡ニテ討ル、屍ヲ同郡半田村ニ埋ム其塚今ニ有ト云。

百將傳曰、藤原利仁延喜ノ時率兵討奥賊、風雲之夜乘敵無備討平之。

百將傳抄云、藤原利仁ハ左大臣魚名公ノ後胤也、延喜帝ニツカエテ鎮守府將軍ニ任セラレ、東國北國ヲ守護ス、高丸ト云ル惡黨奥州達谷窟ニ楯籠ル、利仁是ヲ討テ其窟ヲ攻破ルト云々。

七武曰、田丸鎮東夷之虐、利仁屠高丸之窟。

名將傳曰、藤原利仁者、勇力絶衆、輕捷如飛、醍醐朝當關東盜賊起、奉勅往捕之、會天大雪、利仁夜潛兵襲其落賊、果無備、大克斬首萬級、威名大震、迨奥州夷賊起、又令利仁拜鎮守府將軍、征討之、軍所至、海克功名速成、而還、朝廷賞之、剖府於越前世々無絶、由是其胤竟盛于北越。

愚按ニ惡路王赤頭ノ名ハ東鑑ニ出、田村高丸ヲ討ト云ハ元享釋書ニ出テ羅山翁神社考上ニ同シ。



坂上田村麿ハ高丸ヲ討、藤原利仁ハ赤頭四郎ヲ討ト云ハ義經記ニ出、百將傳抄ニハ利仁高丸ヲ誅スト云。

再按ズルニ征夷大將軍從四位上坂上田村麿夷賊征伐ハ人皇五十代桓武帝延曆廿年ナリ、鎮守府將軍藤原利仁ハ人皇六十代醍醐帝延喜年中夷賊ヲ誅伐ス、延曆廿年ヨリ延喜年中マテ百餘年也、然ルニ田村モ高丸ヲ討又利仁モ高丸ヲ討ト云、其外諸書ノ說紛々トシテ不能無疑、請後人考正說而當歸一也。

置出羽國 十

舊事記云、諾羅朝御宇和銅五年割陸奥越後二國始置此國也、續日本紀云、和銅五年乙丑始置出羽國、冬十月丁酉朔割陸奥國最上置賜二郡隸出羽國焉。

愚按ニ諾羅朝ハ四十三代元明帝也、隸ハ說文ニ附著也ト。

秀衡贈馬干木曾 十一

平家物語ニ云、壽永二年五月十二日奥ノ秀衡ガ許ヨリ木曾殿ニ龍馬蹄二匹奉ル、一匹

ハ白月毛一匹ハ連錢葦毛ナリ、聽テ此馬ニ鏡鞍置テ白山ノ社ニ神馬ニ立ラル。

佐藤庄司舊跡 十二

東鑑ニ佐藤庄司、信夫ノ庄司トモ云ト有、湯庄司トモ居館ノ跡、信夫郡丸山ニアリ、其地於今溫泉アリ、此故ニカク呼ベルニヤ、然ルニ東鑑ニ不載其名、近世ノ義經勳功記ニ基治ト云、鎌倉實記ニハ元治ニ作ル、或說ニ家信ト云、又光信トモ云リ、丸山ニ瑠璃光山醫王寺アリ、石碑アリ、興性院、鐵山、勝信、光信院、玉華昌連、昌連トアリ、是庄司夫婦ノ石塔也ト云、又吉祥院ハ過次信清、光院、劍勝、忠信トアリ、是繼信忠信ノ例ヲ以テ看ル時ハ勝信ハ庄司カ名ナルニヤ、未得歸一之說、仙臺封内ニ庄司ガ舊跡多シ左ニ擧グ。

玉造郡上宮村ニ庄司ガ假館ノ跡ト云有、伊具郡岡村ニ繼信忠信カ墓有、伊校本、伊具郡云云、吉祥寺ト栗原郡一ノ迫庄嶋體村島體村ニ繼信ガ居館ノ社アリ、館下ニ寺有、號スノ次ニアリ、栗原郡一ノ迫庄嶋體村伊校本、伊具郡云云、吉祥寺ト栗原郡一ノ迫庄嶋體村島體村ニ繼信ガ居館ノ社アリ、館下ニ寺有、號スノ次ニアリ、長水山吉祥寺ト號ス、本吉郡津谷村ニ安養山淨勝寺ハ庄司ガ妻ノ建立也ト云、津谷馬籠兩村ハ庄司ガ妻ノ湯浴ノ地也ト云リ、寺ニ繼信忠信ノ古墳アリ、又庄司夫婦並ニ兄弟ノ牌子アリ、信夫丸山ノ銘ニ同ジ、年號月日ニ差誤アリ。



御嶽山藏王權現、津谷山田ノ村境也、庄司カ老妻吉野勝手ノ神ヲ勸請セシ處也。

同郡小泉村寶壽山淨福寺ハ庄司夫婦ノ創立トモ云尼公ノ古墳アリ。

同郡鹿折村ニ信夫館アリ、庄司カ假館ト云、名取郡植松村金剛遊山弘誓寺什物ノ中繼信ガ眞筆ノ紺紙金泥ノ彌陀經有。

二基ノ塔 雍州府志ニ云、滑谷ニ十三重ノ華藏塔二基アリ、土人ツタエテ佐藤忠信夫婦ノ塔也ト、然レドモ其實ヲ不知今考之、石塔臺座ノ表ニ永仁三年二月廿日施主法西ノ字アリ、案ズルニ永仁ノ年號ハ伏見院ノ時也、法西人ノ爲ニシテ建之カ、又自爲ニシテ立之カ不知之、法西亦何人ナルコトヲ詳ニセズ、或謂フ山伏也ト、一説ニ鳥部野ニ岩淵ノ勤操ヲ葬リシヨリ以來、良賊ノ葬場ト成ル、此處鳥部野ヲ去ルコト不遠、然レバ此一基ハ勤操ノ塔ニシテ、一基ハ納經塔乎ト云リ。

京大佛北東ニ石塔町ト云アリ、五重塔二基アリ、高一丈モアランカ、上ハ崩レテ傾ケリ、爲繼信菩提爲忠信菩提トアリ、施主ノ名ナシト河田茂頼ノ話也。

愚按ズルニ繼信矢嶋ニテ死シ乃チ其地ニ葬シ事東鑑卷之四ニ出、忠信ハ京ニテ誅セラレシ事同書卷之六ニ見エタリ、東奥所々ニ在ル處ノ墳墓ハ其親族家臣タル者

築之而爲祭祀ニヤ○河田茂頼曰、古昔武家ニ院號勅許ハ源滿仲公勳功ニ依テ多田院ノ號アリ、其後ハ尊氏公ニ等持院ノ許アリ、佐藤庄司ノ時代ニハ武家ノ院號ナシ、友直接ズルニ天子ノ院號ハ嵯峨院ニ始リ、后ノ院號ハ一條院ノ御時梅壺ノ皇太后ヨリ始リ、攝家ノ院號ハ同御宇藤原兼家ヨリ始リ、門院ノ號ハ三條院ノ御女陽明門院ヲ始トスト和事始ニ見エタリ、詳ナルコトハ本書ニ於テ可考。

腰懸松・硯石 十三

伊達郡國見山ノ下ニ義經ノ腰懸松アリ、樹ノ圍九尺程高一丈ホド枝條四方ニ垂レテ地上ニ蔓ル事十二三間ホド也、奇異ノ古木ナリ、辨慶硯石右ノ松ヨリ四五町ヲ隔テ南ニ當リ畠ノ傍ニ在リ、四方七八尺餘ノ石面ニ貳尺餘ニ一尺四五寸程ノ拗ミ有テ四時水ヲ貯テ旱魃ノトキト雖トモ涸ル、事ナシ。

辨慶腰懸石 腰越滿福寺硯池ノ端ニアリ。

義經ノ腰懸松 平泉中尊寺辨才天堂池ノ東北ニ老松アリ、是ヲ義經腰懸松ト云。

愚按ズルニヒガ事ナルベシ  
○伊校本、愚按ス  
ル云々ナシ



辨慶腰懸松 相州鎌倉極樂寺門ヲ入北方ニアリ、義經腰越ヨリ追歸サレシ時辨慶此松ニ腰ヲ掛鎌倉ノ方ヲ白眼タリト云傳フ、鎌倉志ニ出、鞍馬山僧正谷ニ牛若丸脊クラベ石トテアリ。  
御太刀松 四條通猪熊ノ西竹屋町○伊校本、西行屋町人家ノ裏ニアリ、古へ九郎判官此松ニ太刀ヲ掛置シ故名ツケシトゾ、一説ニハ堀河ノ御所此近隣境内ナレバ御館ノ前ト云事ヲ云誤レリトゾ。

越 王 堂 十四

越王堂刈田郡齊川村ニアリ二女ノ木像アリ、烏帽子ヲイタ、キ鍔ヲ着シ右ニ弓箭ヲ執リ左ニ刀ヲ提ゲタリ、田村磨鈴鹿神女ナリト云リ、又一説ニ佐藤庄司繼信・同忠信ガ妻ノ像ナリト云○一説古四王堂ト書リ、鍔、毀坂ノ下ニアリ堂ニ木像二體アリイヅレモ烏帽子ニ鍔ヲ着テ壇上ニ腰ヲ掛、一體ハ弓矢ヲ持繼信忠信カ妻ト云、一説ニ賀茂次郎・新羅三郎ノ影像也、東夷此人ヲ畏ル、故ニ此像ヲ立テ夷狄ヲ鎮伏セシムト、又驛夫ノ物語ニ此堂昔越河堂ト云ケルヲ何ノ頃ヨリカ古四王堂ト云ナラハスト古老ノ説

アリト云々

國 分 寺 十五

金光明四天王護國分寺○伊校本、護國山國分寺宮城郡國分ノ庄ニアリ、聖武帝天平年中諸國ニ詔シテ建立スル處也、其後秀衡寺院僧坊ヲ建テ壯麗ヲ極ム、長堂廻廊ヲ設テ尼寺ニ及フ其門遙ニ隔タレリ、後ニ傾倒荒廢シ又兵燹ノ災ニ逢フ今ニ於テ古瓦遺礎猶アリ、好事ノ者其瓦ヲ拾ヒ硯ニ作リテ文房ノ雅玩トス、藥師堂有、鎮守白山權現宮アリ、慶長年中黃門政宗卿ノ再興也、其外堂社多シ院主學頭別當ノ三ヶ寺廿四房アリ。

義 經 欸 狀 十六

義經平家追討ノ後賴朝ノ勸氣ヲ蒙リシ後平宗盛ヲ具シテ鎌倉ニ降リケルニ鎌倉中ニ入ル事ヲ免サレズ、酒匂・腰越ノ邊ニ逗留ス、愁鬱ノアマリ欸狀ヲ辨慶ニ書シメテ大江廣元ニ付シテ此旨ヲ賴朝公ニ達セシム、今越々村○伊校本、今腰越村眞言宗龍護山滿福寺ハ義經ノ宿セラレシ所也ト云、此寺開山行基也本尊藥師行基ノ作、不動ハ弘法ノ作ナ



リ、硯水ニ汲用タル水トテ小池アリ、其時ノ下書ナリ、迎辨慶ガ自筆ノ狀アリ、此狀東鑑、義經記等ニモ有、今世間ニ流布スル腰越狀ト云ル是ナリ、狀中ノ文字東鑑ニ載タルトハ所々異ナリ、或人云新筆也、辨慶ガ筆ニハ非ズト此趣鎌倉志ニ載ス。

愚按ニ遊佐好生翁義經論ヲ著シ其卷尾ニ書シテ曰、予嘗著此論、而後讀遠遊紀腰越、下曰會謂以梶原之讒、傷兄弟之恩矣、然廷尉誇勇功、無畏敬、讒之來自速之耳、至其遂不得入鎌倉、歸洛、要院宣、則天罰之所必不容也、其詩曰從歸咎、讒人更不識、求身申狀、今空在硯池浮、綠蘋、又閱大平記評判、已言仇讐平氏之非理也、然則此篇不作而可、今爲尤贅焉、因著之、干論尾云、此編トハ自著スル處ノ義經論ヲ指ス

論 賴 朝 卿 十七

林春齊七武論、賴朝其略曰、賴朝口有密腹、有劍而忍人也、義經勇敢、有蓋世之功、何爲綱之欺、泰衡以殺義經、既而滅泰衡、何爲食言哉。

武 藏 寺 十八

武藏寺ハ山城愛宕郡田中村ノ東ニ在リ、此寺始メ今出川今ノ藤谷ノ宅地ニアリ、永祿年中此所ニ移スモト天臺宗也、相傳フ武藏坊辨慶時々來リ遊ブ依之武藏寺ト號ス、今日蓮宗ノ僧守之ト雍州府志ニ出タリ、中尊寺北本證江カ曰武藏寺在糺東一乘寺道左、宗旨法華宗當寺ノ號ニ付テ異説アリ、ムカシ武藏坊辨慶此所ニ住スト、按ズルニ此所糺山ニ到ル道ニシテ武藏ノ二字アリイカサマ故アラント推作ノ説非也、此寺初相國寺ノ邊ニ在テ國泰寺ト號ス、然ルヲ秀吉公ノ御時今ノ地ニ遷サル、公他界ノ後法名ヲ號國泰院殿故ニ此號ヲ改テ武ノ號ニナス、其故ハ江州淺井ノ家臣ニ武藏○伊校本、武藤内藏之尉國泰ト云者アリ、此士他ノ讒言ニ依テ生害ニアヒヌ、其妻尼ト成テ號妙感、遂ニ父ガ宅ヲ點シテ寺トナシ爲亡父追福、則夫ノ實名ヲ取テ國泰寺ト號ス、又法名ヲ號國泰寺、光惠直本其後寺號ヲ改ムルニ及テ又亡夫ノ名字ヲ取テ武藤ノ武ト内藏ノ藏ノ字ヲ連ネテ爲武藏寺也、法性寺ノ末寺也、私ニ曰此説非ナルヘシ、雍州府志ノ説ニ從フベキカ

辨慶屋敷 在萬無寺西一町許田中、  
辨慶石 在天神宮ノ鳥井ノ傍、傳云辨慶戲ニ糺山ヨリ提來ルト、右山州名跡志ニ出



辨慶芝十九

辨慶芝ハ二條河原ノ東南ニアリ、相傳フ武藏坊辨慶義經ニ從ヒ京ニアル日寓居ヲ此所ニ構ヘ土佐房昌俊義經ヲ堀河館ニ襲フトキモ又此處ニ宿ス、則馬ヲ馳テ行ク終ニ昌俊ヲ捕フ、此地今ニ於テ耕種セズト雍州府志出ツ。

根無藤二十

根無藤ハ刈田郡圓田村ニアリ、村老ノ説ニ源賴義貞任征伐ノ時此地ニ於テ藤ノ鞭ヲ銀杏樹ノ下ニ刺玉ヒケルニ、終ニ根ヲ生ジテ茂リ其木ニ卷付ケル故ニ根無藤ト云ルトゾ、賴朝東征ノ時金十郎等カ合戰ノ地也、事ハ東鑑ニ見エタリ、其地今民家ト成ル家ノ後ニ藥師堂アリ堂ノ前ニ銀杏ノ古木アリ、鞭ヲ立シ木也藤ハ今枯テナシ。

野口判官二十一

俗説辨ニ云判官義經衣川ノ城ニテ泰衡ト戰シ二郎從皆討レシカバ妻子ヲ害シ腹ヲ

切ントセラレシ處ニ鞍馬ノ大天狗與ヲ雲中ニカ、セ來リ義經ヲイザナイ行キ播磨ノ國野口ノ里ニ住シム、僧ト成テ教信ト號シ妻子郎從ノ菩提弔ハレシガ、道路ニ於テ俄ニ病ニカ、リテ卒セラルト云、是ヲ俗謠ニ作りテ野口判官ト云、今按ズルニ義經僧トナルコト偽ナリ、義經血氣ノ將ナルト雖トモ妻子僕從ヲ失ヒナガラ一旦命ヲ惜テ僧トナルニ至ンヤ、又天狗義經ヲ誘テ去事尤偽也、然レドモ暫ク俗談ニ依テ評セバ、彼ノ天狗義經ノ方人タルベクハ是ヨリサキ梶原泰衡等ノ仇ヲ罰シ義經罪無キ事ヲ賴朝ニ告サトシ運ヲ開キ家ヲ起スノ方便ヲモナスベキニ其心ナキノミニ非ズ、自殺ノ期ニノゾンデナマジイニイザナヒ出シ名ヲ汚シ恥ヲノコサセ城中ニ死セシメズシテ道路ニ死セシム、天狗ガ神道イブカシカラズヤ。

龜井清水二十二

龜井清水刈田郡越河村石ノ大佛ヨリ五町ホド北ノ海道ノ西ニアリ、義經下向ノ時龜井六郎重清此水ヲ飲ケル故ニ名ツケルト云。



鈴木重染 二十三

江刺郡片岡村醫王山重染寺ト云ル寺アリ、昔鈴木三郎重家が子重染ト云者紀州ヨリ父ノアトヲ尋ネテ奥州ニ下リ後ニ僧トナリテ小庵ヲ結ビ隠レ居レルソノ舊跡ナリ。

鳥海柵 二十四

鳥海三郎宗任ガ城址岩井郡東山ノ郷鳥海村ニアリ、本丸南北廿二間ホド東西廿間ホト二ノ丸南北三十間東西二十五間也、前太平記ニ衣川柵ノ合戦ニ討負鳥海柵ニ隠ルト云ハ此城ノ事ト見エタリ、衣川ヨリ東ニ當リ奥道四五十里ヲ隔ツ、此所ヨリ厨川柵マデ北方二日餘ノ行程也、又出羽國ニ鳥海アリト雖トモ衣川ヨリハ五六日餘ノ行程也、貞任衣川ヲ立退キ鳥海ニ隠レソレヨリ厨川ニ引退クト云時ハ羽州ノ鳥海ニアラザルコト分明ナリ。

愚按ニ前太平記奥征伐ノ條ニ地理方角ノ不審ノ事多シ、其書ヲ看ル人考テ可知也、又或人鳥海ノ城地ノ不廣ヲ以テ此地ニハアラザルベシト云、予答之曰貝原翁ノ諸

州巡覽ニ古代ノ城地ノ不廣コトアルヲ云リ此城其類ナルニヤ。

奥州惣奉行 二十五

頼朝卿東征平均ノ後文治五年正月○伊校本十月廿四日葛西三郎清重ニ御下文ヲ給ハル、平泉郡内ニ於テ諸人ノ濫行ヲ停止シ罪科ヲ糺斷スベシト云々按ニ平泉ハ郡ニ非ズ疑々クハ郷ノ字ノ誤ナルベシ、文治六年三月十五日伊澤左近將監家景陸奥國ノ留守職タルベキノ旨ヲ定メラル、彼國ニ住シ民ノ愁訴ヲ聞テ鎌倉ニ申シ達スベキ旨ヲ仰付ラル。

愚按ニ頼朝公文治六年十月三日鎌倉發足アリテ上洛シ玉フ是奥入ノ翌年ナリキ、此時葛西清重○伊校本葛西二字ナシハ供奉ナリ、又同月十五日ニ伊澤家景ハ奥州ノ留守職ヲ仰付ラル、又東鑑ニ清重家景奥州ノ惣奉行トモ云リ、平泉ニ葛西屋敷ノ址アリ三代ノ間此館ニ住居シテ平泉郷内ノ事ヲ檢斷セシト云リ、居城ハ牡鹿郡石ノ巻日和山下登米兩所ニ在リ、家景ノ居城ハ宮城郡岩切村高森館也、多賀ノ國府ト云ハ乃チ是也ト云リ、兩家ノ末葉今東奥大守ノ家臣ナリ。



桃生郡和淵東南ニ昔源義經東國下向ノ時柳ノ枝ヲ笈ノ中ニ入テ來リ此地ニ植エ志願ヲ和淵ノ神ニ祈ル其柳枝根ヲ生ズト云リ其地七八十町ノ廣ナリ五六千株アリ然ルニ享保年中數十株ヲ殘シ之ヲ伐テ萱野ト爲ス。

義經記 二十七

可成談曰曾我物語義經記ハ拙キ物ナレド時代ヲイハハ太平記杯ヨリハ前ノ物也室町家ノ代ニナリテ和文ノ體モ一變セリ。

愚按ズルニ義經記ハ近世出ル處ノ偽書トハ異ニシテ信用スベキ事多シ誤モ亦少カラズ年月日時ノ齟齬地理人名ノ謬誤等枚擧スルニ違アラズ正史ニ參エ考テ是ヲ辨ズベシ。

義經記云かみの郡にかゝりていなの關をこえて宮城野のはらつちの岡ちかの鹽竈松嶋と申所名所々々見給へて三日横道にていかなよりの地藏堂かめわり山を越

ては昔出羽郡司の娘小野小町と申もの住候ける玉造むろの里とも申處又小町か關寺に候ける時業平中將吾妻の下り玉ひけるに妹のあねはかもとへ文かきてことすてしに中將下り玉ひてあねはを尋玉ひはむなくなりて年久し成ぬと申せば姉齒かしるしハなきかと仰せられければ或人墓に植たる松をこそあねはの松とハ申候へと申ければ中將あねはが墓に行て松の下に文を埋めてよみ玉ひける歌

栗原や姉齒の松のひとならは都のつとにいざといはまし物を

とよみ玉ひける名木を御マしてハ松山一ツ々に越ぬれば秀衡かたちへちかちか候

愚按ニ義經記ニ所載如右然レドモ地理方角疑フベキ事多シ悉ク信用シ難シ又姉

齒松ハ栗原郡梨嶋村○伊校本ニアリ郷説ニ云用明帝ノ御時美婦ヲ京都ニ貢ス氣

仙郡高田村武田長者カ女子ヲ京エ上セシニ此地ニテ病テ死セリ其墓ニ松ヲ植ケ

ル又其妹容色アリテ京エ登セケルニ姉カ墓ニ詣テ姉墓ノ松ナリト云シヨリ右

名付シヲ後ニ姉齒ノ松ト改メケル又姉齒橋モ能因ノ歌アリ詳ナル事ハ觀迹聞老

志ニ出。



霧山 二十八

霧山ハ膽澤郡上衣川村ニアリ、達谷窟ヨリ戌亥ノ方奥道ニテ十二三里ヲ隔ツ山中也、郷説ニ高丸悪路王等ガ住シ窟ト云ル也、溪深クシテ山高シ四方山ヲハナレテ切斷タルガ如シ、嶺平カニシテ窟ハ中段ニアリ、岩壁高クシテ窟中ヲ窺ヒ見ルコト能ハズ郷人は是ヲ切山トモ云、或人曰今其窟ヲ尋ヌルニ大石崩レ重リテ窟ノ形タルハ不見ト云、嶺ニ徑リ六尺ホドニテ圓ク草ノ生ゼザル地アリト云フ。

愚按ズルニ琉黄氣ナドノ通ゼシ處ナルニヤ。

絶頂 二十九

同郡同村ニシテ絶頂ハ霧山ヲ隔ツ事一里餘山勢高キ故ニ絶頂ト云、是又高丸等カ居城ト云リ、樹茂リテ三方ハ川流レ谷深シ西方山勢タヒラカニシテ大半ハ伊校本、温地也、此地要害ノヨキヲ以テ善城トモ云リ。

瓶破山 三十

瓶破山ハ出羽ニ在リ、義經潜行ノ時北ノ方産セシ處山ノ八分上ニ四方エ大石ヲ立廻セシ處也、又山下ニ温泉アリ辨慶産湯ヲ求ントテ錫杖ヲ以テ衝法ヲ修シヌレバ忽チ温泉涌出セリト云、今瀬見温泉ト云病アル者浴之、奥州玉造郡ニ鳴子村アリ、瓶破山ニテ出所ノ兒ヲ辨慶笈ノ中ニ隠シ來リタルガ此處ニテ啼タル故ニ啼兒村ト號セシヲ今ハ鳴子ト云リ、又尿前ト云所アリ、義經ノ北ノ方路傍ニ溺セシヨリ地名トセシト云。

吉野山義經舊蹟 三十一

和州吉野ニ義經ノ舊蹟多シ、吉水院ハ義經大物浦ヨリ來リ此山ニ登テ暫ク隠居所也、今アル處ノ家乃チ義經ノ止リタル時ノ家ナリト云、花矢倉ト云ハ忠信カ防キ矢ヲ射テ義經ヲ落シタル處也ト〇蹴拔塔ハ義經此塔ノ内ニ隠レ居テ逃レ下ノ谷へ入り西河エ落行シト云、俗ニ義經ノケヌケ塔ト云、西河村義經此村エ落行シ時宿ノ主ニ給ヒ



シ太刀今ニアリ青江國次二尺六寸アリ。和州巡覽

衣川柵 三十二

衣川柵ノ址ハ今中尊寺山下海道ノ衣川エ掛シ土橋ヨリ五六町ホド川上ニアリ、琵琶  
柵ノ川向ニアタレリ、櫻ノ古木アリ里俗間斷櫻ト云傳フ、柵ノ門前ヨリ並木ニ植タル  
木ノ殘レルナリト云、前太平記ニ衣川柵ハ貞任カ曾祖父安倍忠賴六郡ヲ押領シテヨ  
リ以來八十餘年此城ニ居住スト云リ。

愚按ニ或說ニ衣川館今高館ト云、安倍賴時カ築ク處ニシテ是ヲ衣川柵○伊校本、ト  
衣川館  
云、文治年中民部少輔基成此館ニ居リ其後義經モ此館ニ住スト云リ、此說ノ如キハ  
今ノ高館ヲ以テ貞任ガ衣川柵ト爲セリ、此說誤也、東鑑ニ今ノ高館ノ事ヲ衣川館ト  
云ルニ惑ル故也、衣川館ト衣川柵トハ別ニシテ柵ハ貞任カ居館ニシテ右ニ舉ルガ  
如シ、又館ハ今ノ高館ニシテ秀衡ガ基成ヲ居ラシメ又義經ヲモ別館柳ノ御所ニ居  
ラシメテ兩人此館上ニ居住ス、然ルニ義經ハ文治五年閏四月晦日ニ此館ニテ自殺  
シ、基成ハ別館ナレハ構ナク猶其後マテモ住シ同年八月廿一日泰衡ガ平泉館炎上

ノ後モ立去ラズ、同月廿五日賴朝平泉ニ陣シテ千葉六郎太夫胤賴ヲ差向ラレケレ  
バ父子四人降人ニ出タリキ、又賴朝ノ安倍賴時ガ衣川ノ遺跡ヲ歴覽シ玉フハ九月  
廿七日ニシテ、郭土空ク殘テ秋草鎖ス事數十町礎石何クニカ在ル舊苔埋ム事百餘  
年ト云リ、是ヲ以テ考ル時ハ衣川館ノ事ニハアラス、衣川館ハ泰衡ガ平泉館トハ其  
間隔リヌレバ火災ヲモ免カレテ殘リタルコト分明也、豈衣川館ノ事ヲ如是秋草鎖  
ト云礎石何クニカアルト云舊苔埋ムコト百餘年ト云ンヤ、是ヲ以テ柵ト館トノ別  
ナル事ヲ可知也。

清衡遣黃金于俊明 三十三

大納言俊明卿丈六ノ佛ヲ造ラレケル由ヲ聞テ奥州ノ清衡薄ノ料ニ金ヲ多ク奉リケ  
レドモ少シモ取ラズシテ返シ遣シケリ、人ソノ故ヲ問ケレバ清衡ハ王地ヲ多ク押領  
シテ只今ニモ謀叛ヲオコスベキ者也、其時ハ追討使ヲツカハスコトヲ定申スベキ身  
ナリ是ニヨツテ是ヲトラズトゾ宣ヒケル。

大東世語曰、源亞相俊明營造佛像、奧藤清衡奧押領使鎮  
守府將軍使遣黃金託言聊獻塑金之用、亞



相不受語人曰、清衡負固東奥、竊恐有不軌朝廷、若遣追討使、身亦將與其議。

忠通公書額 三十四

同書曰、法性藤公法性寺大政大臣善書、有乞寺榜者、率書與之、既而聞奥、基衡所捨寺榜、怒遣舍人奥取還、基衡豪悍恃勢、欲不肯還其妻、乃諫還之、使者勇而有計慮、其後悔取輒破齋歸、時人謂不滅睨柱之氣。

大門地藏 北ノ大門附 三十五

大門地藏岩井郡金澤村ニアリ、秀衡ノ建立ナリ、俗大門地藏權現ト云、三月廿四日祭也、堂中地藏及ビ多門、廣目ノ二天、水月觀音ヲ安置ス、共ニ運慶ノ作也、二天ハモト門ニ在リ、門廢壞ノ後ニ堂中ニ安置ス、其門址今二王原ト云、此地ニ昔秀衡吾ガ居館ノ大門ヲ立テ威ヲ振ヘリト云、平泉館ヨリ奥路二十餘里ヲ隔ツ。北ノ大門膽澤郡下居ト云、所ニ在リ伊校本、云所ニ昔平泉館ヨリ奥道廿餘里北ナリ、昔往來ノ人此所ニテ馬輿ヨリ下リテ通りケレバ秀衡ガ平泉館ヨリ奥道廿餘里北ナリ、昔往來ノ人此所ニテ馬輿ヨリ下リテ通りケレバ伊校本、通リケレバト云リ、此故ニ世俗下所

ト云ケルヲ後世誤テヲリ居ト云、南ノ大門ハ金澤北ノ大門ハ此所ニアリト云傳リ。

鍛冶舞草 三十六

舞草村ハ岩井郡東山ニアリ、延喜式ニハ舞草ニ作レリ、平泉ニ不遠昔ノ鍛冶住居ノ址、觀音堂ニ近キ處ナリ伊校本、郷説ニ往昔頼義義家兩將軍賊徒征伐ノ時都ヨリ鍛冶ヲ召下シテ此地ニ居シ、太刀ヲ造ラシムト云、其子孫秀衡ノ時迄此地ニ住ケルト云リ、文壽寶壽舞種諷誦、森房等舞草平泉ニ住スト云、詳ナルコトハ鍛冶傳ヲ考テ可知也。平泉大阿彌陀堂ノ燭臺二脚、舞草太郎森房造之奉納ス、今ニ相傳フ伊校本、今東奥大守公ニ森房力作ノ長刀アリ、龜井六郎重清ガ持所ナリ、此事末ニ載ス。

基成 三十七

義經記曰、民部權少輔基成ト云人アリ、平治ノ合戰ニ伊校本、討レ玉ヒシ惡右衛門督信賴ノ兄ニテオハシマス、謀叛ノ者ノ一門ナレバトテ東國ニ下ラレタリケルヲ古入道秀衡情ヲカケ玉ヒ、其上秀衡ガ基成ノ女ニ具足シテ、子供數多アリ、嫡子次男泰衡三



男泉三郎忠致ムネノミチノサネコレラ三人ガ祖父ナリ、サレバ重クシ奉リ、少輔御領トゾ申ケル云々。  
 愚按ズルニ基成ノ女子ノ腹ニハ泉冠者泰衡、泉三郎忠衡二人ナリ、忠致トハ忠衡ヲ  
 誤レリ、秀衡ノ子ニ忠致ト云者ナシ、又嫡子次男泰衡ト云ハ泰衡ハ次男ナレ共嫡子  
 ニ立タル故ニ斯ク云ルニヤ、然レ共此等三人ガ祖父トアルトキハ嫡子トハ西木戸  
 太郎國衡ヲ指ナルベシ、國衡ハ泰衡トハ別腹ノ兄ナリ、是佐々木秀義カ姨母○伊校  
本、姨母  
 腹ナルニヤ、一説ニハ庶兄ナリト云、義經記ノ書謬誤多シ正史ニ參マヘ看ルベシ、按ス  
 東鑑卷ノ十一帖ニ秀衡ノ妻近江國又按ニ平治物語卷ノ二曰、信賴卿ノ舍兄兵部權  
 住人佐々木秀義カ姨母ナリト云云、又按ニ平治物語卷ノ二曰、信賴卿ノ舍兄兵部權  
 大夫基家民部權少輔基通舍弟尾張少將信俊子息新侍從信親云云民部權少輔○伊  
校、本、  
 民部民部基通ハ陸奥エ流サレケル云云○再按ズルニ基成ノ事平治物語ニハ不見東鑑  
 義經記等ニ出タリ、平治物語ニ所謂基通民部權少輔ト云陸奥國エ遠流ト云ルハ基  
 通後ニ基成ト改メケルニヤ。

骨 寺 三十八

骨寺ホネジラハ清衡中尊寺ニ○伊校本、中尊寺經藏ニ寄附セシ處ノ地ナリ、今岩井郡五串村ノ中本寺ホネジラノ地

ノ事ナリト云リ、東鑑ニ古津天良ト訓ゼシハ誤ナルベシ、何レノ世ニ何ノ骨ヲ瘞メタ  
 ル寺アリテカク名ツケ、ルニヤ、今ハ寺ナシ、又何レノ時ヨリカ骨ノ字ヲ改テ本ノ字  
 トナシケン、中尊寺ニ傳フル古文書ヲ以テ考レバ百一代後小松帝ノ至德年中マデハ  
 骨寺ト書リ、此地ニ昔ヨリ山王ノ宮アリ、寺ノ事ハ傳エ知レル者ナシ、社司ハ其所ノ俗  
 人ナリシガ近年ハ中尊寺ヨリ司之、因テ思ニ氣仙郡猪川村龍福山長國寺今ハ長谷ト  
書ス昔ハ國  
ト書ハ田村磨ノ創立ニシテ大像ノ觀音アリ、龍福ト云ル鬼ヲ誅伐シ其首ヲ瘞テ觀音  
 ヲ其上ニ安置セリト古來郷俗言傳ヘタリ、然ルニ寶永ノ初年堂再興ノ頃果シテ堂下  
 ノ地中ヨリ髑髏ノ朽タルト大ナル牙齒ノ喰合ニ鬼面ノ絞アルヲ三十餘枚、一尺餘ノ  
 小刀トヲ掘出セリ、小刀ハ俗ニ所謂トマメニ刺シタルナルベシ、髑髏ハ朽テ粉トナリ  
 形ノ見ルベキナシ牙齒小刀今ニ相傳フ、岩井郡モ昔夷賊ノ徘徊セシ地ナレバ骨寺ト  
 云ルモ此類ナランカ。

加 羅 樂 三十九

東鑑ニ秀衡ノ常ノ居所ヲ加羅樂ト云、加羅樂ノ義未詳、愚按ニ古ハ物ノ名モ易ヤラカニ



稱セシナレバ加羅樹ヲ用テ造營シテ平日ヲ樂ミ居ル家ト謂ル意ニテ斯ク名ツケシ  
ニヤ、清衡ノ時日本ノ諸大寺ヨリ震旦ノ天臺山ニ至ル迄寺コトニ千僧ヲ供養スルト  
トアルホドナレバ中華ノ海渡モ自由ニシテ異國ノ物モ求メ易カルベシ、又里俗加羅  
ノ御所ト云伽羅ノ御所トモ云、御所トハ貴人ノ居館ヲ稱スル也、又伽羅トハ日本ニテ  
外國ヲ呼ブノ名也、昔意富加羅國王ノ子都怒我阿羅斯等海ニ浮ンテ日本國ニ入テ崇  
神天皇ニ仕フ此事古事記ニ詳也、外國ノ人始テ我國ニ來ル者ハ都怒我阿羅斯等ナリ、  
則チ意富加羅國ノ王ノ子ナリシヨリ此來外國ヲ以テカラト稱ス、獨リ中華ヲカラト  
稱スルノミニアラズト松下見林ノ説ヲ引テ好古ノ漢事始テ詳ニノス、又伽羅ヲキヤ  
ラト讀コトハ、泊好子ノ谷響集ニ伽羅ハ梵語也黒ト黼ス黒沈香ノ事ナリ、今ハ奇南香  
ト名ク、日本ニテ沈香ノ上品ヲ伽羅ト云、昔蠻國ノ商人天竺ノ語ヲ傳ヘテ云ナラハシ  
タルナラン、伽羅樹ト云モ同コトナリト云フ、此説ナレバ伽羅樹等ヲ鋟メ造營セシ故  
カ、又黒漆ヲ用テ塗タルカ識者ニ問テ明ムベシ。

輝井太郎

輝一ニ照トモ書ス 四十

義經記ニ輝井太郎高春、長崎太郎同次郎等ガ三萬餘騎ヲ率シ泰衡ガ下知トシテ衣川  
館ヲ圍ミ義經ヲ攻シコトヲ載ス、輝井カ事東鑑ニハ不見ト雖モ其舊跡所々ニアリ○  
膽澤白鳥村ニ照井ガ居館ノ跡アリ○同衣川村ニ照井ガ陣場ノ址アリ○栗原郡北方  
佐沼城ハ照井ガ居城ト云傳リ○玉造郡下野目村ニ照井ガ城アリ○柴田郡沼邊村ニ  
葦神山トテ道ニサシ出タル岩山アリ、昔ヨリ此山下往還ノ海邊ナリシガ綱村公其岩  
ノサシ出テ危ヲ見タマヒテ道ヲ回シ今ハ遙左ノ方ヲ通ルナリ、小川土橋○伊校本、小  
川ノ坵橋  
アリ照井橋ト云、賴朝公奥入ノ時照井此橋ニテ戰死セリト云、此橋昔ヨリ山下ニアリ  
シガ道ヲ廻セシ時遙川ノ下流ニカケテ往來ス、葦上山ノ西北ニ照井ガ石墳アリ、其屍  
ヲ埋タル處ナリ、又橋ノ北田ノ中ニ小池アリ首洗水ト云、照井ガ家臣主人ノ首ヲ泥中  
ニカクセシ處也○岩井郡村落田畠ニ用ル水ヲ引處ノ溝渠新古ヲ不分村民呼テ照井  
溝ト云、奥地ノ方言ニ溝○伊校本、溝渠ヲ世ト云、相傳フ本部ノ溝ヲ昔照井ガ司ル處ナリト、  
此故ニ今ニ至テ其遺風ヲ傳フコト然リ○栗原郡一迫庄長崎ニ小坂本館アリ、秀衡ノ  
家臣長崎四郎ノ城址ト也。

愚按ニ照井太郎一説ニ高直ト云、鎌倉實記ニハ照井遠衡ト云。







季衡ガ子一人經衡ト云秀衡ヲ除キ外皆俊衡季衡ト同ク頼朝ヘ降人ニ出タリ、又本文ニ所謂季春ト云者基衡秀衡ノ家臣ニ未ダ考ヘズ金商人三條吉次ヲ季春ト云ル説アリ、義經記ニハ信高ト云太平記劍卷ニ五條吉次季春ト云、近世ノ義經勳功記鎌倉實記ニハ末春ト云リ、然レドモ基衡カ乳母子ニハ非ズ別ニ其頃ノ季春ト云ル者アルケルニヤイブカシ、疑ラクハ本文ノ説傳聞ノ誤ナルニヤ尙知者○伊校ニ問テ當審之。吉次カ事本書卷ノ三ニ載之。

猫間淵 四十二

平泉高館ノ東南ニ昔ノ猫間ガ淵ノ跡アリ今ハ田畠トナス、此淵ヲ猫間ト云コト由來詳ナラズ、按ニ京千本釋迦堂ハ秀衡ノ建立ニシテ猫間中納言光隆卿ノ家司岸高千本宅ヲ捨テ寺トナスト云、此淵ヲモ猫間ト云ルコト是等ニ付テ故アルコトニヤ、又俗説ニ猫間扇ニ似タル石ノ中嶋ニアリシ故ニ名ツクルト云、又扇前ト云女房此淵ニ身ヲ投シユヘ號ルトモ云、義經滅亡ノ時出タルト云蛇ハ此女ノ變ジタル也ト云事アレドモ信ズルニ不足、俗間ニ傳フル清悅物語ニ、文治四年閏四月廿八日ニ泰衡ガ下知トシ

テ長崎四郎等大將ニテ軍兵ヲ率シ義經ヲ討ント高館ニ推寄タル時、北上川一面ニ洪水ニシテ逆浪岸ヲウチ長廿丈バカリノ大蛇二疋顯レ出水面ニ浮ンデ長崎ヲ背上ニノセテ水ニ入彼ヲシテ溺死セシムルト云リ、又鎌倉實記ニモ蛇ノ出タル事ヲ載テ高館没落ノ一條ハ雜記小説ヨリ取ルトアレバ、彼ノ清悅物語ノ如キ書ニ據テ奇怪ノ妄説ヲアラハスニヤ、中尊寺經藏堂ニ蛇ノ齒ト云ル物アリ、猫間淵ヨリ出タル蛇ノ齒ナリト云、是附會ノ説也、然ルニ其形ハ蛇ノ齒ト云ベキ物ナリ、又宮城郡七北田村龍門山洞雲寺ニ蛇ノ齒アリ平泉ノ齒ニ同シ、其寺ノ緣起アリ昔巴蛇ナト、云物有テソノ齒ナルニヤ、或人曰蛇ノ齒ト云ル物右ノ外ニモ所々ニアリ、大小ハアリト雖モ其形ハ異ナルコトナシト。

北加美川 四十三

前太平記云天喜五年ノ春頼義將軍ハ鎮守府ニマシマシケル、再ビ朝敵追討ノ綸言ヲ蒙リ六月五日鎮守府ヲ立テ衣川エ發向アル、頼時斯ト聞テ弟良昭ニ軍兵ヲ相副ヘ同七日ニ途中迄出向イマダ二三里カホドモ打過サルニ將軍ノ勢ニ行逢ヌ、此時ノ合戰



ニ官軍渴ニ苦ミケレバ頼義將軍自ラ弓<sup>ハ</sup>弮<sup>ハ</sup>ヲ以岩ヲ穿チ玉ヒバ澧水涌出セリ、此水流レテ加美川ニ落入タリケル故ニ此處ヲ北加美川ト名附タリ、朝敵誅伏ノ後爰ニ新通寶寺ヲ建立シテ義家髮中ノ觀音ヲ安置ス、此像ハ河内國通寶寺ノ觀音ヲ模シ鑄テ義家髮中ニ被<sup>カ</sup>リシ佛ナリ。

愚按ズルニ田村將軍達谷窟ノ寄文ニ東限<sup>北</sup>上川トアリ、是延曆廿年ノ事ニシテ天喜五年ヨリ二百五十七年以前ニシテ<sup>○伊校本、以前ナルベシ、以前太平記ニ所謂加美川ハ衣川ト</sup>鎮守府ノ間ニアリト言ヒバ伊澤郡ノ中ニアタレリ、衣川柵ヨリ鎮守府ニ至テ今其程ヲハカルニ東北方相隔ツ事奥道三十餘里今此間ニ加美川ノ舊蹟ナシ、田村ノ既ニ濫<sup>ラ</sup>傷<sup>マ</sup>南部ニアル處ノ今ノ北上川ノ事ヲ謂ヒバ、前太平記ノ說疑ラクハ記者ノ誤アルベシ、北上川ノ源ハ今ノ南部領岩手郡ニアリ、厨川柵ヨリ奥路百餘里奥ナリ、此地ニ北上山通寶寺ト云觀音堂アリ俗御堂觀音ト云、堂ノ傍ニ弓<sup>ハ</sup>弮<sup>ハ</sup>池ト號スルアリ、方一丈餘清水涌出ス是乃チ北上川ノ源也、是ヲ頼義ノ時ノ涌出ノ水ナリト<sup>釜ナルト云前太平記ニ謂ル所ト此地トヲ考合スルニ此地前太平記ノ地ヨリ行程三四日奥ニ當レリ、是亦不能無疑、暫書之以俟後考爾。</sup>

義經之妻 四十四

東鑑ニ元曆元年九月十四日河越太郎重頼ガ息女上洛ス、源廷尉<sup>義經ニ嫁センガ爲也、</sup>  
<sup>○伊校本、爲也ト云リ</sup>盛衰記四十四ニ云元曆二年五月平大納言時忠卿ノ息女ヲ義經迎取ヌ、本妻ハ河越太郎重頼カ女モアリケレドモ是ハ別ノ方ヲシツラヒテ居タリト云リ。  
同書四十六ニ義經都ヲ落テ金峰ニ登テ金王法橋カ坊ニテ具シタリシ白拍子二人ニ舞セテ二三日遊ビ戯レ、此ヨリ白拍子ヲ京エ歸シ送ル、金王法橋ニ誂<sup>ツ</sup>付テ年來ノ妻ノ局河越太郎カ娘斗ヲ相具シテ下ニケリ、陸奥國權館秀衡入道ガ許ニ尋付タリケレバ造作シテ居侍リケルト云リ。

義經記ニ云北ノ方ハ久我大臣殿ノ姫君九ツニテ父大臣殿ニ後レ、十三ニテ母北ノ方ニヲクレ給ヒヌ、其乳母夫ノ十郎權頭ヨリ外ニ憑<sup>カ</sup>ム方<sup>カ</sup>マシマサズ、一條今出川ノ久我殿ノ古御所ニオハシマスヲ具シテ奥州ニ下ラレケル<sup>義經勳功記ニ久我大臣雅道公ト云リ</sup>



盛衰記秀衡之事 四十五

盛衰記卷七○伊校云治承五年四月廿八日賴朝ヲ可追伐○伊校由院廳御下文ヲ成シテ陸奥國住人藤原秀衡ガ許へ被下遣ケリ其狀ニ云御下文ハ秀衡ト云ハ下野國之住人依藤太秀郷ガ末葉曰理權太夫經清カ曾孫權太郎御館清衡ガ孫ナリ彼秀衡御下文ヲ給タレドモ兵衛佐ニハ草木モ靡テタヤスク難傾カリケレバ無由トテサテヤミヌ。愚按ズルニ曰理ハ陸奥ノ郡名延喜式ニ曰理ニ作り順和名後篇ニ曰理ニ作ル今ハ巨理ト書ス。

同卷曰養和元年七月廿五日除目被行ケリ陸奥國住人藤原秀衡征將軍ニ被補ケル上へ當國ノ主一本守ニ任ズ越後國住人城太良資永○伊校本越後守ニ任ズ秀衡ハ賴朝追討ノ爲資永ハ義仲追伐ノ爲ナリト各聞書ノ注文ニ子細ヲ被載タリ。

愚按ズルニ秀衡ハ鎮守府將軍ニシテ征夷將軍ニハアラズ征將軍トハ征夷將軍ノ事ナルニヤ。

同書三十三日壽永二年八月賴朝ニ征夷將軍ノ院宣ヲ下サル御使左史生中原康定右

史生中原景家コレヲ賜テ九月四日關東ニ下著ス云々賴朝康定ニ向テ仰ケルハ秀衡ヲ陸奥守ニナサレ○伊校本資職ト忠義ヲ常陸守ニナサル間賴朝ガ命ニ不隨本意ナキ事ニ侍リ早ク彼ノ輩ヲ可誅由院宣ヲ被下トコソ被申侍云々。

愚按ニ平家物語卷ノ八ニモ此事ヲ載タリ九月四日ヲ十月四日ニ作ル資職カ事ハ不載。

同書卷四十六ニ曰義經奥州ニ下リテ最後ノ事ヲ載タリ。

同卷曰昔將門ガ合戰ノ時御方シタリシ依藤太秀郷ガ末葉ニ陸奥出羽兩國ノ地頭ニテ權太夫常清其一男ニ權太郎御館清衡其男ニ御館元衡其男ニ御館秀衡其男ニ安衡是也。

愚按ニ常ノ字經ニ作り元字作基安ノ字作泰ベシ皆傳寫ノ誤ナリ。

百練抄云養和元年八月十五日以藤原秀衡任陸奥守以平助職任越後守爲追討賴朝也。

辨慶龜井之長刀 四十六

東奥太守家辨慶龜井ガ長刀アリ。



一國重 昔者武藏坊辨慶所持我伊達伯世々傳爲器也。  
一森房 昔者龜井六郎重清所持我伊達伯世々傳爲器也。  
國重ハ朱ニテ書シ森房ハ象眼ノ銘也。

義經學劍術並千人斬 四十七

俗説辨云源義經天狗ニ劍術ヲ學ビ或ハ六韜ヲ讀テ輕捷ノ術ヲ得タル説附五條ノ橋ニテ千人斬ノ説。

俗説ニ源義經鞍馬ニアルケル頃鞍馬ノ奥ニ僧正ヶ谷ト云所アリ僧正ト云天狗栖ナル故ニ名付リ義經夜々此所ニ行テ天狗ニ劍術ヲ學ビ輕捷ヲ得タリト云一説ニハ洛陽ノ北白川ニ鬼一法眼ト云陰陽師六韜ヲ納置タルヲ義經傳聞テ望ムト雖モ見セザル故ニ潜ニ鬼一カ女ニ通ジ件ノ書ヲ盜ミ出シ讀覺エ忽チ輕捷ヲ得一丈ノ堀八尺ノ築地ヲ飛越ケルト云又一説ニ義經亡父義朝ノ追善トテ夜々五條ノ橋ニ出テ往來ノ者ヲ千人切テ手向タリト云今按ニ鞍馬○伊校本、鞍馬僧正ヶ谷ハ僧正ト云天狗ノ住ル故ノ名ニハアラズ眞言傳ニ鞍馬ノ僧正ヶ谷稻荷山ノ僧正カ峰ハ壹演僧正○伊校本、義經ノ行ヒ玉ヒケル

跡ト記セリ又義經天狗ニ劍術ヲ學ビタルコト東鑑盛衰記義經記ニモ見エズ疑ラクハ義經世ヲ憚リテ潜ニ師ヲ求メ夜々劍術ヲ學ヒタルカ然ラズバ鞍馬ニアル中一度平家ヲ亡シテ父ノ仇ヲ復セント憤氣高慢胸中ニ滿タルヲ天狗ニ劍術ヲ學ビタリト形容シテ云ルニヤ又義經ノ輕捷ハ天狗ニ學ビ或ハ六韜ヲ讀ル故ト傳レド生レ付ナルベシ若兵道ニ達セシ者輕捷ノ術ヲ得ハ孫吳ハ天ヲモ翔ルベシ況ヤ張良孔明カ輩ヲヤ今世ニ流行スル蜘蛛舞杯言モノハ天狗ニ不學兵術○伊校本、兵書ノ名サヘ不知ドモ身ノ輕キコトハ義經ニモ越ツベシ思フニ俗間ニ義經ヲ稱スルトテ將ノ器アルヲバ知らデ一人ニ敵スル匹夫ノ勇ニ唱ヘナセルニヤ項羽○伊校本、項籍ガ所謂劍ハ一人敵不足學萬人敵トアルゾ義經ノ本意ナルベキマタ義經兵書ヲ見ンコトヲ望メドモ叶ザル故謀ノ爲ニ潜ニ鬼一ガ女子ニ通ジ件ノ書ヲ得タリト云ハ左モアルベシ會津風土記ニモ義經鬼一ガ女皆鶴ソノ跡ヲ慕ヒ會津藤倉ニ至ル女義經ノ事ヲ土人ニ問シニ土人答テ義經此處ヲ通ラレシハ五日以前ナリ跡ヲ追トモ及ビ難シト○伊校本、カタ云ケレバ皆鶴悲ニ不堪扱ハ再會叶ガタシトテ難波池ニ身ヲ投テ死セリ義經其邊ニアリシガ此事ヲ聞立歸テ悲歎シ屍ヲ納メ築墓後人難波寺ヲ立ツ鬼一ガ兵書今ニ殘レリト



ミヘタリ、又義經亡父ノ追善ニ往來ノ者千人斬ト云ルハ是如何ナル事ゾヤ、若清盛ガ家臣ノ者擇ビテ斬トナラバ○伊校本、家臣而已ヲコトハリトモ言ベキニ夜中ナレハ其分チモ定カナルマジ、然ル時ハ何ノ罪ヲモ無モノヲ千人切殺サバ追善ニハ非ズ追惡ナルベシ、思ニ是モ武夫ハ人ダニ斬レバヨシト心得義經ノ武勇ヲ稱セントテ跡カタモナキ事ヲ妄作シ却テ其人ヲ罪スルノミ。

僧 正 谷 四十八

羅山翁神社考曰、鞍馬山與貴布禰之間有岩谷名曰僧正谷或云不動明王示現之地也世傳牛弱初名舍那王丸、遁平治之亂入鞍馬寺、一日到僧正谷逢異人山伏云異人教牛弱以劍術且盟曰我爲舍那王護神其後時々與異人遇千僧正谷善習其刺擊之法牛若素好輕捷至此益精及十五歲征奥州壽永元曆之際與平氏合戰其功居多文治之始再遊鞍馬山不得復見異人牛弱即源廷尉義經也。

按ニ僧正谷ト號スルハ一演僧正ノ修行セシ谷ナル故ニ名ク天狗僧正カ住ルユヘ名ケタルニハ非ズ前條ニ詳也。

鞍馬天狗僧正像

并源牛弱像

公方○伊校本、公家獨ノ山僧ヲ夢ミ玉フ山僧ノ曰我ハ是鞍馬ノ僧正也願クハ狩野元信ヲシテ吾像ヲ圖シテ以テ寺中ニ安置セシムベシ公驚キ覺テ元信ニ告グ元信モ又同ク夢ム然レドモ實ニ其形ヲ不知世ニ又圖像無シ茫然紙上ニ臨ミテ手ヲ下ス事能ハズ忽チ蜘蛛アリ絲ヲ紙面ニ曳テユク○伊校本、絲ヲ曳テ紙面ニユク其跡ニ從テ是ヲ見レバ彷彿トシテ圖畫成ル中ハ僧正坊左ハ役ノ行者右ハ源牛弱ソノ繪方六尺餘ナリ元信カ家ハ其門狹少ニシテ是ヲ出シ難キ故ニ其簷ヲ破リテ出ス當世ノ諺ニ曰圖既ニ成テ屋ヲ破ルト云リ圖今鞍馬寺ノ○伊校本、鞍馬寺ノ堂ノ西ニアリ本朝語圖

辨慶守本尊 五十

辨慶ガ守本尊不動像松島ノ中福浦嶋ニアリ長四尺三寸智證大師ノ作也福浦嶋ハ御嶋ノ東海上十餘町ニアリ嶋上名跡多シ。



慈覺大師作佛 五十一

達谷窟イムナハ延曆廿年田村磨ノ創立ニシテ多門天ノ像百八體慈覺ノ作ニシテ昔ヨリ安置ス、今殘レル處三十餘體アリ、内一體並ニ夾持吉祥天女善尼師童子共ニ秘佛ナリ、元享釋書圓仁ノ傳ヲ考フルニ、圓仁ハ延曆十三年天皇五十年桓武天皇之號也下野國都賀郡ニ生レ、九歳ノ時同郡大慈寺廣智其母ニ請ヒ得テ弟子ト爲ス、十五歳ノ時廣智叡山ニ連レタチ行テ最澄傳教大師ノ弟子ト爲ス、承和五年五十四代仁明帝四十五歳ノ時入唐ス、唐ニ留ルコト十年ニシテ同十四年ニ歸朝ス、貞觀六年五十六代清和帝七十一歳ニシテ遷化ス、同八年慈覺大師ト諡スト云リ、田村磨達谷村精舎ノ建立ハ延曆廿年ニシテ此時圓仁僅ニ八歳ナリ、然レバ百八體ノ像ヲ作りシハ田村磨精舎造立ノ後ニシテ圓仁成長ノ時ノ事ナルニヤ、又毛越寺中尊寺伊校本、毛越寺ナシニ慈覺ノ作ト云ル佛像今傳ル處十餘體モアルベシ、此兩所ニモ不限世間ニ惠心傳教弘法慈覺此外名ノ著シキ僧ノ造レルト云傳エタル佛像所トシテ無キ事無ゾイブカシキ、此等ノ佛僧何レモ佛像ヲ造レル事ヲ業トシテ世ヲ渡レル人々ニモ非ズ、其作ト云ル中ニハ必ズ佛工ノ其佛伊校本、其作ヲ模シ造リ又他

作ニ名ヲ托スルモノ多カルベシ、予青年ノ頃京都ニ遊學シテ留寓ノ中所々ニ古佛ヲ開帳シ、又ハ近國遠邦ヨリ佛像ヲ將來テ京ニ於テ開帳スルヲ看ルニ、傳教弘法慈覺智證ナドノ一刀三禮ノ作ト云ル者開帳ゴトニ出サバルハ無シ、是所謂方便ノ説ヲ楯ニ取りテ世ノ愚昧ノ者ヲ惑ハシ、錢財ヲ貧レル賣僧ヤメ奸人ノ爲ス處ニシテ具眼ノ者信ゼザル處ナリ。

金十郎城 五十二

岩井郡流庄上油田村ノ城秀衡カ家臣金十郎カ居城址ト云フ、賴朝奥入ノ時此人三澤安藤四郎等ニ討レタル事東鑑ニ出タリ、蓋此人金爲時ガ子孫親族ノ中ナルベシ

鬼死體村 五十三

一ノ關隣村ニ鬼死骸村アリ、昔鬼ヲ殺シタル處ナリト云、其埋メタル所ノ印ナル迎石アリ、俗ニ鬼ヲ伊校本、鬼ノ首ヲ切ケレバ迫ノ内鬼首村エ飛行ケルヨリ此所ノ名トナスト、鬼首村マデハ鬼死骸ヨリ二日路ホドモ有ルベシ、俗ノ虛談伊校本、虛説ヲ傳フルナルベシ、此



說○伊校何ノ世誰人ノ殺シタルニヤ俗ニ田村將軍殺シタリト云。

鬼首村 五十四

前太平記ニ鬼切部ト云所アリ、鬼首村ノ事ナルベシ。

愚按ズルニ功ノ字ヲ誤テ切ノ字ニ書ルナルベシ、鬼首ハ首ノ字ナリ、悉シキ事ハ此末四ノ卷ニ記セリ見テ可知也。

平泉雜記卷之三

○中尊寺銅鐘一

今中尊寺ニ在ル處ノ鐘ハ七十九代ノ帝 光明帝ノ御宇康永二年癸未ノ歲ニ造レリ、秀衡ノ時ノ鐘ニハ非ズ、此山五十四代 仁明帝ノ嘉祥三庚午ノ年慈覺大師ノ開闢ニシテ、其後二百五十六年ヲ經テ○伊校本、七十三代 堀河帝ノ長治二年乙酉ノ春堀河鳥羽兩帝ノ勅詔ヲ蒙リ鎮守府將軍藤原清衡寺院佛像ヲ建立ス、其後二百三十三年ヲ歷テ建武四年丁丑ノ歲光明帝ノ曆號ナリ南朝後醍醐天皇延元二年ニアタル堂社寺塔回祿シテ殘レル者少シ、此年ヨリ七年後ニ賴榮法師此鐘ヲ鑄テ序銘ヲ書リ、此人清衡ノ再興造立ノ年曆ヲ去ル事遠カラズ、故ニ序中ニ著ス處ノ山ノ由來是ヲ徵ト爲スベシ、賴榮ハ金色院ノ先祖ナリト云、一說ニ西谷坊此院金色堂ノ別當ニシテ元妻帶ナリシガ、延寶四年ノ秋時ノ住持清僧ノ寺トハ爲セリ○伊校本、清僧ノ願アリテ永世清僧ノ寺トハ爲セリ。



鐘銘序

抑考平泉中尊寺草創歲序長治二年春藤原清衡公忝賜堀河鳥羽勅詔靈場也爰建武四年回祿成阿闍塊埵賴榮勵推鐘利生志于茲誌

關山曉鐘 覺無明眠 鷲嶺晚嵐 關山曉鐘

拂煩惱塵 摧伏魑魁 感降靈仙

悉極六道 下達九泉 劍輪輟苦

鯨音無邊 普配聖賢 四化父母

利物心堅 鑄施金錢 銘加鏤字

永不朽傳

康永二年大歲癸未七月日

鑄師散位藤原助信

願主權律師賴榮

大旦那左近將監平親家

大旦那當國大將沙彌義慶

鐘長四尺一寸程口ノ徑二尺三寸厚サ三寸

奥六郡二

奥六郡ト云ハ陸奥州ノ内膽澤江刺和賀稗拔志和岩手也。清衡是ヲ領スルコト東鑑卷ノ九ニ見エタリ、膽澤ヲ俗ニ伊澤ニ作り和賀續日本紀ニ和我ニ作ル、東鑑ニ加賀ニ作ル、拾芥抄ニ知我ニ作り或ハ知賀ニ作レルモノアリ皆誤ナリ、江刺ヲ東鑑ニ柄著差ト書ル處アリ、是字假名ヲ以テ書ケリ、又節用集ニ江差ト書テ江刺ト二郡ニス、是文字ノ異ナルヲ以テ誤レリ、江刺一郡ト爲スベシ、拾芥抄ニ誤テ部貫ニ作ル、又節用集ニ誤テ稗繼ト書リ今稗貫ト書ス、志和拾芥抄ニ斯波ニ作り、續日本紀ニ子和ニ作ル、源順和名集ニ標葉ニ作り又紫和ト書ケルモアリ、○伊校本、又紫和ト書ル者アリ、○或說ニ東鑑ニ加賀ト作ルハ○伊校本、加美郡ノ誤ナルヘシト云リ、愚按ズルニ此說誤ナリ、同書ノ末ニ和賀ノ事ノ出タルヲ以證トスベシ、況ヤ北方岩手ヨリ志和稗貫和賀膽澤江刺ノ六郡連續ノ中和賀一郡ヲ除テ遙ニ三四日ノ行程ヲ隔タル加美一郡ヲ交ヘ加フベキニ非ズ、此說僻言ナリ、○此六郡ハ安倍忠賴以來賴時貞任マデ傳領シ、其後清原眞



人武則領知シ其子荒川太郎武貞其子眞衡其養子海道太良成衡○伊校本、海道太郎成衡之ヲ傳領ス成衡戰死ノ後清衡領之、基衡秀衡泰衡ツヅイテ○伊校本、繼テ領之東鑑卷之九云、清衡ノ繼父荒川太郎武貞卒去後傳領奧六郡ト、然ルニ前太平記等ニハ清衡ハ武則ニ養ハレ子トナリ武貞ヲ兄トナスト云リ、王代一覽ニモ兩説ヲ舉テ一ニ不歸又武則ガ子ニアラザル事分明也、清衡幼キ時養ルト雖成長ノ後養父ノ姓ヲ不冒シテ本姓ニ復スルコト明ニ履歴アラハル、成衡戰死ノ後奧六郡ハ官地ニ收メラレ、義家將軍執秦ニ依テ清衡ニハ禁裏ヨリ下シ賜リタル也、或説ニ清衡ノ家ヲ繼テ奧六郡ヲ傳領スルト云ハ誤ナリ。

押領使 三

押領使ハ國ニ奸盜等ノ人アル時平ケル職也トゾ○鎌倉實記云フ當時日本ノ三押領使ハ一ハ奥州ノ秀衡、一ハ伊豆ノ祐親、一ハ肥後ノ菊池ナリ、一國ノ政務ハ國司ノ主ル所也、若兵馬ノ事ハ國司ヘ不及尋押領使ノ心ノママニ振廻ナリ、今度翔落ノ法師ナンド探スモノハ○伊校本、本事ハ小事ナリ目代ノ役ナリ○朝野群載ニ押領使ノ太政官符アリ、左ニノセテ考ニ備フ。

太政官

出雲國司

應以清瀧靜平爲押領使令追捕部内奸盜輩事

右得彼國去正月廿六日觸狀○伊校本、觸狀本、解狀傳謹檢案内美作伯耆等國申請官符押領使勤行警固而此國有二境之中暴惡之輩任心橫行自非官符之使何糺執惡之徒加以年來之間賦稅之民恣集黨類奪人物按事情糺捕○伊校本、之道尤有其使方今靜平才○伊校本、備亦堪武藝清廣之性勤公在心望請官裁準件等國例以靜平致裁○伊校本、押領使且令折凶惡之輩且令在平善之風者右大臣宣依請者國宣承知依宣行之符致奉行

從四位下行左中辨橘朝臣好古左大史出雲宿彌蔭時

可成談云押領使ト云コトハ俗ニ云押領ト云詞ニテナシ、其他ヲ勅賜ナクテ押シテ領セル人ナリト解スルハ誤ナリ、サラバ何トテ使ノ字付タル、奥羽軍記ノ和文ニハ陣頭ト有リ、漢文ニハ押領使トアリ、國々ヨリ公役ニテ軍兵ヲ召連テ出ル將ノ事也、押ノ字ノ意ハカ、ミル事ナリ

摩多羅神 四

或書ニ斑神ニ書ルハ誤ナルベシ



或人間摩多羅神ハ平泉ノ鎮守也。是何レノ神ナルニヤ。答曰羅山翁ノ神社考ヲ讀テ其由來ヲ知ル。神社考ニ山家要略ヲ援曰。傳教大師佛法ヲ求ント思フノ願アリテ葛城ノ神ニ詣テ祈リケルニ神傳教大師ニ告玉ハクは大願ニシテ我力ニ不及處也。天神地祇ヲ祈ルベシ但シ三輪大明神ハ我國ノ地主ニシテ天竺唐土ニモ此神ヲ崇ム。カシコニ詣テ、祈ルベシト告玉フ。其後傳教大師叡山ニ歸レリ。山ニ三光ノ光ヲ認ムル處アリ行テ是ヲ見レハ杉ノ大樹ナリ。其後入唐ノ志ヲ遂ケ唐土天台山青龍寺ニ至ル。其鎮守ヲ摩多羅神ト云。又金毘羅神トモ云リ。大師此神ハ何レノ神ナル事ヲ尋ヌレバ三輪金光○伊校本三輪三光ト申奉ル神ナリト答フ。於是大師初メ日本ニ在シ日ノ叡山ノ三光ハ此摩多羅神ナル事ヲ喻リヌ。求法ノ願成就シ日本歸國○伊校本日本歸朝ノ後叡山ノ三光ノ處ニ神社ヲ建ツ。是則チ日吉大宮也。昔靈鷲山ニ於テ十二神ヲ祭玉フ。其中ニ金毘羅神アリ。是則醍醐ニ建立スル清瀧明神。慈覺大師西坂ニ建ル赤山權現。智證大師三井寺ニ建ル新羅明神何レモ入唐ノ時祈ル處ノ天台山青龍寺ノ鎮守ニシテ、乃チ素盞鳴尊ノ父子ノ御神ナリト云リ。詳ナル事ハ神社考ニ出タリ。

常行堂祭禮 五

○伊校本ニ此項ナシ

常行堂本尊ハ前ニ書スル處ノ摩多羅神也。御垂跡ハ秘シテ拜見ヲ不許。向ニ須彌檀ヲ莊嚴シ其上ニ御本地寶冠阿彌陀四菩薩ヲ安置ス。○毎年正月廿日神古又ハ常行三昧ノ秘法一山僧侶勤之。次ニ田樂胡姬ノ木ノ皮ヲ以二尺余ニ方ニアジロヲ組ミ平カニシテ四邊ニシテ下ケ。上ニ造花ヲ立テ笠ノ如クニ頭ヲ載キ、太鼓ヲ以テ打ハヤシ拍子ヲ踏テ躍リマフ。次ニ祝詞天狗ノ假面ヲ粧ヒ直垂裝束ニ弓箭腰ニ携エ幣帛ヲ持テ神前ニ向ヒ秘傳秘法天下泰平息災安穩ノ事ヲ祈リ、次ニ京殿舞公家冠裝束ニテ濫觴四神感應ノ風景ヲ稱美シ、又有吉出テ問答ナス拍子ヲフンテ舞遊フ。此有古無願ノ假面ヲ粧フ。次ニ若女舞若キ女ノ假面ヲ粧ヒ扇ヲ持鈴ヲ振リテ舞フ。又老翁ノ假面ヲ粧ヒ出テ問答ス。是ヲ禰宜ト云。次ニ老女舞老女ノ假面ヲ粧ヒ摩多羅神ヲ三拜シ白髮ヲトカシテ化粧スマフシテ神秘アリト云。次延舞數番此舞ハ古風ノ能也。次ニ狂言アリ一山ノ僧各ソノ役ヲ勤ム。



近世梓行ノ鎌倉實記ニ日本ノ源義行ト云モノ金國へ渡リタルト云説金史別本ニアルヲ以テ是ヲ牽合センガ爲ニ許多ノ僞言ヲ設ク今金史ノ文ヲ國字トナシ左ニ載テ示之童蒙詳ナルコトハ本書ニ於テ可考之又正史ニ齟齬シテ紫朱ヲ混亂スル者ヲ辨ジテ之ヲ後ニ附ス。

金史列將傳曰範車國ノ大將軍源光録義鎮ト云ル人ハ父ハ日本陸華仙ト云所ノ權冠者義行ト云シ人ナリ義鎮始メ新鞋鞞部ニ入テ千戶邦判事ノ官ニノホル身ノ長六尺七寸ムマレツキ溫和ニシテ勇猛ニ才思諸部ニ甲タリ外夷ヲ多ク隨ヘタリ拜シテ學官ニ入り禮義ヲ辨ズ後ニ咸京録事ノ官ニ移ル金ノ二代目章宗日本鳥羽院文始四年頃章宗元年也シテ光録大夫ノ官ト爲シ大將軍ニ任ズ範車城ヲ守護シ北方ノ諸國ノ押トナル義鎮ガ父權冠者義行ハ往昔章宗ノ恩顧ヲ蒙ル總軍曹事ノ官トナサレ北嶺ニ入ラシム日數ヲ不歴シテ蘇敵ヲ破リ印府ヲ得テ都ニ歸リ幕下ニ屬ス範車城ヲ築テ守護ス其頃北天竺ニ攻入り龍海ヲ渡テ一ツノ嶋ニ至ル山河奇麗ニシテ悉ク金玉ナリ其所ノ人

ハ靈草ヲ煎ジテ飲物トシ五穀ヲバ多ク食スルコトナシ生類ヲ殺シ食物トナス事ヲ甚嫌ヘリ故ニ人正直ニシテ邪煩ナシ此嶋ニ伊香保ノ行辰ト云ル老仙人アリ本命ノ法ヲ行フ容貌常ノ人ニシテ異恠アルコトナシ徳ハ古人ニマサレリ義行此人ニ歸依シ尊敬シテ長命ヲ得タリ其後唐土ニ往來シテ或ハアラハレ或ハ隠レテ定ルコトナシ。

愚按ズルニ鎌倉實記ノ作者右ノ金史ニ出タル義行ノ名ニ牽合センガ爲ニ本文ニ秀衡ノ異見ヲ書シ義行ノ名ハモト義經ノ訓後京極良經ニ同ヲ以テコレヲインデ頼朝勘氣ノ後鎌倉ニテ名付タルヲ秀衡カ名付タルヤウニ云紛ラシ唐土マデモ義行ト名乗タリト云基本ヲ決定シコレニ細註ヲ加テ以是ヲ潤色シ又評論ヲ書シテ右ノ一條ハ雜記小説ニ依テ記スル故ニ信用爲シ難シト云リ是何ノ言ゾヤ信用ナシ難キ事ヲ舉テ人ヲ惑ワサシムル事如是雜記小説ヨリトルト云ハ高館没落且勳ノ時蛇ノ出タルト云一條ノ事也功記ニ義經蝦夷ニ落タリト云ヨリハ事實鎌倉實記ノ事實ヲ指メ大ニ異ナリナド云ト雖モ他ヨリ見ル處ハ畢竟勳功記ト同日ノ談ナルベシ金史別本ニ義行ト云者仙人ニナリタルヤウニ書シモ又好事ノ者傳聞シテ是ヲ書ニ筆記セシ者ナランカ日東陸華



仙ト云ルハ日本ノ陸奥氣仙郡ノ事杯ヲ云ルニヤ、又栗原ノ華山ヲ云ルニヤ、又陸華  
 仙ト云ル處往昔アリケルニヤ未ダコレアルコトヲ不聞、又義行ト云者金國へ渡リ  
 タルト云ハ虚説ニモ非ン乎、義行ハ義經ノ事也ト云ハ理ニ於テ不當、夫義經ハ智謀  
 武勇他ニ恥ルコトナキ猛將ナル事ハ人ノ偏ク知ル處也、平家追討ノ中我心ニ○伊校本  
 我カ不合事ハ縱令頼朝ノ下知タリト雖トモ不肯クハ之況ヤ諸士ノ異見ニ從ンヤ、己ガ  
 智略ヲ專ニシテ遂ニ蓋世ノ功ヲ成セリ、是以推ス時ハ義經實ニ金國へ遁レタリト  
 モ鎌倉ニ何ノ慕ハシキ事有テ外國ニ在テ名乗ンヤ、義經ホドノ勇猛ノ人ニ非ズト  
 モ敵對セシ方ニテ改メ呼ル名ヲ用ンヤ、平家追伐ノ中鎌倉ヨリノ下知ヲ不用諸士  
 ノ異見ヲ不聞ヲ以不降氣象○伊校本人ヲ可見、秀衡ノ從異見テ志ヲ改メ爲ニ伺頼朝  
 機嫌、義行ト名乗ラバ日本ニ住ヌル中コソ左モアルベキニ、異國へ渡リテ後頼朝ニ  
 何ノ用カ有ン、是金ノ源義行ハ陸華仙ノ義行ニシテ源義經ニハ非ザル事辨ヲ不待  
 シテ分明ナリ、鎌倉實記ノ作者金史別本ノ事ノ似タルヲ見出シ、且松前へ渡リタル  
 ト云俗談モアルニ依テ是ノ如傳會セシナルベシ、是童蒙ヲ欺ノ手段トヤ云ン。

國 衡 塚 七

柴田郡福田村ニ國衡塚アリ、大高宮ノ西○伊校本南ノ田ノ畔ニアリ三町餘ヲ隔ツ、塚ノ  
 上ニ杉ノ古木アリ、國衡義盛カ矢ニ當リテ大串ニ討レシ處ナリ、同郡平村ニ○伊校本  
 國衡馬ヲ深田ニ翔入タル處大高宮ノ北四町餘ヲ隔ツ、山下ノ深田是ヲ馬取沼ト云、  
 今ニ於テ村民是ヲ耕スコトナシ、刈田郡曲竹村ニ白九頭龍ノ社○伊校本、白○伊校本、祠○伊校本  
 ガ屍ヲ此祠ノ邊ニ瘞ミ叢祠ヲ建テ祭之、○一説ニ白崩明神長野ノ邊ニ小山アリ崩テ  
 白ク見ユルナリ、此處ニ西城戸太郎國衡ガ首ヲ埋メテ明神ニ祭ルト云リ。

耳 輪 堂 八

耳輪堂ハ始メ京都六條坊門西洞院ノ西ニアリ、源頼義東征ノ日凶徒ノ耳ヲ悉ク殺  
 テ都ニ携へ此地ニ埋ム、堂ヲ其上ニ建テ等身ノ彌陀像ヲ安置シテ是ヲ薦ス、今其處不  
 詳ト雍州府志ニ云リ。



辨慶納大般若經 九

參河國御油ヨリ吉田ヘノ間ニ小坂井村アリ、此村ニ兔足八幡宮有、社領九十三石、毎年四月十一日此宮ニ於テ風ノ祭アリ、昔武藏坊辨慶吾孀ヘ下リケル時今橋斷絶シテ此所ニ七日逗留シケル内、大般若經六百卷ヲ頓寫シテ此社ニ奉納シケルトテ其經今ニ相傳フ

産湯水 十

産湯水ハ洛陽紫竹村大德寺ノ末寺大源庵方丈ノ南庭ニアリ、相傳フ此地義朝ノ第宅ニシテ義朝ノ愛妾常盤此處ニテ牛弱ヲ産ス、其時此井ヲ汲テ産湯ニ用ユ、土人此地ヲ古御所ト云ト雍州府志ニ出。

光堂三代太刀 十一

○伊校本此項漆万盃ノ次ニアリ

光堂ニ三代ノ太刀アリ、清衡ノ太刀長二尺餘金具鞘等今ニ殘レル處アリ、切先ノ曲

レルヲ其儘箱ニ入テ見セシムル故ニ箱ニカクレテ短ク見ユル也、基衡ノ太刀長一尺八九寸ホト柄鞘ナシ朽ウセタルナルヘシ、秀衡打刀長一尺六寸餘幅一寸二分極大ク一筋細ク二筋アリ是亦柄鞘ナシ、以上三柄ノ刀何レモ錆朽テ金色見エズ、元祿年中ニ棺ノ中ヨリ出セリト云義經ノ短刀長七寸二分是則高館ニテ自殺シタル刀也ト云、義經記ニハ自殺ノ刀ハ三條小鍛冶ガ作テ鞍馬エ納タル刀ノ六寸五分アリケルヲ別當申オロシ義經ノ守刀ニナシタル也ト云リ、何カ實説ナル事ヲ辨ジ難シ。

漆万盃 十二

○伊校本此項常盤之墓ノ次ニアリ

朝日さす夕日かゞやく木の本に漆万はい金億置く。

是古來俗間ニ云傳ヘタル歌ナリ、一説ニハ金億々トモ云リ、郷説ニ漆万盃ノ内ヘ黄金億金ヲ交ヘ土中ニ埋ミ隠シ置テ末世ノ子孫ニ遜リ傳ヘントテ詠シ歌ナリト云リ、其處今何レノ地ナルヲ不知、其朝日夕日ノ照ス樹モ今枯タルナルベシ、里人ノ説ニ金鷄山ノ土中ニ在下云、此山朝旭夕陽ノ照ス處ニシテ方形ノ臺ニ築キ昔黄金ヲ以テ鷄ノ雌雄ヲ造リ土中ニ築キ籠タル故ニ金鷄山ト號スルト云リ、此山毛越寺ノ鬼門ニ當ル



ト云。

按スルニ沾涼ガ江戸沙子ニ是ニ似タル事アリ、昔武藏國多摩郡宿野○伊校本、止野ノ中正觀寺ノ藥師堂棟札ニ朝日長者日蓮カ書タルニハ漆万盃○伊校本、朱千盃黃金千兩錢十萬貫○伊校本、錢十六萬貫朝日サスタ日輝ケ藤木ノ下ニアリト云リ。

常盤之墓 十三

○伊校本此項産湯水ノ次ニアリ

常盤カ墓近江國關ヶ原ト今洲ノ宿ノ間ニ山中ノ里アリ、義經ノ母常盤ガ墓道北森アル處ナリト云リ、又蟠龍子ガ俗説辨ニハ此墓常盤ガ墓ニアラザル事ヲ辨ゼリ

金色堂三代棺 十四

聞老志曰後水尾朝寬永中黃門政宗君治世修補金色堂、次令吏發而點檢焉、清衡棺長六尺廣二尺裏之以白綾、漆其體、納雄劍一口並鎮守府將軍印璽、基衡裏之以白絹、朱其體、櫛白衣、表錦袍、秀衡同之、藏和泉三郎忠衡首函、高二尺方一尺五寸、黑漆、秀衡擊刀長一尺六寸廣一寸二分、用太刀是乃衛府太刀也、俗子以是音之同誤傳其文字、長一尺六寸、出秀衡棺中。

光堂物語 十五

友直嘗得此一册、於俗間、而後問虛實、於關山僧某、某曰此說當有取捨○伊校本思有西京雜記、酉陽雜俎、輟畊錄等類之事、則奇怪、亦不忍捨之、故今載、而以助同志之談柄、矣。陸奥國岩井郡中尊寺村天臺宗關山中尊寺光堂あり、東鑑には金色堂といへり、内外金箔を押して其光甚ク爲に俗に光堂とは云り、内に清衡、基衡、秀衡三代の死骸棺に納て佛壇の下なる板敷の上に置り、然るに星霜を歴る事久しく朽損○伊校本、板敷朽損せるに依て仙臺へ其趣を達し、元祿十二年巳卯の歲に仙臺より破損修覆あり、御作事奉行は遠藤四五右衛門並に御役人を下され別に假屋を立て佛像並に棺を移し置たり、此時右の屍を潛カカに拜見したる者三人あり、中尊寺看主淨心院是は僧の名にして、隣村の小嶋村天台、宗滿福寺住持快尊、中尊寺衆徒之中、櫻下坊一本ニ櫻下本ニ誤ナルベシ也、此人々の物語を記置、こと如左。

一清衡の棺中壇の下に在り、長六尺幅三尺、黒漆棺の上は惣金也、御死骸常の人にして、長は並人より大きなり、色白く見ゆる、裝束は白綾の小袖、黄色裝束也、錦の直垂なり、一



方に太刀一腰、鼻紙袋一ツあり、内に色々の書物有、鎮守府將軍の綸旨有。

一 基衡の棺東北の隅の佛壇の下にあり、棺の長幅清衡の棺に同じ、裝束も同じ、棺は朱塗也、一方に太刀、小道具色々あり。

一 秀衡の棺西北の隅の佛壇の下に有、黒漆前に同じ、一方に太刀、小道具あり。

一 秀衡の棺の傍に伊校本、首桶有、高二尺四方、壹尺五寸、黒漆なり、泉三郎忠衡の首也といふ、一説に泰衡の首とも云り、書付無に依て分明不成。

右三代の棺首桶ともに布を掛堅地にぬりたり、三代何れも白裝束錦の直垂袴也、印は三代各別なり、面体何れも常の人に異らず、小鼻ひしげたり、何れも長並人より大きなり、何れも結跏趺坐なり、清衡御死骸、基衡御死骸、秀衡御死骸と、唐様にて棺に書付あり、右少も虚言に非ず、必疑べからず。

元祿十二年八月日

右之人々、櫻本坊伊校本は翌年死す、淨心院は三年過て死す、快尊は四十餘歳なり、其翌年より狂亂になり、小嶋村を出て其行方を不知、是より先天正年中の事とかや、衆徒之僧數人、彼死骸を見たりしに、其人々或は短命或は盲目となりしこと、偽なき事也と

云傳へり。光堂物語終

愚按スルニ清衡ハ天治元年伊校本、丙午七月十七日ニ卒ス、元祿十二年迄五百七十四年、基衡ハ保元二年丁丑三月十九日ニ卒ス、元祿十二年迄五百四十三年、秀衡ハ文治三年丁未十月廿九日ニ卒ス、元祿十二年迄五百十四年也。

又 十六

可成談云、荒木十左衛門と云人、御使に奥州に下りしに、其少前に光堂の佛の目に入たる金を人の盜し事有、檢議する、逆秀衡か棺をあばきたり、棺五重斗り外は塗たり、内の棺一重は桐の白木なり、秀衡の死骸生けるがごとし、年の程五十餘り、長は中人より少低き也、髪ハ三寸斗なるに形の損ぜざるは此者の徳たるにや、側に泉三郎が棺是はしたゝか成晒頭サシコシ壹ツ有ける、其秀衡が棺の内より枕一ツ、太刀一振、出置て國主の者共が十左衛門に見せたる也、十左衛門は馬を能乗たれば、それを習ふとて、若藤左衛門と云人、奥州迄慕ひ行て見たるとて、茂卿が幼きとき語りき、枕は常の縊り枕也、房までも深紅なるか手にて障れば、蝶の如く手に附となん、太刀は二尺斗、鐔もかう成にて三枚



鍔也、柄は深紅の糸にて巻て中びしなり、鮫に錦を着せたり、柄頭は引通し也と云、鍔付てぬけずと語りし奇怪の物語也。

愚按ズルニ荒木氏ハ公義御目付役也、龜千代君綱村公御幼少ニ付寛文元年五月下旬御同役桑山伊兵衛殿御兩人仙臺へ御下被成候、同年十一月下旬ニ江戸へ御登被成候可成談ニ云ル此人ノ事ナルニヤ。

又 十七

元文三年戊午之秋光堂之事江戸表より御尋ニ因て仙臺より御書上之寫左ニ載す。或覺書に有之候奥州光堂之事秀衡が死骸又泉三郎が棺の事委細被成御尋候御書付之趣承知仕候、光堂仙臺領ニ御座候ニ付而所々御書付に向ひ左之通申上候、一光堂奥州領岩井郡平泉と申所にて秀衡舊跡に而御座候、清衡基衡秀衡三代之死骸入候棺を納堂を建惣様金箔にて濃シ申候、往古より光堂と申來る、右堂之内に納置申候本尊は阿彌陀にて、外諸佛共十一體之内本尊之彌陀一體百年餘以前被盜取候由御座候處、木佛木眼にて目に入たる金を盜まれ候との儀不承傳候由御座候、其處寺號は

中尊寺と申候へ共中尊寺は一山之名に而光堂之別稱金色院と申候。

一秀衡之棺をあはき死骸一覽之事、先年三代之死骸一山之老僧とも之内見申候處損も無之由申傳候、元祿年中光堂修覆之節三人之棺假屋へ移置申候、其時分も金色院一覽仕候處、秀衡之棺斗朽候故か四方へ放き開き申候、板厚壹寸ほどにて内外共に漆にて塗り上を金箔にて濃申候、皮肉は骨に乾付色薄黒く髪は白く一寸ほどと生ひ候様に見え申、長は中人ほどにも見へ申候、年齢は見分り不申候、清衡基衡之棺は破不申候故棺中見不申候、右二ツ之棺は木地を金箔にて濃申候由に御座候、一泉三郎棺は無御座候、秀衡棺之側に泉三郎首桶絹壹端程にて是を巻包置候所、晒頭にて御座候哉包之内は住僧見届不申候由に御座候、一右三代之棺より出候太刀之由ニ而三振光堂に納置申候、枕有之義は不承傳由御座候。

右之通住僧古人共に承候由自國元申登候以上

元文三年八月日

松平陸奥守門

遠藤 文七郎



三條吉次 十八

金商人三條吉次ガ名諸書同カラズ、義經記ニ信高ト云熊坂之謠モ同之、太平記劔卷ニ  
五條吉次季春ト云義經勳功記同之、鎌倉實記ニ末春トス、平治物語ニ奥州金商人吉治  
○伊校本、奥州ト云モノ京上リノ頃ニハ鞍馬へ來リ堀彌太郎ト云シハ此金商人之事  
也ト云リ、又鎌倉實記ニハ三條吉次後ニ堀彌太郎景光トスルト云ハ甚誤リナリト云  
リ○吉次屋敷趾膽澤郡衣川村ニ有、居館門ナトノ舊礎今ニ殘レリ、又山ノ目南磐井川  
○伊校本、近所ニモ吉次屋敷趾ト云ル有、奥州白川ト白坂驛トノ間ニ華龍原○伊校本、  
ト云ル處アリ、海道ノ傍ニ小社有リ、昔三條吉次同吉内同吉六ト云ル兄弟ノ者ハ毎年  
都ヨリ黄金商ノ爲ニ平泉ニ下リタルガ或時此所ニテ盜賊ニ害セラレ、此小社ハ其墓  
ニ詞ヲ立シナリト云、葛籠ヲ捨置タル地故ニ名ツクルトゾ、又分散橋トイフ小橋有リ、  
盜賊金ヲ分散セシ處ナリト云。

炭燒藤太カ石碑 十九

藤太石塔偈併引

郷人傳説 近衛院御宇奥州栗原郡三迫間在藤太者、賦性朴直賣炭爲業、一日有異女來  
宿藤太家強約爲婦、問之自謂京洛之人也、其女知此鄉山内産黄金、教太堀之日多得金太、  
有三子曰橋次、橋内、吉六、不幾太富起家、到今其鄉號曰金生、其鄉内山、上有三子舊館地曰  
南館、東館、西館、其右金山澤蓋藤太堀金地、其左有鷄坂、太積富時作金鷄安山頂有時鳴云、  
山南有藤太古墳、存五輪双石塔、舊蹟今屬郡長佐々木左内田莊内、佐氏天性好善、施仁感  
其誠致富、請余往看之、星霜已經五百餘年、塔石頓倒、文字消磨、余乃述偈記焉、左氏恐其舊  
跡倍滅絕、今特建石刊余偈、引貽之後世云。

偈曰

奇哉藤太至誠深 化女感來富金功

勸只餘双石塔 遺方千古令人欽

凡二百六十九字

時正德乙未年孟夏望後日

臨濟正宗三十五世前住大年河北開創鳳山瑞老人書



源義經ノ宅洛陽楊柳海通北油小路西六條堀川ノ御所趾ニアリ、土佐坊討手ニ上リシ時堀河夜討ト云此處ナリ、今竹藪茂リテ跡ノミ殘レリ、又大宮四條ノ南ニ義經ノ宅ト云ルアリ、庭上遊覽ノ時刀ヲ掛タル松ヲ刀掛松ト云、然ルニ此地ハ細川賴有戰死ノ場ニシテ後ノ人松ヲ植テ徵トナス者ニシテ義經ノ宅地ニハ非ズト云リ、此事雍州府志ニ載タリ○蹴舉水下栗田○伊校本、栗田ニアリ、義經關原與市ガ耳鼻ヲ殺キ並ニ從者十人ヲ斬ル舊蹟ナリ○血洗池義經與市ガ從者等ヲ斬タル刀ヲ洗シ舊蹟ナリ、是亦雍州府志ニ出、奥州江刺郡伊手村ニ源休館ト云アリ、郷説ニ義經ノ居城ト云杉ノ古木アリ此事イブカシ

佐藤忠信ガ愛妾力士ガ塚京三條白川橋西南ノ人家ノ後園ニアリ、一説ニ須藤刑部俊通ノ塔ナリト云ト雍州府志ニ出。

俗説辨云俗説ニ常陸房海尊ハ園城寺ノ者也後ニ義經ニ仕ス高館ノ合戰ノ前山中ニ逃入テ仙人ト成リ今ニ至テ富士淺間湯殿山ナドニ時々出現スト云、今按ズルニ五雜俎ニ明ノ金陵ノ唐詩ト云モノ仙術ヲタシナム、或人家ヲ出テ山ニ入ン事ヲ進ム唐ガ曰家ニ老母アリ出ル事能ハズ世間不孝ノ神仙無シト答フト記ス、依之イハマ海尊ノ如キハ君ヲ捨テ生ヲ貪ル不忠ノ神仙ナラン、九、縱令仙家ニハ彼ヲ宥ストモ其議スルニ倫理ヲ以テセバ其罪既ニ五刑ニ當レリ、又海尊今ニ長ラヘテ居テ處々ニ出現スルコト大ニ非ナリ、二程全書ニ仙術ノ事ヲ論ゼル如ク彼ノ海尊モ常人ヨリハ長命ナリトイハマサモアルヘシ、今ニ長ラヘテ所々ニ現セリト傳フルハイト拙シ。

常陸房海尊ガ事第一卷ニ既ニ舉之、又享保年中常陸國阿波大杉大明神海尊ヲ祭レルガ靈驗之事アリト云テ、彼所へ飛玉フ此所へ飛玉フト云ヒ遠近之人信仰ヲナシ其神輿ヲ近國ニ擔ヒ、江戸ノ方迄擔ヒテ老若是ヲ尊崇セシコト夥シ、遂ニ公ヨリ是ヲ制止セラル、是海尊ノ靈驗ニハアラズシテ畢竟妖僧奸巫等ガ偽リ爲ス事ニシテ



愚昧者ノ惑ヲトル所ナリ、是ヲ禁シメズンバアルヘカラス。

家老館 三

岩井郡東山長坂村ニ家老ガ館ト云アリ、里俗ノ曰是館昔秀衡ノ家老ノ居城ナリト云傳フ、四方離レタル山ノ頂ニシテ甚高シ、上平カニシテ廣シ池アリテ水ヲ貯フト云今ハ島ト爲ス其人ノ名ヲ不傳○石碑有近世里人ノ是ヲ立シト云。

花楯城 二四

花楯城刈田郡圓田村ニアリ、佐藤庄司ガ叔父河邊太郎高綱カ城也、又同村ニ築館城有リ、里人ノ説ニ佐藤太郎ガ城ト云、是又高綱ガ城ナルベシト名跡志ニ云リ。

愚按ズルニ東鑑卷九ニ佐藤庄司ガ叔父河邊太郎高綱ト云リ、高綱トハ俗傳ノ謬リナルニヤ又別人ナルニヤ。

神樂岡 二五

遠田郡篁嶽觀音堂北一町餘ニ願念嶺ト云所アリ、是田村ノ夷賊高丸ヲ殺セシ神樂岡ナリト云。

按ズルニ此外ニモ奥州ノ中ニ神樂岡ト云ル地所々ニアリ。

羽黒山大堂 二六

出羽國羽黒權現ノ堂ヲ大堂ト云秀衡ノ建立也、其素朴ナルコト古代ノ製本、制伊校ト云ツベシ、三山雅集ニ云一記ニ云、鎮守府將軍兼陸奥守藤原朝臣秀衡大堂建立云云、於今秀衡ノ妹德尼子ノ木像在本社之中、又曰藤原秀衡羽黒山登山。

愚按ズルニ三山雅集二卷羽黒山東水著ス、其書ニ德尼子ノ像ハ坐像ニテ一尺五六寸餘モアルベシ、毎年襟卷ヲ製服セシムルト云リ、又按ズルニ鎌倉實記ニ德尼子ノ事アリ。

曰奥州岩城判官代府主兼帶海道小太郎成衡ノ後室德尼ト申ハ、源賴義ノ姫ニテ母ハ多氣權守宗基ガ女ナリ、後三年ノ時義家養女トシテ亘理權守清衡ニアツケテ常陸大椽清行嫡子小太郎成衡ニ嫁ス、其衡カ媒ナリト云○以上ノ兩説不同疑ラクハ是同人



ニシテ異説ナルベシ、系圖ヲ考フルニ秀衡ニ妹ナシ、識者ニ問テ之ヲ決スベシ。

### 長命山城 二七

長命山宮城郡上谷刈村ニアリ、山嶺他ノ木アルコト無ク青樅キナ万本枝ヲ交テ直立セリ、郷人長命山ト云、東鑑ニ泰衡ガ軍兵コモリタル國府中山物見岡ト云ハ此所ナリ、館北ヲ伊谷澤原ト云頼朝ノ陣所也ト云傳ヘリ。

東鑑ヲ考ルニ頼朝ハ此處ニ陣セズ、小山下河邊等ヲ差シ向ケラレ其身ハ玉造郡ニ赴キタマフトアリ、後世誤傳ヘタルニヤ。

### 北條九代記頼朝奥入 二八

北條九代記ノ中頼朝奥入ノ事全ク東鑑ヲ以テ書タリト云ドモ東鑑ニ異ナル事多シ、是世人ニ售ランコトヲ求ルガ爲ニ造言ヲ以テ原文ヲ偽リ飾レリ、又原文ノ傳寫ノ誤アルヲ考ヘズシテ其説ニ從テ之ヲ改メザルモ亦多シ、讀之者本書ヲ參看シ誤ヲ正スベシ、助公法師ガ歌モ本書ニ異ナリ別ニ考ル處有テ然ルカ、予蓄書事不廣シテ多ノ事

ヲ漏シヌル遺憾ナキ事不能。

### 田村將軍建立堂社 二九

或時友人ト夜話ノ次テ仙臺領内ノ田村建立伊校本、田村將軍建立ノ堂社ノ事ニ及ブ、其需メニ應ジテ弟子ヲシテコレヲ封内名跡志ニ考ヘシメ間コレニ增添シテコ、ニ載ス、此外ニモ亦多トイヘドモ悉ク尋求ルニ便ナシ、餘ハ他日ノ考ヲ俟ト云。

一 鎮守八幡宮 膽澤郡八幡村ニアリ東鑑ニ詳ナリ。

一 達谷窟毘沙門堂 岩井郡達谷村ニアリ、東鑑ニ詳ナリ。

一 斗藏觀音 伊具郡小山村伊校本、小田村ニアリ、大同年中建立

一 白山社 江刺郡角掛村ニアリ、田村東征ノ時祈所ナリ。

一 亞玉觀音 仙臺城東石那坂ニアリ、田村東征ノ間ニ宮城ノ産ナル亞玉アタケマ子ト云ル側

室アリ、其人護持ノ觀音ナリ、滿福山圖福寺ト號ス、寺ニ池アリ此池中ニ鹽釜社ノ七ツノ釜ノ内一ツアリト云、二三十年前池中ヨリ其釜ヲ取アケシニ俄ニ大雨降テ池ヘ流レ入タリト云、今池邊ニ注連ヲハエ置リ、釜ノ形今鹽釜ニ在ル釜ニ同シト云リ、



- 一 松嶋五大堂 松島ノ島上ニアリ大同二年田村ノ創立五大尊ヲ安置ス又一説ニ慈覺ノ建立ト云。
- 一 富山觀音 宮城郡手檜村ニアリ大同年中立別當富山大仰寺此山ヨリ松嶋ヲ眺望スル絶景筆舌ノ及ブ處ニアラズ。
- 一 鹽竈社 加美郡四竈村ニアリ田村勸請ト云。
- 一 篁嶽觀音 遠田郡無夷山 篁峰寺ト號ス此山田村ノ舊蹟多シ
- 一 和淵神社 同郡和淵村ニアリ貴船明神。
- 一 牧山觀音 牡鹿郡湊村鷲峰山長禪寺○伊校本 長祥寺ト號ス、本尊秘佛海底ヨリ網ニ入テ得タリ、田村造立又慈鎮ノ開基トモ云
- 一 大武觀音 栗原郡佐沼庄南方村夷賊大武丸カ首ヲ瘞テ大同年中田村建立ス、又大嶽○伊校本 嶽觀音ト云。
- 一 八幡宮 栗原郡二迫庄八幡村ニアリ、延曆年中建立、昔寺アリ小沼山源東寺ト號ス、義家奉納ノ劔甲冑鎗矢等アリ。
- 一 清水觀音 同郡三迫莊岩崎村音羽山清水寺ト號ス。

- 一 小迫觀音 同郡小迫村ニ寺アリ、昔ハ小迫山正大寺ト號ス、今改テ樂峯山勝正寺ト云、坂上田村將軍○伊校本 坂上將軍、俊宗創立ス。
- 按ズルニ坂上田村丸ト藤原利仁トヲ俗誤テ一人ト爲シテ田村將軍利仁ナド、云故ニ、田村ノ子ニ利宗ト云者アルト云説アリテ筆ヲ操テ事ヲ記スル者モ間是ヲ誤レリ、爰ニ坂上將軍俊宗ト云ルモ後世縁記ヲ作レル者ノ妄説ナリ○俗説辨云田村丸ノ子ニ伊奈瀬五郎利宗ト云モノアリト、據ナシ日本後紀續日本紀○伊校本 續日本紀大系圖ヲ考ルニ田村ノ子ヲ廣野麿ト云伊奈瀬五郎ト云モノナシ
- 一 長谷觀音 登米郡水越村ニアリ、寺ヲ遮那山長谷寺ト號ス。
- 一 鱒淵觀音 同郡鱒淵村○伊校本 鱒淵村ニアリ寺ヲ竹峯山華足寺ト云、大同年間田村之乘馬此處ニテ死タルヲ埋テ觀音ヲ建タルト云
- 一 矢作觀音 氣仙郡矢作村長谷山觀音寺ト號ス。
- 一 小友觀音 同郡小友村溪頭山常膳寺ト號ス。
- 一 猪川觀音 同郡猪川村龍福山長谷寺、寶永年中堂下ヨリ堀出セシ鬼ノ齒ト小刀トアリ○右三ヶ處何レモ一丈ニ近キ大佛也。



一五葉山神社 同郡上住村カキアムレ○伊校本ニアリ。

一以上貳拾一ヶ所之堂社各緣記アリ今略之是仙臺領内而已ニシテ不涉<sub>レ</sub>札領矣田村所創立觀音多謂大同○伊校本謂長谷謂大同謂飛彈内匠一夜造立三所之堂之類悉ク信不足名跡志云田村之於觀音到處必立焉號之謂長谷焉田村所信者蓋雍州清水寺之佛也胡爲<sub>レ</sub>絶<sub>レ</sub>皆是後人擬<sub>レ</sub>田村且不辨<sub>レ</sub>所信之事實妄呼<sub>レ</sub>之者又可疑。

大將軍 三十

○伊校本此項ヲ抹殺ス

北川ノ東長部村ニ大將軍里俗ニ此神ヲ大上官ト云神有山中ナリ是何神タルコト云モノアリ誤ナルベシトヲ知レル者ナシ昔ハ里人祭日ニ齋シテ參詣セシト云リ。

愚按ズルニ京東山ニ將軍塚アリ、桓武帝平安城ヲ築キケルトキ此塚ヲ建立シタマヒリトイフ詳ニ雍州府志等ニ見ヘタリ清衡平泉ヲ築ケルトキ平安城ノ將軍塚ヲ移シ勸請シケルナルベシ。

辨慶石 三十一

○伊校本此項ヲ抹殺ス

後花園院享徳三年奥州ヨリ辨慶石入洛スト和漢年表録ニ出タリ。

基衡之室 三十二

東鑑ニ平泉毛越寺大阿彌陀堂并ニ小阿彌陀堂ハ基衡之室宗任ノ女子ノ建立スル處也ト云リ。

按ズルニ鳥海三郎宗任ハ厨川次郎貞任ガ弟也康平五年將軍賴義公ト戰テ貞任ハ誅戮セラレ宗任ハ囚トナリテ都ニ登セラレ此トキ清衡ハ僅ニ二才ニシテ母ノ懷中ニアリ母ト云ハ即貞任ノ妹ニシテ宗任トハ姉妹ノ九族ノ中ナリ然バ宗任カ女子基衡ノ室ト成ルコトヲ得ベカラズ如何トナラバ基衡之父清衡貳才ノ時囚人トナレル宗任ガ女子ナラバ老婦太夫亦可醜ナリト云リ今基衡ト宗任ガ女子トハ老婦太夫トタモ云コトヲ得ズイハンヤ其正ヲヤ是カナラズ別人ヲ誤レル者ナルベシ。



平泉雜記卷之四

藤原清衡生卒考一

鎮守府將軍陸奥出羽押領使藤原清衡ハ父ハ、巨理權太夫經清母ハ安倍賴時ガ女ナリ、七十代ノ帝 後冷泉院ノ康平四年辛丑歲ニ生ル、同五年壬寅九月父經清ニオクレテ後清原武則ニ養育セラレテ子トナル、又一說ニ武則ガ嫡子荒川太郎武貞ガ子トナルト云リ、七十三代 堀河院寛治三年己巳ニ廿九歲ノ時、源義家朝臣ニ加勢シテ武衡家衡ヲ征ス、奥州平均ノ後同六年壬寅三十二歲ノ時陸奥出羽ノ目代ト爲リ、其後奥六郡ヲ領シ陸奥出羽押領使トシテ鎮守府將軍ヲ兼ヌ、同御宇嘉保元年甲戌三十四歲ノ頃江刺郡豊田館ヨリ磐井郡平泉ニ移シテ居館ヲ構エ、平泉館ト號シ奥ノ御館ト稱ス、同御宇長治二年乙酉四十五歲ノ時中尊寺ヲ建立ス、七十四代 鳥羽院天仁元年戊子四十八歲ノ時紺紙金泥行交一切經ヲ書寫セシメ經堂ヲ建立ス、鳥羽院ノ勅願ナリ、即今



ニ相傳ル所ノ經並堂是ナリ、同二年己丑金色堂ヲ造立ス、是今アル處ノ堂佛像是ナリ、七十五代 崇徳院天治三年丙午三月二十五日經堂ニ所領骨寺ヲ寄附ス、此歲改元アリテ大治元年ナリ、此年七月十七日行年六十六歳ニシテ卒ス、即屍ヲ金色堂中央ノ佛壇ノ内ニ納ム其屍今ニ在リ。

基衡卒去二

鎮守府將軍陸奥出羽押領使藤原基衡ハ、七十代ノ帝 後白河ノ保元二年丁丑三月十九日ニ卒ス、屍ヲ金色堂東北ノ隅ノ佛壇ノ内ニ納ム其屍今ニアリト云。

秀衡卒去三

鎮守府將軍陸奥守從五位上藤原秀衡ハ、八十二代 後鳥羽院文治三年丁未十月二十九日卒スルト東鑑卷之七ニ出タリ、義經記ニ文治四年十一月廿一日ニ卒スト云ハ誤ナルベシ、大系圖ニ死スル歳九十二ト云リ、依之考レハ七十二代 堀河院永長元丙子年ニ生レタルニヤ、文治三年迄九十二年ナレバ也、是亦屍ヲ金色堂西北ノ隅ノ佛壇ノ

内ニ納テ今ニ在ト云リ。

賴朝卿送秀衡入道書 四

東鑑ニ云文治二年四月二十四日陸奥守秀衡入道請文、參著貢金等先、可沙汰進鎌倉可令傳進京都、由載之云云是去比被下御書、御館者與六郡主、予者東海道惣官、尤可成魚水思也、但隔行程、無所干欲通信、又如貢馬、貢金者爲國土貢印、爭不督領哉、自當年早予可傳進、且所守勅定之趣也、者上所與、御館云云。

清衡經藏寄文 五

以下ノ文書古來中尊寺ニ相傳フル處アリ、今傳寫ノ本ヲ以寫カ故ニ亥豕ノ誤アルコトコレヲ計リ難シ。

鳥羽院御願

關山中尊寺金銀泥行交一切經藏別當職事

僧 蓮 光 所



所領骨寺磐井郡有之御土入料田淡田町屋敷壹所瀬原ニ有之燒明料屋敷肆所北谷赤岩兩所麓有之瀬原村

之有

每日御佛供料白米二斗可入銅錢貳之自高御倉可被取請之

每月箱掛料上品絹壹疋白布壹段自御改所可被取請之

每月御佛事請僧壹口可被請定

每年正月修正二季彼岸懺法每月文珠講彼以骨寺田畑一向可募之故也是偏聖朝安穩御祈禱無懈怠可令勤仕右件於自在房蓮光者爲金銀泥行交一切經本行內司八ヶ年書寫畢依之且爲奉公且爲器量故御經藏別當職所定也就中令寄進蓮光往古私領骨寺然間限永代任蓮光相傳致御經藏別當並骨寺者不可有他人妨仍可令寺家宜承知之狀如件

天治三年丙午三月廿五日

俊 慶判

金清兼判

坂上季隆判

藤原清衡朝臣判

愚按ズルニ天治ハ七拾五代ノ帝 崇徳院ノ年號三年ハ大治ト改元ス○伊校本、平泉古來ノ説

ニ天治三年七月十七日清衡卒ヌト云リ、前太平記ニ亘理經清ハ康平五年ニ誅セララル、此時清衡貳才ト云リ、然レバ康平四年ニ生ル此年ヨリ大治元年迄六拾六年也。

賴朝卿御下文 六

鳥羽院御願

開山中尊寺御經藏所領骨寺內籠居人等事○伊校本、中尊寺所藏原書籠居雜人等事トアリ今之ヲ改ム

早於雜人等者還本住所可成安穩思○伊校本、安堵思也但限骨寺內境東者鑑懸南者岩井川西

者山王岩屋北者峰山堂之末限馬坂惣於境可限水境也仍所被仰下執達如件。

愚按ズルニ東鑑ニ被下御奉免狀ト云ハ即此書也親義ハ齊院次官親融ナルベシ。

北條相模守貞時同陸奥守宣時文書 七

陸奥國平泉中尊寺衆徒中寺領山野事重訴狀遣之背下知狀致違亂候間差遣使者之處代官明資尙以不承引云云○伊校本、中尊寺所藏原書ニ照招其咎歟、早任先下知可令停止濫妨也者依仰執達如件。



永仁二年十二月廿五日

陸奥守判  
相模守判

五八二

壹岐守殿

愚按ニ永仁八九十一代 伏見院ノ年號二年ハ甲午ノ歲ナリ、鎌倉將軍第八久明親王ノ時ニシテ北條ハ七代目○伊校本、九代目ナリ、壹岐守ハ葛西家ナルベシ。

學頭職補任狀 八

補任

中尊寺學頭職同免田壹町屋敷壹所宇津木根村有之並佛性院同小坊地壹所事

權律師公園

右職任行盛律師今月五日返狀可令領掌之次坊地之事任頼順、應長元年十月廿四日讓狀不可相違仍補任如件。

正和二年三月七日

別當法印大僧都判

愚按ズルニ應長ハ九十四代 花園院ノ年號元年ハ辛亥ナリ、正和同御二年ハ癸丑ナリ、應長元年ヨリ三年後ナリ

從本寺之下知狀 九

一 金色堂密供僧同、經衆等長日供養、法御讀經等退轉之由有其聞、○伊校本、中尊寺ニ「早早」ハ「早云」ノ所職相傳次第云器量勘否可被注進之矣、誤寫ナル如シ

一同堂經由二口所持之族在之云々所詮有二口相傳所持法否可被尋注進之焉。

一 白山無長日大般若並講讀等再以退轉云々守舊觀可令勤行之旨相觸之不敘用可被注進之矣。

一 引募免田之族令懈怠寺役送年序云云可被注申名字之子細同前焉。

一 依怙衆徒等背寺中制法雜居里中御祈禱以下寺役等一向不法云々不漏一人注進同前矣。

一 閣往古防敷令居住里中或背衆徒一同帳文以坊跡並諸堂古跡致種々料作之由有其聞、委細可被注申也矣。

五八三